

2025



グローバル人材育成事業

SGHネットワーク

活動報告書



学校法人東洋大学

東洋大学附属牛久中学校・高等学校



2025

グローバル人材育成事業 SGHネットワーク 活動報告書

【巻頭言】	地球規模で思考のできる真の国際人になるために	6
	2025年度グローバル人材育成事業 取り組み概要	7
	2025年度実施グローバル人材育成事業一覧	9
【授業実践報告】	「グローバル探究」実践報告 哲学（高校）	11
	「グローバル探究」実践報告 哲学（中学校）	13
	「グローバル探究」実践報告 中高一貫コースにおける課題研究の実践と課題	15
	本校における「中国語会話」授業の成果と課題	17
	「フランス語」授業実践報告	19
【校内行事】	All English Days（中学校1年生）	21
	Global Studies Program	23
【生徒活動報告】	第62回茨城県高等学校国際教育英語スピーチコンテスト	25
	英語プレゼンテーションフォーラム（中学生の部）	27
	英語プレゼンテーションフォーラム（高校生の部）	30
	第15回茨城県ローズ杯高校生英語ディベート大会	32
	第11回PDA高校生即興型ディベート全国大会	34
	地球環境ユースサミット 2025 in KYOTO	35
	2025年度全国高校生フォーラム	37
【高大連携】	附属3校 高大連携プログラム SUMMER ACADEMIA 2025	39
【企業等との連携】	【SDGs実践・探究】ワインパミスを活用した循環型大豆生産モデルの世界展開	41
	【STEAM教育講座】文理選択前に理数マインドを育てる STEAM実践プログラム	43
	JICA 筑波高校生国際協力実体験プログラム 2025	45
【グローバルセミナー】	令和7年度 牛久市 国際理解教育講座	47
【受け入れ事業】	2025年度 訪日団受け入れ・交流事業	49
	(1) オーストラリア・オレンジ (2) 中国 (3) インドネシア (4) オーストラリア・アデレード	
【海外研修】	オーストラリア語学研修（牛久市姉妹都市オレンジ市交流事業）〈2024年度〉	51
	春休みオックスフォード研修 〈2024年度〉	53
	フィリピン・セブ島語学研修（高校1年生・グローバルコース）	55
	オーストラリア・アデレード語学研修（高校2年生・グローバルコース）	57
	マレーシア研修	59
	カナダ・バンクーバー語学研修	61
	フィリピン英語ディベート交流会	63
	中華人民共和国駐日本国大使館主催 日本青少年陝西省・甘肅省訪問	65
	オーストラリア・アデレード語学研修（中学校3年生）	67
	フィリピン英語研修（中学校2年生）	69
	オーストラリア・シドニー語学研修（高校2年生・特進コース）	71
	シンガポール研修（高校2年生・中高一貫コース）	73
【国内研修】	日本文化研修 in Kyoto	75
	ブリティッシュヒルズ語学研修	77
【成果と課題】	2025年度本校グローバル人材育成事業の成果と課題	79

◆ JICA 筑波高校生国際協力実体験プログラム 2025

2025年12月20日(土)

P.45へ



◆ 附属3校 高大連携プログラム SUMMER ACADEMIA 2025

2025年8月18日(月)・19日(火)

P.39へ



◆ All English Days (中学校1年生)

2025年11月6日(木)・7日(金)

P.21へ



◆ フィリピン英語ディベート交流会

2025年8月11日(月)～15日(金)

P.63へ



◆ オーストラリア・アデレード語学研修 (中学校3年生)

2025年11月1日(土)～14日(金)

P.67へ



◆ カナダ・バンクーバー語学研修

2025年8月3日(日)～12日(火)

P.61へ



◆ オーストラリア・シドニー語学研修(高校2年生・特進コース)

2025年12月9日(火)～18日(木)

P.71へ



◆ マレーシア研修

2025年7月28日(月)～8月2日(土)

P.59へ



◆ シンガポール研修(高校2年生・中高一貫コース)

2025年12月11日(木)～16日(火)

P.73へ



【巻頭言】

地球規模で思考のできる真の国際人になるために

校長 金 澤 利 明

哲学館・東洋大学の学祖 井上円了先生は、19世紀末から24年間で3回世界周遊の旅に出かけました。最初の欧米視察では「欧米各国のことは日本に安座して想像するとは大いに異なるもの（海外のことは日本にいて想像するだけではなく、実際に見て体験しないとわからない）」として、「体感」の必要性を実感し、現実世界を活きたテキストとして学び、活きた学問とする「活書活学」を提唱しました。

この円了先生の精神を踏まえて、これまで本校では、海外での見聞を広める経験を重視し、現地での語学研修の他、国際交流等を積極的に展開してきました。また、数年にわたるグローバル教育の取り組みの成果は、年度ごとにこのように報告書としてまとめてきました。今年度のグローバル人材育成事業の取り組みとして、授業実践、校内行事、生徒活動報告、高大連携、企業等との連携、海外生徒の受け入れ、海外研修、国内研修などを報告いたします。

近年の温暖化に伴う様々な気候変動への対応、SDGs、地球環境への配慮に加えて、国際紛争への対応等々、これからの国際社会、地球全体を考えていかねばならない課題は山積しています。

現在の国際情勢を見れば、ロシアによるウクライナへの軍事侵攻は、トランプ大統領の仲介も掛け声だけで未だに終わりが見えません。また、東地中海・西アジア地域、いわゆる中東世界では、イスラエルとパレスチナの紛争は2年を超え、停戦協定は結ばれましたが予断は許されません。欧米の主要国等においても自分の国の利益や、自国民のこののみを最優先する風潮が強くなりつつあります。

2026（令和8）年の幕開けには、トランプ大統領は、アメリカ軍を使ってベネズエラのマドゥロ大統領夫妻を拘束して麻薬密売の裁判を受けさせるという、信じがたい事件を起こしました。ベネズエラの主権を犯し、国家元首を国外に連れ出すといったことは国際法上あってはならないことです。

今から約百年前の1928（昭和3）年に、アメリカ合衆国、イギリス、ドイツ、フランス、イタリア、日本など15か国が署名し、最終的にはロシアの前身のソビエト連邦など63か国が批准した不戦条約という国際的な取り決めがありました。主な内容は第1条と第2条です。

第1条 協約国は、国際紛争解決のために戦争に訴えることを非難し、かつ、その相互の関係において国家政策の手段として戦争を放棄することを、その各々の人民の名において厳粛に宣言する。

第2条 協約国は、相互間に発生する紛争又は衝突の処理又は解決を、その性質または原因の如何を問わず、平和的手段以外で求めないことを約束する。

この条約の考え方が、第二次世界大戦の終わる頃の1945（昭和20）年6月の国際連合憲章につながるもので、「いかなる紛争でもその継続が国際の平和及び安全の維持を危くする虞（おそれ）のあるものについては、その当事者は、まず第一に、交渉、審査、仲介、調停、仲裁裁判、司法的解決、地域的機関又は地域的取極の利用その他当事者が選ぶ平和的手段による解決を求めなければならない」とあります。グローバリゼーションが進展した現代に生きる私たち「地球市民」が求めるものは、帝国主義や自国第一の孤立主義ではなく、国際協調であり、戦争のない平和な世界であるはずで

す。この国連憲章の内容を踏まえて日本国憲法前文の末尾には、「われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免かれ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する。われらは、いづれの国家も、自国のこのみに専念して他国を無視してはならないのであつて、政治道徳の法則は、普遍的なものであり、この法則に従ふことは、自国の主権を維持し、他国と対等関係に立たうとする各国の責務であると信ずる。日本国民は、国家の名誉にかけ、全力をあげてこの崇高な理想と目的を達成することを誓ふ。」と結ばれています。この理想の実現のために、本校での学びや、体験活動の中からとくに「世界を読み解く力」を身に付け、「地球規模で思考のできる真の国際人」となってほしいと願っています。

2025年度グローバル人材育成事業 取り組み概要

主事 石塚 俊文

1 育成を図るグローバル人材像

- ・伝統文化に裏付けられた日本人としてのアイデンティティを有する人物
- ・世界の多様な文化を理解し、彼らと共生できる能力を有する人物
- ・地球的課題の本質を見抜く力及び解決を主導する能力を有する人物
- ・世界の人々と協調しながら情報を共有し、意見を発信する能力を有する人物

2 対象生徒

- 【高校】グローバルコース3クラス103名（3年1クラス33名、2年1クラス37名、1年1クラス33名）
特別進学コース 7クラス255名（3年2クラス63名、2年3クラス112名、1年2クラス80名）
中高一貫コース 6クラス196名（3年2クラス70名、2年2クラス62名、1年2クラス64名）
- 【中学校】6クラス193名（3年2クラス63名、2年2クラス67名、1年2クラス63名）

3 事業の目標

次の7つの資質・能力を持つ生徒を育成する。

- ①主体性・積極性 ②異文化理解 ③課題探究・解決能力 ④ICTスキル
- ⑤外国語能力 ⑥プレゼンテーション能力 ⑦コミュニケーション能力

4 事業の内容「学校設定科目『グローバル探究』で育成するグローバル人材」

教科の垣根を超えたグローバル人材育成のための総合的な探究（学習）の時間「グローバル探究」に置かれた4つの科目は、アクティブラーニング、グループワークを中心とした方法で、ICT機器を積極的に利用して行われている。2020年度に全教室にWi-Fiが完備され、2022年度には、中1～高3全員がChromebookをひとり一台所有し、授業で活用している。

- ①国際理解・教養…世界の多様な文化について学び、異文化理解を進めるとともに、日本人の特性や日本が抱えている様々な問題について考え、日本人としてのアイデンティティ確立の一助とする。
- ②哲学…東洋大学の創設者・井上円了の「諸学の基礎は哲学にあり」の教えに基づき、哲学者の思想を通して、哲学的なものの見方や考え方を養う。
- ③キャリア…大学で研究される学問分野、社会における様々な職業について理解し、海外にも目を向けて高校卒業後の進路について考える。
- ④課題研究…各生徒が研究テーマとして現代社会の課題を1つ取り上げ、その原因や解決方法を考察する。課題研究の成果についてはプレゼンテーションを行い、報告書を作成する。

5 課題研究テーマ「望ましい未来の創造」

インターネットの普及や交通機関の発達により、急速にグローバル化が進展し、国内外の様々な人々の価値観に触れることができるようになった現代社会では、よりよい社会のあり方を再定義し、その実現を目指すための未来洞察力、課題発見力、他者と協調する力が必要となる。そこで、本校では生徒が取り組む課題研究のテーマを「望ましい未来の創造」とし、研究活動を進める。また、こうした人材を育成するための教育システムの構築及び、教員が指導・評価するための観点の開発を行う。

(1) 国内外の高等学校・大学・国際機関等との連携

①東工大研究室との連携による未来創造プロジェクト

未来創造プロジェクトでは、現在の社会や市場の延長線上である未来の社会がどのようなものであって欲しいかという「望ましい未来」を創造することを重要なアウトプットとし、未来の社会を共創する未来洞察ワークショップを実施する。

②東洋大学教員・院生との連携によるゼミの実施

研究活動に対する生徒のモチベーションを維持し、成果物をより良いものにするためには、中期的な目標の設定及び、継続的な研究成果報告の場が必要になる。そのため、東洋大学と連携して教員・院生を対象とした研究報告を年に3回程度のペースで実施する。

(2) 実践的な方法を用いた学習活動

①グループワークの実施…日々の探求活動は、生徒4－5人程度で構成されたグループで行う。各グループには担当教員がついて、毎月の目標及びグループメンバーの役割について確認する。教員は生徒の進捗状況を確認しながら、研究活動が円滑に進むようにフィードバックを行う。本校では生徒がひとり一台Chromebookを所有しており、Google Document や spreadsheet を通じて共同作業を行うことができる。

②プレゼンテーションの実施…本校の課題研究では、定期的に自分たちの研究の進捗状況を他者に報告する活動をカリキュラムの中に入れていく。定期的な機会としては、東洋大学の教員・院生を対象とした研究進捗プレゼンテーションがある。また、12月には、留学生又はシンガポール大学の教員・学生に向けた研究プレゼンテーションを行い、英語での研究発表にも挑戦する。

③論文の執筆…高校2年次には、3月までに英語・日本語での研究原稿の執筆を行う。

(3) 校内研修と校外発表…SDGs など人類の課題に関する学習と英語研修を融合した英語インタラクティブフォーラム東洋カップ、Global Studies Program を校内で実施する。その成果を生かし、校外の研究発表会、ディベート大会、外国語スピーチコンテストに積極的に出場する。

(4) 海外研修…オーストラリア研修・シンガポール研修において課題研究に関する報告を英語で行う。

6 事業の評価方法

(1) 自己評価

①～⑦の能力について、次の指標や分析によって、事業成果の評価を行う。

①主体性・積極性…〔指標〕任意参加の海外研修数、国内語学研修（夏休み、冬休み、春休み）への参加生徒数、全国高校生フォーラムなど外部での研究成果発表件数、語学やディベートなど外部コンクールへの参加人数、海外留学者数、海外大学への進学者数

②異文化理解…海外研修行事の前後に行うループリック自己評価、生徒宅でのホームステイ受け入れ数

③課題探究・解決能力…ICT 機器による共同作業の操作記録及び各グループの発話内容を記録し、「グループワーク」と「発話内容」を軸としたループリックを作成、それを利用した評価を行う。

④ ICT スキル…生徒へのアンケート結果分析、ICT を活用した提出物、発表の評価

⑤外国語能力…英検2級（CEFR B1 レベル）以上の合格者数、外国語コンクール（英語・中国語・フランス語）の出場者数、入賞者数

⑥プレゼンテーション能力…校内で実施する課題研究プレゼンテーションや提出された論文・報告書の評価、生徒各自によるループリック自己評価の分析

⑦コミュニケーション能力…定期考査において実施するスピーキングテストの結果、海外研修、海外生徒受け入れ事業への参加生徒によるループリック自己評価の分析

(2) 学外委員による評価

保護者、同窓会、学識経験者、産業界、関係機関、教職員その他校長が必要と認める者をもって組織する学校評価委員会において、本校のグローバル人材育成事業について評価する。

(3) 評価の公表方法

グローバル人材育成事業報告書（2015年度より年1回発行）に掲載し関係機関に配布する。また、学校ホームページにて公表する。

2025 年度実施グローバル人材育成事業一覧

【授業実践】			（参加生徒数）	
項目	期日	対象	中学	高校
グローバル探究	通年	中学校、高校特進・グローバル・中高一貫コース	193	554
中国語	通年	高校グローバルコース・選択者	-	106
フランス語	通年	高校グローバルコース・選択者	-	25

【校内行事】				
項目	期日	対象	中学	高校
All English Days	11/6（木）・7（金）	中学校1年生	62	-
Global Studies Program	10/27（月）・11/1（土）	高校1年生中高一貫コース	-	63
英語インタラクティブフォーラム東洋カップ	3/12（木）	中学校、高1・2 グローバル・中高一貫コース	193	196

【生徒発表・コンクール等参加】（英語スピーチ、プレゼン）				
項目	期日	会場	中学	高校
第62回茨城県高等学校国際教育英語スピーチコンテスト	6/13（金）	水戸市国際交流センター	-	1
英語プレゼンテーションフォーラム（中学生の部）①牛久市大会 ②県南大会	①7/15(火) ②8/1（金）	①本校 ②県南生涯学習センター	5	-
英語プレゼンテーションフォーラム（高校生の部）A部門	8/26（火）	つくば国際会議場	-	5
東洋大学英語スピーチ/プレゼンテーションコンテスト2025	11/15（日）	東洋大学白山C	-	2

【英語ディベート】				
項目	期日	会場	中学	高校
第6回フラワーカップ高校生英語ディベート大会	4/20（日）	オンライン	-	8
第1回高校生英語ディベートMake-Friends Cup West プレ大会	5/5（金）	オンライン	-	9
高校生英語ディベート Sprinter Cup 2025 Online 大会	6/8（日）	オンライン	-	8
日本高校生パラメンタリーディベート連盟 新緑杯 東日本大会	6/15（日）	オンライン	-	6
PDA 全国中学校 即興型英語ディベート合宿・大会 2025	7/13（日）	オンライン	6	-
英語ディベート関西地区交流会	7/28（月）	近江兄弟社高校	-	8
PDA 全国中学校・高校 即興型英語ディベート合宿・大会 2024	8/1（金）・2（土）	オンライン	-	9
第5回 高校生英語ディベート南関東ブロック（広域）大会	8/17（日）	品川女子学院	-	8
SOLA Cup 2025 中学生パラメンタリーディベート国際大会	8/17（日）・22（金）	オンライン	-	3
第7回 Tsukukoma Schools Open	8/23（土）・24（日）	オンライン	-	3
第1回高校生英語ディベート HEnDA Friends Cup 大会	9/14（日）	市立浦和高校	-	8
第15回全国中学生英語ディベート大会	9/28（日）	オンライン	6	-
第7回高校生英語ディベート大会 Make Friends Cup in Chuo University	10/12（日）	中央大学多摩C	-	9
第15回茨城県ローズ杯高校生英語ディベート大会	10/26（日）	水戸第一高校	-	9
第11回 PDA 高校生即興型英語ディベート全国大会 2025	12/23（火）・24（水）	東京大学生産技術研究所	-	3
第8回茨城県パラメンタリーディベート大会	2/1（日）	竹園高校	-	6
第18回ウインターカップ全国高校生英語ディベート大会	2/11（水）	伊奈学園総合高校	-	6
The 6th Mixidea English Debate Cup（高校）	2/23（月）	Learning Tree International School	-	3
第8回日本中学生パラメンタリーディベート大会	2/23（月）	オンライン	7	-
日本高校生パラメンタリーディベート連盟四国九州オープン 2026	3/7（土）・8（日）	オンライン	1	5
Makuhari Pre-Nationals 2026	3/15（日）	オンライン	-	3
第15回日本高校生パラメンタリーディベート連盟杯	3/20（金）～22（日）	オリンピック記念青少年総合センター	-	3
第9回 PDA 中学生即興型英語ディベート全国大会	3/14（土）	オンライン	3	-
第27回関東甲信越地区中学・高校春季ディベート大会	3/22（日）	女子聖学院中学・高校	4	-

【日本語ディベート】				
第30回全国中学・高校ディベート選手権 地区予選	7/14（日）・15（月）	渋谷教育学園幕張中学・高校	4	-

【中国語スピーチ】				
第43回全日本中国語スピーチコンテスト第23回茨城県大会	11/8（日）	駿優教育会館	-	5

【フランス語スピーチ】				
第20回 東日本高校生フランス語スケッチコンクール		仏学院エスバスマージュ		4
第14回 東日本高校生フランス語暗唱コンクール	3/8（日）	慶應義塾大学三田C	-	2

【課題研究発表等】				
地球環境ユースサミット 2025 in KYOTO けいはんなサミット	8/4（月）～6（水）	けいはんなプラザホテル	-	19
2025年度全国高校生フォーラム（英語発表）	12/21（日）	国立オリンピック記念青少年総合センター	-	4
IBARAKI ドリーム・バス AWARD	1/22（木）	茨城県庁	-	6
第11回全国ユース環境活動発表大会 ①関東大会 ②全国大会	①12/6（土） ②1/31（土）・2/1（日）	①TKP ガーデンシティ PREMIUM 品川 HEART ②国連大学		7

【高大連携】				
項目	期日	会場	中学	高校
2025 サマーアカデミア	8/18（月）～19（火）	東洋大学 白山・川越・朝霞C	-	118
高大連携アチーブングリッシュ大学入学前教育	1/26（月）～30（金）	本校教室	-	214

【企業等との連携】			(参加生徒数)	
項目	期日	会場	中学	高校
ユニクロ“届けよう、服のチカラ”プロジェクト	7～10月	本校	63	581
STEAM 教育プログラム	7/7 (月)・15 (火)・17 (木)・18 (金)	本校講堂ほか	-	581
JICA 研修員学校訪問	10/28 (火)	本校	-	79
ユニクロ“届けよう、服のチカラ”プロジェクト	7～10月	本校	63	581
全国ユース環境ネットワーク高校生環境企業研修	1/20 (火)	ジャパンテック・ベッポトル MR センター	-	5
ワインバミスを活用した大豆栽培プロジェクト	2024/9月～継続中	本校	-	16
JICA 筑波 高校生国際協力実体験プログラム 2025	12/20 (土)	JICA 筑波	-	4

【グローバルセミナー (講演会・特別授業)】			(参加生徒数)	
項目	期日	会場	中学	高校
台湾フェア	6/17 (火)	本校マルチパーパスホール他	-	110
外務省講演会	7/10 (木)	本校講堂	-	581
牛久市・国際理解教育講座	6/6 (金)・1/22 (木)	牛久市中央生涯学習センター	-	33
哲学シンキング講演会	1/23 (金)	本校講堂	-	1179
台湾留学セミナー	2/27 (金)	オンライン	-	4

【受け入れ事業】(訪日団受け入れ)			(バディ人数)	
項目	受入期間	受入数	中学	高校
オーストラリア・オレンジ市高校生受け入れ事業	4/16 (水)	15	-	23
中国・江蘇省受け入れ事業	7/7 (月)	11	-	11
インドネシア高校生受け入れ事業	11/20 (木)	31	-	31
オーストラリア・アデレード市高校生受け入れ事業	12/10 (水)～12/14 (日)	16 (ホームステイ)	-	16

【中・長期留学生受け入れ】				
項目	期日	人数	中学	高校
タイ高校生受け入れ	4/8 (火)～12/19 (金)	1	-	-
オーストラリア・オレンジ市高校生受け入れ	10/6 (月)～31 (金)	1 (ホームステイ)	-	1
オーストラリア・オレンジ市高校生受け入れ	2026/1/8(金)～12/23(水)	1 (ホームステイ)	-	1

【海外研修】			(参加生徒数)	
項目	期日	研修地	中学	高校
フィリピン・セブ島語学研修 (高1・グローバルコース)	5/25 (日)～6/1 (日)	セブ島	-	32
ニュージーランド6週間研修	7/12 (日)～8/23 (土)	パーマストンノース	-	1
オーストラリア語学研修 (高2・グローバルコース)	7/20 (日)～8/2 (土)	アデレード	-	36
マレーシア研修	7/28 (月)～8/2 (土)	クアラルンプール	-	10
カナダ・バンクーバー語学研修	8/3 (日)～12 (火)	バンクーバー	-	13
フィリピン・ディベート交流会	8/11 (月)～15 (金)	ミンダナオ島・ブトゥアン	-	4
日本青少年中国訪問事業	10/19 (日)～24 (金)	陝西省・甘肅省	-	5
フィリピン英語集中研修 (中2)	11/2 (日)～8 (土)	セブ島	62	-
オーストラリア・アデレード語学研修	11/1 (土)～14 (金)	アデレード	60	-
オーストラリア・シドニー語学研修	12/9 (火)～12/18 (木)	シドニー	-	109
シンガポール研修 (高2・中高一貫)	12/11 (木)～12/16 (火)	シンガポール	-	61
ベトナム修学旅行 (高2・進学コース)	3/4 (水)～3/8 (日)	ダナン	-	79
ニュージーランド研修	3/3 (火)～13 (金)	ワンガヌイ	-	8
オックスフォード研修	3/7 (土)～23 (月)	オックスフォード	-	10

【海外留学】(1年留学※今年度出発)			(参加生徒数)	
国・都市	期日	現地校	中学	高校
フィリピン・カガヤンデオロ	8/1 (土)～2026/6/14 (月)	Capitol University	-	1
ニュージーランド・ワンガヌイ	2026/1/23 (月)～12/18 (金)	Collinane College	-	1

【ターム留学】				
国・都市	期日	現地校	中学	高校
ニュージーランド・ワンガヌイ	1/23 (金)～4/4 (日)	Whanganui Girl's College	-	1
ニュージーランド・ワンガヌイ	1/31 (土)～4/4 (日)	Whanganui High School	-	1
オーストラリア・オレンジ	2/28 (土)～3/28 (土)	James Sheahan Catholic High School	-	1

【トビタテ! 留学 JAPAN】				
国・都市	期日	現地校	中学	高校
オーストラリア・シドニー	7/26 (土)～8/17 (日)	Navitas English Sydney Hyde park	-	1
オーストラリア・サンシャインコースト	8/2 (土)～8/30 (土)	Lexis English Sunshine Coast	-	1
イギリス・ロンドン	11/1 (土)～12/12 (金)	Nacel English School London	-	1

【国内研修】			(参加生徒数)	
項目	期日	研修地	中学	高校
日本文化研修 in Kyoto	12/14 (日)～17 (水)	京都	-	63
ブリティッシュヒルズ語学研修	1/5 (月)～7 (水)	福島県 British Hills	-	33
課題解決型修学旅行 (高2 進学・スポーツサイエンスコース)	3/4 (水)～8 (日)	九州各地 (6コース)	-	286

「グローバル探究」実践報告 哲学 (高校)

教諭 渡邊 俊介 (地理歴史・公民科)

1. 哲学カリキュラムの刷新の経緯

本学では、2022年度入学生より、高校の「哲学」のカリキュラムを一新した。その背景には、2021年度に、東洋大学系列の京北・姫路・牛久の三校を母体とした「附属三校合同哲学研究会」が発足したことがある。東洋大学の原点である哲学のカリキュラムについて、附属三校であらためて協議することによって、スクールアイデンティティ (以下、SI) を構築する必要性を再認識したためである。

2. 授業実践

(I) 思考ドリル

授業のウォーミングアップとして、多様な意見や考えが想定される短い問いに対する思考実験を行う。5分程度でテーマを紹介し、そのテーマに対して生徒は必ず何かしらの自分の意見が求められる。意見の発表や共有の方法は、口頭・意見カード・chromebook のスプレッドシート、Google スライドの作成など多岐にわたる。意見共有を通じて正解にたどり着く必要はなく (そもそも正解はない)、生徒間の話し合いによって、生徒の思考や価値観の幅を広げることを目的としている。

【思考ドリルの一例】

ビュリダンのロバ ～合理的な選択の是非～	臓器くじ ～自分の命を犠牲にしてまで多くの人の命を助けるべきか～
カルネアデスの板 ～自分の命を守るための他人の犠牲は許されることなのか～	恋に落ちたアンドロイド ～あなた好みにカスタマイズされた「機械」と恋愛できるのか～

(II) 先哲の思想を現代に活かす

古代から近現代までの先哲の思想をヒントに、日常的な問題や生き方を考える。毎回10分程度で、先哲の思想の概要を紹介する。「倫理」の授業ではないので、先哲の思想や用語について詳しく理解・暗記することに主眼に置いてはいない。先哲の思想を通じて、現代の社会問題や日常生活の悩みなどにつながるヒントや意見を生徒が考える。

【「先哲の思想を現代に活かす」の一例】

アリストテレスの「幸福」より	あなたにとって最高の幸福とはどのようなものですか。
ハイデガーの「死への存在」より	仮にあなたの残りの人生が「あと1か月」だとしたら、何をして最後の時間を過ごしたいと思いますか。
レヴィ＝ストロースの「構造主義」より	あなたの考え方や価値観を振り返ってみて、よくよく考えたら個人の主観や意思ではなく、所属する集団や社会の規則やルールに影響されていると思う例を紹介してください。

(III) 井上円了の教育理念

東洋大学「井上円了が志したもの」に応募するため、「チャレンジャー井上円了」の基調授業と、作文をベースに、円了の理念から、現代の私たちが生きるヒントについて話し合う。

【2025年「井上円了が志したものとは」学長賞作文より抜粋】

『チャレンジャー井上円了』のこの章を読み終えて、私は「知を共有することの大切さ」を強く意識するようになりました。学んだことを自分の中だけで終わらせるのではなく、他者と分かち合い、広めていくことが、社会を少しずつ良い方向へ導くのだと思います。井上円了が巡講や哲学堂を通じて示した挑戦の姿は、現代に生きる私たちにも「学んだことをどう社会に活かすか」という問いを投げかけています。総じて、全国巡講と哲学堂時代の円了の活動は、学問を現実社会に結びつけ、人々の生活に役立てようとする強い意志の表れであると感じました。その挑戦は、今を生きる私たちに「知識を広げ、分かち合い、未来につなげて

いく勇氣」を持つことの大切さを教えてくれていると思います。私もこれから学びを深めていく中で、円了のように知識を社会と共有し、誰かの役に立てるような姿勢を忘れずにいたいです。

(Ⅳ) 哲学対話・ディベート

哲学対話は、1960年代にアメリカで始まった「子どものための哲学」に由来する。これは、先哲の思想について教えるのではなく、思考力を育てるものであり、参加者の「対話」を通じて、「自ら考える力」を身につけるプログラムである。昨年度から、誰もが遭遇する身近な事例を手がかりに、ディベート形式で、哲学的論点について考察してもらう手法を取り入れた。教材として、高橋昌一郎『実践・哲学ディベート：〈人生の選択〉を見極める』（NHK出版新書）を扱った。本書は、各課題について、様々な学部属する学生の意見を通じて、「出生前診断を受けるべきか?」「英語の早期教育は必要か?」「美容整形をしてもよいのか?」「AIに自動運転を任せてよいのか?」といったテーマについて、どの考えに共感できるか否か、またそのように考える理由などを協議する実践をおこなった。

3. 哲学の展望と課題

新カリキュラムの哲学も、今年度で4年目をむかえた。新カリキュラムになってから、受動的な授業ではなく、生徒は自由な考えや意見を持って、能動的に授業に参加する必要がある。その形式は概ね生徒から好評である。しかしながら、カリキュラム変更から4年が経ち、その学習効果やSIとしての哲学のあり方を、よりブラッシュアップするフェーズに入っていると考えられる。

①附属三校のSIとしての哲学

2021年の「附属三校合同研究会」の発足以来、当時、哲学教育の推進役であった京北に続いて、姫路・牛久が改革をおこない、哲学教育に変化が生まれ、活性化した。一方で、三校においては、哲学教育の実施年数ならびに教員の共通認識に差があるので、共通のカリキュラムは現在のところ、実施できていない。2026年には、三校の哲学教育の交流の機会として、京北中学・高校において、3月18日（学祖である井上円了の誕生日）に「哲学の日」が実施される。三校の教員が参加し、附属三校の哲学教育の研修会を設ける予定である。この交流を通じて、各校で実践できるものは積極的に取り入れ、哲学教育のブラッシュアップにつなげることが期待されている。三校の哲学教育の実践の内容は異なれども、目の前の事象に対して問いを投げかけ複眼的な視野で考える生徒を育てるといった共通認識は変わらない。東洋大学の原点である井上円了の「諸学の基礎は哲学にあり」ということばを、三校のSIとして足並みを揃えて哲学教育の実践を行っていききたい。

②哲学シンキングの実践

哲学シンキングとは「問いを深く掘り下げて考える力」を育てるための思考法である。与えられた問いにそのまま答えるのではなく、問いそのものを問い直し、本質的な問いへと再構成する営みを重視する。本校では、今年度より未来創生委員会の片岡佑輔教諭が吉田幸司氏（クロス・フィロソフィーズ株式会社代表取締役社長）と連携し、講演会やワークショップを実践している。本校では、今までは地歴公民科の教員が担当する「哲学」の時間のみで授業が完結していた。この実践では、思考法そのものを学習するので、他教科や探究活動や進路学習への応用が期待される。哲学シンキングを通じて、本校においても、複数科目で哲学教育の実践がおこなわれることを期する。

③思考力・表現力の向上への期待

昨今、公募制・学校型推薦入試や総合型選抜などを通じて、課題やテーマに対する個々の意見や考えを、小論文、自己PR文、志望理由書などを通じて表現する場が増えている。筆者は今年度担当クラスの冬期の試みとして、フランスのバカロレア試験を取り扱う。バカロレア試験では「哲学」がほとんどの受験生の必須科目となっている。「労働はわれわれをより人間的にするのか?」「技術はわれわれの自由を増大させるのか?」といった壮大なテーマに4時間かけて挑むことになる。何の準備もなく、回答できると言うわけではなく、フランスの高校3年生は哲学を1年間かけて学ぶ。哲学の授業を通して習得した「思考の型」を用いた解答ができていくかどうかの評価のポイントとなる。「思考の型」とは、問題文中の用語や概念を定義し、問題文から派生する複数の問いを立て、肯定や反対など様々な立場の意見を十分に検討した上で、自分の考えを表現するプロセスである。思考の型を用いて、論理的な文章を書く型を身につけることは、前述の入試などにおいても、十分に活用できることが期待できる力である。哲学教育で培った力を用いて、ゆくゆくは進路実現をする生徒が増えることを目指している。

【参考文献：坂本尚志『バカロレアの哲学「思考の型」で自ら考え、書く』（日本実業出版社)】

「グローバル探究」実践報告 哲学（中学校）

教諭 松村 豪（社会科）・若林 亮太（国語科）

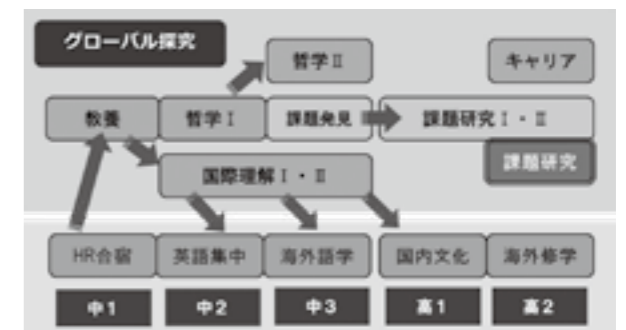
対象：中学2年生（哲学Ⅰ）・3年生（哲学Ⅱ）

実施：（2年A組：火曜6限、2年B組：火曜5限 3年A組：月曜1限、3年B組：火曜6限）

本校は、建学の理念「諸学の基礎は哲学にあり」を母体である東洋大学から受け継いでいる。中学校/中高一貫コースの設立時にもその理念に則って、グローバル探究科目として「哲学」を設置した。そして、2024年度からは既存の「哲学」を「哲学Ⅰ」とし、新たに「哲学Ⅱ」を追加した。本項目では、教科「グローバル探究」における「哲学Ⅰ・Ⅱ」の実践について報告する。

1. グローバル探究の中での哲学

中高一貫コースの5カ年にわたる「グローバル探究」の実施計画の中で、本年度から「哲学Ⅰ」は中学2年次に、「哲学Ⅱ」は中学3年次にそれぞれ1時間が充たされている。1年次での「教養」を土台としながら、3年次での「課題発見」を成立させるための思考力・表現力を育成する時間である。



2. 教育目標

- (1) 東洋大学の設立者である哲学者「井上円了」の生涯と思想について理解を深め、その教育理念の普遍的な価値を学ぶ
- (2) 一つの問題を多面的に思考する批判的思考力を身に付け、課題を発見する力の礎とする
- (3) 他者との関わりの中で新たな価値観と出会うための力を身につける
- (4) 探究成果を発表するための表現技法、ICT 利用法などの諸技術を向上させる

3. 実践報告

3-1「哲学Ⅰ」

①学祖・井上円了の生涯と教育

本項目は、高等学校各コースの「哲学」を引き継いでいる指導項目であるが、一貫コースでは校長による3回の特別授業という形式で実施している。私学の学生にとって創設者の理念を知ることは必須であるうえ、円了先生の生涯は本校が現在教育目標としている「グローバル人材」を体現したものであり、創設者を範とすることで海外研修への意欲を喚起する効果も期待できる。

②クリティカルシンキング・ロジカルシンキング

探究課題を発見することとは、ある情報に対して「探究/検討の余地はないのか」と思考することから始まる。よって課題発見のためには、批判的観点から情報を読み解く訓練が必須である。また、研究を進めるにあたって論理的に考える技能も必要となる。本指導項目では、生徒に類型化した批判的観点・論理的思考問題を提示し、それを取り掛かりとして意識的に批判的思考・論理的思考のきっかけづくりを行う。



③インタビューの技法

中学3年生での「課題発見」で導入している5つの探究技法のうちの一つ、「インタビュー」をここで実践的に訓練する。今回は基本技術を学んだのち、学年外の東洋大牛久中高校教員に対して、自由選択制のテーマでインタビューレポートを作成してもらった。ここでは録音機能、メールの書き方、段組みレイアウトのつくり方を技術として習得している。

④格闘する知・ディベート

議論をゲーム化した活動「ディベート」は、生徒が相互に勝敗を楽しみながら資料調査力、論述力、論理的思考力、論理的表現力などを身に付けることができ、知力を総合的に発達させる効果が高い。またその力が各種大学入試に直結することは、卒業生たちが異口同音に述べている。

⑤アンケートの技法

中学3年生での「課題発見」で導入している5つの探究技法のうちの一つ、「アンケート」をここで実践的に訓練する。仮説を立てた上での設問の立て方、データのまとめ方、分析方法などの習得が目標となる。

3-2「哲学II」

①哲学者論と②思考実験を主な授業内容としてきた。覚えることは重視せず、哲学的な思考に触れ、思考実践することで、探究活動に必要な自由でユニークな思考を身に付けさせることを主目的にしている。

①哲学者論においては、西洋古代から近現代にいたるまでの哲学者の考え方を紹介し、関連する問いに取り組ませた。②思考実験では、架空のエピソードと問いを提示することで、哲学的な思考を実践させた。3学期に新たに取り組んだ③哲学対話では「正解のない問い」についてじっくりと考え合い、話し合っていくことを通して思考を深めるとともに、自分の意見を整理し、言葉にする表現力の向上をめざして実践した。

【問いの例】

哲学者論	思考実験
ニーチェ：超人になるためにどうすべきか。	幸せな囚人：自由を望まない人は自由か。
キルケゴール：自分のすべてをささげられる価値は何か。	ギュゲスの指輪：透明人間になれたら何をするか。
ロールズ：財の理想的な分配状況は何か。	喫茶店で暮らす人々：不利益を与えることになっても正しいことをすべきか。
哲学対話	大人になるってどういうこと？

これらの内容を、生徒たちは哲学者論と思考実験においては①個人での取り組み、②Google クラウドで意見を提出し全体共有といった方法で学んだ。また、哲学対話ではグループ討論方式で学びを深めた。その際に留意したのは、自分の考えに固執せず、様々な考え方を認め合う協調性を育むということである。昨年度の生徒と同様に、最初は正解のない非日常的な問いに取り組むことに戸惑いを見せる様子もあったが、徐々に思考を楽しむ様子や豊かな発想も見えるようになった。



4. まとめ

本稿では、本年度の中学校における哲学教育の新しい試みについて報告した。とくに「哲学II」については二年目の取り組みであり、探究活動への効果がどれほどのものであったかは前年度本稿での指摘通り、分析・評価する必要がある。この点については、今後の課題としていきたい。

「グローバル探究」実践報告 中高一貫コースにおける課題研究の実践と課題

教諭 森山 真帆 (国語科)

1. はじめに

中高一貫コースでは、中学1年生から高校2年生までの5年間で「グローバル探究」の授業を実施している。「グローバル探究」の目的は、自身の探究課題を設定して研究活動を行う中で、課題発見・解決力、論理的な思考力やプレゼンテーション能力を養うことにある。高校2年生で実施するシンガポール研修において、現地大学生に対して英語でプレゼンテーションを行うことを最大目的とし、それに向けて5年間で必要なスキルを身につけられるようプログラムを組んでいる。本稿では、7期生(2020年度入学生)の実践報告と課題研究の概要について報告するとともに、実践の中で得られた今後の課題について述べる。

2. 中高一貫コースにおける授業実践

(1) 中学3年間における「グローバル探究」

本校では中学1年次で「教養」、2年次「哲学」「国際理解I」、3年次「国際理解II」「課題発見」の授業を展開する。「教養」では発表技術、資料収集・検索の基礎を学ぶとともに、人前で発表に慣れることを目標としている。1年次の最後には「学習発表会」として、保護者や級友に向け発表を行っている。「哲学」では思考の技術を習得、「国際理解I」では世界の問題に目を向ける。資料収集の技法や発表技術の向上を目指し、日本語ディベートやインタビュー、ポスターのレイアウト技術の習得などに取り組む。「課題発見」では中学卒業論文の執筆を目標に、研究実践の技術習得、ゼミ指導方式によるポスター・プレゼンテーションスライドの作成、研究要旨の作成を学んでいる。また各教科との連携として、「英語落語」(英語科)、「百人一首大会」(国語科)なども実施している。英語落語ではひとり一題の演目を決め、英語を暗唱するだけでなく演劇として披露している。この経験により英語を覚えること話すこと感覚を身につけていく。中学3年生でのアドレド語学研修でも英語プレゼンテーションに挑戦している。7期生はコロナ禍で思うようにプログラムが進まない時期もあったが、おむねプログラム通り経験を重ねた。3年次には保護者・中学2、3年生を対象にポスターセッション・プレゼンテーションを実施し、研究要旨を冊子にまとめ成果物とした。



図1 日本語ディベートの様子

(2) 高校1年生における「課題研究」

高校1年生の「課題研究」では、中学校3年生で執筆した卒業論文をもとに、発展的な研究課題に取り組んだ。中学の内容を継続しない場合はSDGsにかかわるテーマに限定してテーマの再設定を行った。発展的な研究課題に取り組むために、先行研究を読んだり、自分のテーマがSDGsのどれに当てはまるのかを考えさせたりするなど、研究課題に対して別の角度からのアプローチを試みた。9月の文化祭で中間発表としてポスター・スライド発表を行った。10月からは生徒を4つのグループに分け、それぞれのグループに担当教員がついてゼミ形式で研究活動を進めた。似通った研究テーマである場合はグループで、そうでなければ個人でというように研究の内容によって違いがある。グループであっても発表は各自で行うこ

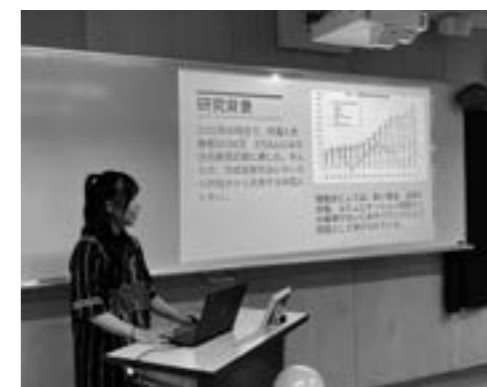


図2 文化祭での発表

ととした。3月には、中学での研究概要・本年度の進捗状況・今後の展望をA4用紙1枚に集約した「中間報告書」を各生徒が作成し、7期生として冊子にまとめた。目的は、担当教員が交代することがあった場合でも、継続した研究の流れを把握できる記録を残すことである。

(3) 高校2年生における「課題研究」



図3 シンガポール研修での発表

高校2年生の「課題研究」では、前年度の研究活動を継続して進めた。9月の文化祭に向け、英語のスライド作成を開始した。文化祭では全員がプレゼンテーションを実施し、質疑応答や教員からのフィードバックをもとに研究を重ねた。12月のシンガポール研修では5グループに分かれ、現地大学生の前で発表を行った。その発表をもとに研究要旨(英語)をまとめ、3月には校内において卒業生・教員・中学3年生・高校1年生を対象に成果発表会を実施する予定である。中高一貫コースでは例年3月に高校2年生の発表を実施している。7期生も先輩たちの発表を見てきたので、イメージをつかみやすい。同様に後輩たちも自分の1年後2年後の姿を想像できる。この縦のつながりは中高一貫コースの大きな強みと言えるだろう。5年間の「グロー

バル探究」活動をベースに総合選抜型入試に挑戦する生徒も多い。

3. 今後の課題

今後の課題研究の活動を充実させるにあたっては、課題研究及びその他の課外活動の連携について取りまとめるグローバル探究科の設置が必要であると考え。1期生の頃から続く課題研究であるが体系的な指導体制の確立が十分であるとは言えない。特に高校での活動においてそれが顕著である。また、その他の課外活動などとの関係性が整理されていないためにそれぞれの活動が単発的になりがちである。英語での発表・論文執筆なども外国語科との連携が欠かせないが、「課題研究」の担当教員に外国語科の教員が必ず配置されるわけでもない。生成AIを活用して論文執筆を行う生徒も多く、英語力の向上という側面からは外れているように感じる。グローバル探究は本校の大きな柱である。このカリキュラムを進化させていくためにも「グローバル探究科」の設置を検討することも必要であると考え。

本校における「中国語会話」授業の成果と課題

教頭 鈴木 伸一 (国語科)

1. 「中国語会話」授業とその成果

中国語の履修形態を一部変更して3年目となる。グローバルコース1年生は全員が「中国語会話」必修で33名が受講、2年生は必修選択制で「中国語会話」28名、「フランス語会話」9名、3年生は「中国語会話」25名、「フランス語会話」8名となっている。この変更は、生徒の進路の多様化等に対応するために行った変更であるが、3年間の推移は同一傾向で、本校のグローバルコースの特徴である「中国語会話」の設置がよく浸透しているためか、「中国語会話」受講者の方が多かった。

必修化して10年目を迎えたグローバルコース設置の「中国語会話」全体では、86名が学んでいる。グローバルコースは「英会話」も必修のため、3年間で英語と中国語またはフランス語の2か国語が身につくというアドバンテージをもっており、その位置も確かなものとなり、本校の志願理由のひとつになりつつある。さらに、全コースから選択が可能な放課後に実施している外国語自由選択授業「中国語会話」は、今年度は例年並みの20名の受講者となった。すべての中国語の授業受講者を通算すると、106名となっている。中国との学生派遣事業、招聘事業とも、国際情勢の変化等の影響により激減したと言ってもよい。しかしながら、今後あるいは未来の友好のために、中国語を学ぶことは文化や社会を学ぶことにも通じるため継続していくことが大切だと思われる。生徒が学んだ中国語を直接的に活用できる場は減少しているものの、中国語スピーチコンテストは毎年実施され、学習の重要なメルクマールになっている。スピーチコンテストは、語学学習には非常に効果的なコンテンツであり、学習の到達度を測るうえでも有効である。

本年度の参加結果は以下の通りで、5名エントリーし、4名の受賞となった。

「第43回全日本中国語スピーチコンテスト茨城県大会」(主催：茨城県日中友好協会)

日時： 2025年11月8日(土)

場所： 水戸駿優教育会館

主催： NPO法人茨城県日中友好協会

結果： <中高生 朗読部門>

最優秀賞 吉岡 結南(1年) 茨城県代表として全国大会へ推薦

優秀賞 金子 実礼(2年)、城 由奈(2年)、新田 珠怜(2年)

担当教員(小林信二先生)所感：

朗読部門の課題は初級者には難しい。かなり多めに中国語独特な発音(巻舌音、鼻音)や、中国語ならではの言い回し(聞かせどころ)があり、それらが技術点の対象とされていることは容易に想像できる。募集要項にも記載されていたが、登場人物各人の声色を変えるなどの演出も必要であり、当然評価の対象となっていたはずである。そして文末にある核心部をどのように表現するか。「訴える」ように発声すべきか、或いは「優しく諭すように読みあげるか」は、審査員の好みが変わるところであろう。

本校参加者には、これらポイントは練習時から理解をさせており、各人が自分なりの作品に仕上げていた。全員が練習時よりも良い出来であった。各人の技術的な差は殆どなかった。あえて受賞に差がついた点をあげれば、「声のトーン」ではないか。日頃からの話す声が低い。そのため全体的に暗い印象となり、ともすれば棒読み聞こえてしまう点などが改善すべき点であろう。

最優秀賞の吉岡結南さんは、茨城県代表として全国大会へ推薦され、録音による音源審査にてエントリーできたが、本大会への出場は叶わなかった。次年度に期待し、他の生徒も語学力を磨き、再度挑戦して欲しい。

詳細は別報告に譲るが、本校が中国語スピーチコンテスト茨城県大会に毎年出場・受賞していることから、茨城県日中友好協会より、中華人民共和国駐日本国大使館主催の「日本青少年陝西省・甘粛省訪問」に、本校生5名・

教員1名を推挙していただき、2025年10月19日(日)～10月24日(金)の6日間、中国を訪問させていただいた。中国訪問には、今回のスピーチコンテストにエントリーした生徒も含まれており、実際に中国語を使用する機会を得られ、かけがえのない経験となった。



2. 「中国語会話」授業の軌跡と展開

本校の「中国語会話」の授業は、1996年ごろから始まった。その当時は、中国語に親しむといったコンセプトで、授業としては教養主義的な内容を標榜していたと思う。その転機を迎えたのは、2012年の「アジア大洋州地域及び北米地域との青少年交流（キズナ強化プロジェクト）」への参加である。このプロジェクトは、外務省の進める多彩な国際交流プログラムである。その一つとして、当時の温家宝中国国務院総理からの2011年の東日本大震災被災地の高校生500名の中国訪問招請が接したこと、外務省が、“被災地青少年が隣国である中国に赴き、各被災地の復興状況について広く発信するとともに、中国の青少年との間で交流を深め、隣国との絆を深める”、といった趣旨のもと実施されたものである。本校では、学校改革の一つとして、SGH認定を目指し、学校をあげてグローバル事業に取り組んでいる時期であり、好機となった。本校からは生徒40名の参加が叶うことになった。被災地域の代表という任も帯びていたため、茨城県庁、牛久市役所、大津漁港にて被災状況を調査したり、職員や地元の方に、震災時の状況、復興状況、放射能汚染状況等を説明して頂いたりし、事前準備を周到に行って参加することとした。

上記の事業への参加以降、本校の国際交流は、それまで行ってきた豪州にとどまらず、アメリカ、カナダ、イギリス、フィリピン、シンガポール、モンゴル等の多くの国々の青少年との交流へと変化していった。そうした状況下で、生徒自らが、自らの言葉でコミュニケーションをとりたいという、ごく当たり前の意欲が醸成され、学校として、グローバル事業の発展を企図し、英語教育のみに注力するのではなく、環太平洋の国々との交流を念頭において、中国語教育にも力を注ぐこととしたのである。2013年には、王彤先生が着任され、学外団体が主催する中国語のスピーチコンテストを中国語教育の中にうまく取り入れ、現在は、「全日本中国語スピーチコンテスト」出場の常連校になるまでになっている。

その後も、JENESYS2.0中国高校生訪日団短期招聘プログラム、ティーンエイジアンバサダー中国派遣及び招聘、アジア高校生懸け橋プロジェクト、北京外語大研修ツアー、台湾宜蘭縣中学生受け入れ、台湾留学フェア等、多くの事業に学校をあげて積極的に参加し、本校のグローバル教育の特徴として、中国語教育を据えつつ、多角的に育てているところである。「中国語会話」授業をさらに豊かにするために、学校設定科目「国際理解」を設定し、中国の文化や習慣等幅広く学ぶ機会を作った。こうした授業と、語学としての中国語授業が相乗して、本校の奥行きのある中国語教育がなされている。2023年度から、小林信二先生をお迎えし、これまで培った中国語教育を礎に、新たな中国語教育の展開を目指している。

かねてからの私の願いとしては、中国語学習が単なる語学習得のためのテクニカルなものになって欲しくないということである。生徒と教師の血の通った授業、その文化的背景も含め、深く理解し合えるような授業の場を提供し続けられたらよいと考えている。それは、もちろん座学にとどまるものではなく、積極的に“交流”することによってより豊かな実りを生むものである。“交流”こそが、発展の源泉である。

2025年後半には、国際状況の変化により、これまでの交流が難しい状況となっている。現状はそうした環境下にあるが、後世を担う若い世代が、未来の友好のために国際交流の灯を絶やさないうで欲しいと思う。生成AIの時代となったが、拙くても人が発する言葉を通じたコミュニケーション、言葉の襞のようなものまでも感じながら通じ合えたら、真の交流が可能となるはずである。

「フランス語会話」授業実践報告

専任講師 Glenn Serviss (外国語科)

1. 年間目標

- ①初級フランス語の学習を通じて、外国語で楽しく、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する。
- ②フランス語の特有なリズムやイントネーションなど、音声的な特徴、話す速度などを身に付ける。
- ③文法と会話の同時進行によりフランス語の基礎を確実に身に付ける。
- ④外部のイベントや大会に参加し、他校の生徒と交流を図る。

2. 年間指導内容

- ①受講者25名(必須:高校2年生9名、3年生8名;自由選択:1年生1名、2年生7名)
- ②使用教科書『パラレル1』(白水社)
- ③年間指導計画(週2単位、毎週火曜日と木曜日実施;自由選択は火曜日と木曜日の7限に実施)

月	自由選択1年目、グローバル2年生	自由選択2年目	グローバル3年生
4月	・発音、アクセント、リエゾン、アルファベ ・あいさつ	・`er 動詞 ・疑問文、所有形容詞	
5月	・名詞の性と数、不定冠詞と定冠詞 ・指示の表現	・会話:家族と親戚 ・動詞 aller, venir	
6月	・主語人称代名詞 ・動詞 être	・前置詞と冠詞の縮約 ・疑問形容詞	
7月	・形容詞の一致、数詞(1~60) ・会話:あれは何ですか	・人称代名詞 ・数詞(61~100)	
8月	・自己紹介	・会話:映画館に行く	・会話:映画館に行く
9月	・場所を示す前置詞	・場所を示す前置詞	・場所を示す前置詞 ・動詞 faire, voir
10月	・国と国籍 ・身分や職業	・動詞 faire, partir, voir	・近接未来形 ・近接過去形
11月	・動詞 avoir ・否定形、指定形容詞	・近接未来形 ・近接過去形	・疑問副詞 ・会話:休日バカンス
12月	・会話:ホテルのフロント	・疑問副詞	・曜日と12か月
1月	・`er 動詞	・会話:休日バカンス	
2月	・疑問文 ・所有形容詞	・曜日と12か月	
3月	・フランス語の映画鑑賞	・フランス語の映画鑑賞	

3. 成果と課題

(1) 外部のイベントや大会参加

- ①第20回東日本高校生フランス語スケッチコンクール
実施日:2025年11月22日(土)
参加者:2組(4名)一貫コース1名、グローバルコース3名
- ②第14回東日本高校生フランス語暗唱コンクール
実施日:2026年3月8日(日)
参加者:グローバルコース2名

(2) フランス語の授業の評価 (2025年3月実施生徒アンケート結果)

評価	フランス語の授業 (回答数 26名)
大変満足した	77% (20名)
満足した	15.3% (4名)
普通	7.7% (2名)
やや不満だ	0
不満だ	0

(3) 課題

一貫コースの自由選択フランス語会話を取るのが3年間継続になったため、学歴別指導の同時授業を行った。1年目の生徒と2年目の生徒の授業を独立するために、指導者を2人に増やし、同じ教室で同時に2つの授業を行った。英語によるフランス語の授業は、生徒にとって贅沢な教育環境である一方で生徒を混乱させる環境でもある。フランス語を生徒の母国語である日本語で教えることが必要だと感じた。



1. アフリカのフランス語圏で人気のクスクスを賞味した。



2. フランス産のお菓子パーティー



3. フランス語スケッチコンクールにて、課題「Kamo L'agence Babel」を演じる様子。



4. フランス語暗唱コンクールにて、課題「Maghreb/Maroc」を発表する様子。



5. フランス語スケッチコンクールにて、課題「WEEK-END」を演じる様子。

All English Days (中学校1年生)

教諭 金本 卓樹 (数学科)・特任教諭 久松 和仁 (社会科)

期 日：2025年11月6日(木)、7日(金)

場 所：本校マルチパーパスホール、J1A、J1B、J2A、J2B、技術室 (講師控室)

参加者：中学1年生 62名

講 師：インタラック (外国人講師6名、担当者1名)

1. 目的

- ①英語を1日中集中して学ぶことによって、語学力の向上を図る。
- ②少人数制で学ぶことにより、普段より発言の機会を増やし、語学力の向上を図る。
- ③ネイティブスピーカーから学ぶことにより生きた英語に1日中触れることができ、英語の力をつけることができる。

2. 内容

1日目 11月6日(木)

時限	時間	内容	場所
1	8:55~9:45	事前学習・準備時間	J1A,J1B
2	9:55~10:45	オープニングセレモニー、自己紹介、Warm Up ゲーム	MPH
3	10:55~11:45	チャレンジ アクティビティ 1	J1A, J1B, J2A, J2B,
4	11:55~12:45	チャレンジ アクティビティ 2	J1A, J1B, J2A, J2B,
(昼休み)			
5	13:30~14:20	CM 作成 (アイデア出し、練習、準備)	J1A, J1B, J2A, J2B,
6	14:30~15:20	CM 作成 (アイデア出し、練習、準備)	J1A, J1B, J2A, J2B,

2日目 11月7日(金)

時限	時間	内容	場所
1	8:55~9:45	事前学習・準備時間	J1A,J1B
2	9:55~10:45	CM 作成 (練習、準備)	J1A, J1B, J2A, J2B,
3	10:55~11:45	チャレンジ アクティビティ 3	J1A, J1B, J2A, J2B,
4	11:55~12:45	チャレンジ アクティビティ 4	J1A, J1B, J2A, J2B,
(昼休み)			
5	13:30~14:20	チャレンジ アクティビティ 5	J1A, J1B, J2A, J2B,
6	14:30~15:20	CM 上映、クイズショー、クロージングセレモニー	MPH



3. 生徒の感想

【アンケート結果】(6)～(9)は主な回答

項目	そう思う 5	4	普通 3	2	思わない 1
(1) イングリッシュデイに参加して良かったですか？	90.38%	7.69%	1.92%	0.00%	0.00%
(2) 英語で話すことに対する自信ができましたか？	32.00%	42.00%	24.00%	0.00%	0.00%
(3) 他の国の文化に興味がありましたか？	51.92%	28.85%	15.38%	3.85%	0.00%
(4) 時間は適切でしたか？	67.31%	13.46%	11.54%	5.77%	1.92%
(5) またこのような行事に参加したいと思いますか？	80.77%	15.38%	1.92%	0.00%	1.92%

(6) 今回のプログラムの中で、何が楽しかったですか？

<回答> 英語でのCM作成、アクティビティ、ALTの先生と話すこと

(7) 今回のプログラムの中で何がためになりましたか？

<回答> CM作成で自分の意見を英語で伝えなければいけなかったところ、グループでの共同作業

(8) ALTたちと話してみようと思ったか？

<回答> 英語を聞こうとしてくれて優しくなった。
どの先生もとてもフレンドリーでとても楽しかったです。
いろんな個性を持つ先生がいて、話して楽しかったし面白かった。
わからないことがあっても優しく教えてくれました。

(9) イングリッシュデイの感想を書いてください。

<回答> はじめはALTと会話ができるか不安だったが、意外と今までやった範囲でもなんとか会話ができ、とてもフレンドリーで最後の方は英語での会話をするのが楽しくなっていたので、もっとたくさん英語を学んで海外の人ともっと話せるようになりたいです。
イングリッシュデイズでALTの先生方と会話でき英語に自身を少し持ててよかった。また参加したいと思った。

4. 成果と課題

本研修では、ALT講師との交流を通して、授業中の指示や活動がすべて英語で行われる環境を体験することができた。生徒は、身振りや表情、既習表現を手がかりに英語を理解しようとする姿勢を見せ、英語で伝え合うことへの抵抗感が軽減された。また、簡単なあいさつや自己紹介、質問への応答などを英語で行うことで、「英語は教科として学ぶもの」だけでなく、「使うことば」であるという意識を高めることができた。さらに、ALT講師の発音や表現に直接触れることで、英語の音やリズムへの関心も高まった。一方で、英語のみで進行する活動に戸惑う生徒もあり、理解度や積極性に個人差が見られた。今後は、事前・事後の学習との関連をより明確にし、段階的な活動構成や支援の工夫を行うことを次年度の課題としたい。



Global Studies Program

教諭 野崎 環 (数学科)・教諭 青木 敏史 (外国語科)

期 間：2025年10月27日(月)～11月1日(土)

場 所：本 校 (高校1年S、T組 教室)

参加者：中高一貫コース 高校1年生 63名

1. 目的

- (1) 海外の一流大学に在籍している大学生・大学院生と英語でディスカッションすることでアカデミック英語に触れ、英語力の向上を図る。
- (2) グローバル社会で必要とされる資質であるポジティブシンキング、アイデンティティ、リーダーシップをテーマとしたり、あるいは人権、貧困、環境などの世界の諸問題について議論したりすることにより、グローバル社会で必要とされる知識やコミュニケーション能力を身につける。
- (3) 世界各国からの留学生と様々な問題について学び、課題探究のテーマ設定、内容改善に役立て、次年度実施予定のシンガポール研修の事前学習とする。



2. 内容

	10月27日	28日	29日	30日	31日	11月1日
8:55 9:45	■オープニング ■アイスブレイク 自己紹介 ■ゴールの確認	■ウォームアップ 価値観について考える - 留学生によるスピーチ	■ウォームアップ 自分らしさを表現する	■ウォームアップ Day 1-3の振り返り	■ウォームアップ 最終プレゼンテーションの練習	■最終プレゼン 各グループから1～2名を選出。代表者が全体に発表 ・フィードバック
9:55 10:45	■英語で話してみる ■アクティブに質問をする ■Goal Setting	■無意識に持っているバイアスを知る	■自分らしくいるためには？相手にも自分らしくいてもらうためには？	■グループ・アクティビティ SDGsに関連したディスカッション	■最終プレゼン 各自グループ内で発表 ・講師からのフィードバック	■グループリーダーとのディスカッション
10:55 11:45	■社会的アイデンティティについて考える	■文化によるレインズ、世界を見る際のバイアス	自分が自分について知っていること、人が自分について知っていること	(前時間と同じ)	この日のみ、3、4限は通常授業	■プログラム全体の振り返り ■クロージングセレモニー ■修了証授与
昼休み	昼休み	昼休み	昼休み	昼休み		
12:55 13:45	■個人のアイデンティティについて考える	(前時間と同じ)	■プロジェクト グローバルなイベントについて考える	■最終プレゼン準備 ・自分の強みは何か？ ・原稿作成		
13:55 14:45	■自分のもつスキルや才能、強みとは	■自分の所属するコミュニティについて考える	(前時間と同じ)	(前時間と同じ)		
振り返り	振り返り	振り返り	振り返り	振り返り		

3. 成果と課題

アンケート調査結果

(1) プログラム前後の気持ちの変化について（パーセンテージにて）

	そう思う		どちらかといえば そう思う		どちらかといえば そう思わない		そう思わない	
	プログラム 前	後	前	後	前	後	前	後
英語をもっと勉強したいと思う	44.8	<u>52.5</u>	44.8	<u>41.0</u>	6.9	<u>4.9</u>	3.5	<u>1.6</u>
英語を話すのが楽しいと思う	22.4	<u>54.1</u>	44.8	<u>37.7</u>	24.1	<u>4.9</u>	8.7	<u>3.3</u>
海外に行ってみたくと思う	50.0	<u>57.4</u>	19	<u>27.9</u>	20.7	<u>8.2</u>	10.3	<u>6.5</u>
世界のこともっと知りたいと思う	36.2	<u>52.5</u>	39.7	<u>41.0</u>	19.0	<u>4.9</u>	5.1	<u>1.6</u>
様々な国の人と積極的にコミュニケーションを取りたいと思う	31.0	<u>57.4</u>	44.8	<u>32.8</u>	17.2	<u>4.9</u>	7.0	<u>4.9</u>
将来の夢や目標を見つけていきたいと思う	48.3	<u>57.4</u>	34.5	<u>26.2</u>	12.1	<u>13.1</u>	5.1	<u>3.3</u>

「そう思う」の数が全て増え、逆に「そう思わない」の数は全て減っている。

(2) 今回のプログラムはどうでしたか。

非常に満足 (70.5%) **満足 (24.6%)** 期待したほどではない (1.6%) 不満足 (3.3%)

(3) プログラム前・プログラムに期待すること（記述）

生徒①「今回のプログラムで沢山の人とコミュニケーションを取り英語で話す力を高めたいです。」

生徒②「周りの空気のみこまれず、自分らしく楽しみたい。特に、Speaking力を伸ばしたい。ある程度は話せても、日本語から英語への切り替えが遅いと思うから、その部分を改善していきたい。」

(4) プログラム後・プログラムで身に付いたと考えること（記述）

生徒①「英語を話す力が身についたのはもちろん、パーソナリティ、SDGs、本音と建前など普段考えないことについて学びました。またチームリーダーが『あなたの英語は良いので自身を持って!!』と教えてくださいました。」

生徒②「個人のアイデンティティや性格を尊重すること。偏見をもたず、自分自身のことも友達のこともしっかりと考えることができた。」

この行事は一貫コース1期生の頃より続く、伝統ある行事である。生徒は活動が始まると最初は不安な一面を見せ、戸惑いもあった。しかしファシリテーター及びグループリーダーの留学生が非常に高校生とのコミュニケーションに慣れていることもあり、すぐにほとんどの生徒がこのアクティビティに慣れたようである。授業での発表はアイコンタクトなどを意識できない生徒たちが自分に自信を持ち、堂々と話すようになる姿が見られた。この姿から見ても、非常に有意義な活動になったと思われる。閉会式では誰に言われずとも、生徒が自主的に寄せ書きを英語で書き、感謝の意を講師のみなさんに伝えていた。生徒の気持ちを伝えられた講師の皆さんも感激してくださり、より精神的な結びつきがコミュニケーションの円滑さにつながることも学ぶことができたのではないだろうか。教員から見ても、生徒の人間的な成長が促された、忘れられない数日間となった。

第 62 回茨城県高等学校国際教育英語スピーチコンテスト

専任講師 Glenn Serviss (外国語科)

期 日：2025年6月13日(金)

場 所：水戸市国際交流センター

参加者：高校3年生1名(グローバルコース)

1. 目的

海外に関する知識と国際理解についての知識を深める。

2. 弁論大会規定

- (1) 弁論内容：国際理解、国際交流、国際協力、国際ボランティア活動に関するもの。
- (2) 弁論時間：4分30秒以上～5分以内（4分30秒未満及び5分超過は減点）
- (3) 審査内容：論旨（70点）・態度（15点）・音声（15点）

3. 成果

本校から出場した生徒は、「Global Comparison: One of the Keys to Improving Japan's English Education（世界との比較：日本の英語教育を改善する鍵の一つ）」というタイトルでスピーチを行い、茨城県高等学校国際教育研究協議会長賞（第5位）を受賞した。この生徒はグローバルコースでの様々な国際交流行事を通じ、自らの経験や思考を英語で分析・発表したことで、着実に英語力を向上させた。その結果、3年次の大学入試（総合型選抜）では英語面接に臨み、明治大学、獨協大学、学習院大学のすべてに合格するという素晴らしい成果を収めた。

4. 課題

本校では、生徒の実践的な英語力を引き出すため、各種英語コンテストや外部行事への積極的な参加を促し、個別指導にも力を入れている。しかし、多くの生徒にとって人前で英語を発表することや、学外のレベルに挑むことへの心理的ハードルは依然として高く、参加を勧めても気後れしてしまう例が多い。英語スピーチコンテスト等への参加者をいかに増やしていくかが今後の課題である。



スピーチコンテスト参加者（グローバルコースの高校3年生）

(入賞者スピーチ原稿)

Global Comparison: One of the Keys to Improving Japan's English Education

In 2020, Japan started a new national curriculum for elementary schools to improve English education. Then in 2023, the government set new goals—hoping junior high and high school students could reach Eiken Grade Pre-2 and 2. But, even with these reforms, Japan still faces many challenges.

Today, I'd like to share my thoughts on how Japan can improve its English education by comparing it with other countries. According to a global English ranking from last year, Japan was 92nd out of 116 countries—our lowest ever. Despite the recent reforms, students still struggle to use English in real-life situations.

Let me start with my experience. I study English mainly for exams. In our lessons, we focus on grammar and vocabulary for test scores, but I don't have enough opportunity to speak. So even though I have been studying for years, using English in daily life still feels scary or uncomfortable. Based on my observation, a lot feel worse than this.

Since 2020, English classes have become more common in elementary schools. But the teaching style and quality still differ across schools. In some schools, homeroom teachers teach English, while in others, teachers who specialize in English do. Also, there are still not enough ALTs, so many students don't get to hear natural English or learn about other cultures. These differences affect how students learn.

Now, there are also schools like IB or international schools where subjects are taught in English, just like in the Philippines or Hong Kong. But in Japan, these schools are still rare. And we lack teachers who can teach other subjects in English. So it's difficult to give students real English experiences.

Let me now talk about what I've learned from other countries. In the Philippines, English is everywhere—on TV, social media, and in daily conversation. One of my teachers is from the Philippines, and she told me that many kids there start learning English at around age four. Since English is a part of everyday life, students naturally get used to it.

My friend from Hong Kong had a similar story. She said they learn English in English—teachers don't use Chinese when explaining new words. This helps them get used to thinking in English. This is exactly the opposite in Japan.

Another key difference that I want to emphasize is the mindset. In countries like Vietnam or the Philippines, people see English as a way to connect with the world. In Japan, many students still think of it as just a school subject. They don't really imagine using English for work or studying abroad, so they're not very motivated. Some might say countries like the Philippines use English more because they were once colonized. That's true, but that doesn't mean Japan can't improve. Countries like the Netherlands or Sweden weren't colonized either, but their English proficiency ranking is high. It shows that the right approach matters more than history.

So, what can Japan do to improve? First, I think we should start English education earlier. If children in other countries can start learning at 3 or 4, why not in Japan? I know that kindergartens focus on playing and may not have trained teachers, so maybe starting in the first grade with a good plan would be better.

Second, English classes in junior high and high school should be improved. We need to hear and use English every day. Even if it's simple English at first, it's important to get used to thinking and talking using the target language, not just memorizing for tests.

Third, we need to change how we see English. English is a way to meet people, learn about culture, and discover new ideas. If students believe that they'll be more excited to learn, we should show more real examples of how English is used in real life.

Of course, while we work to improve English, we also need to protect our own language and culture. In the Philippines, my teacher said many local languages are being lost because of learning other languages like English. In Japan, we should be careful not to lose what makes us unique while learning another language. I believe that with better teaching, the right mindset, and support, Japan can build an English education system that really prepares students for the future. Thank you for listening.

英語プレゼンテーションフォーラム (中学生の部)

教諭 井上 博人 (外国語科)

期 日：<牛久市大会> 2025年7月15日(火) <県南地区大会> 2025年8月1日(金)

場 所：<牛久市大会> 本校 <県南地区大会> 茨城県県南生涯学習センター

参加者：中学3年生5名

担当者：井上博人、マーロン・バクラーン

主 催：茨城県教育委員会 茨城県教育研究会

1. 目的

グローバルな視野を持ち、英語で自分の意見を発信し、他者と協働しながら課題を解決することができる人財を育成する。

2. 内容

(1) 発表について

1校3名から5名のグループで、テーマについて、5分以内で英語によるプレゼンテーションを行う。その後、やり取りのための準備の時間(1分間)をとる。最後に、4分間でその発表内容について、リスナー側のグループと英語での交流(シェアリングタイム)を行う。

(2) テーマ 「茨城をよりよい県にするために、SDGsの視点でできることを提案しよう！」

(3) 審査の主な観点・配点

- ・ **Content** (現状分析、独自性、提案性、論理的構成) 30点
- ・ **Delivery** (英語表現の正確さ、流暢さ、プレゼンテーションスキル) 20点
- ・ **Effectiveness** (協働的な発表、資料提示) 10点
- ・ **Sharing Time** (やり取り、アクティブリスニング、対話の継続、サポート)
プレゼンター側 20点 リスナー側 20点

(4) スピーチ原稿

Help Our Kappa Before It's Too Late: Exposing the Silent Crisis of the Dying Waters in Ibaraki Skit

Minami: Hey, what's that? Something is moving in the water.

Ayaka: It is bald... like my uncle.

Aya: It has a shell like a turtle.

Yuma: Wait! Is that a....

All: A Kappaaaa

Juri (Kappa): (Jumps out from the water) Please don't hurt me. I mean no harm. I am scared of going back to the water.

Ayaka: Why? Did you forget how to swim?

Juri (Kappa): I am serious. The water is polluted. It's dirty. The fish are coughing! The turtles have trash hats! Even my grandma Kappa is sneezing bubbles! All living beings in the water are suffering.

Yuma: Whoah! That's bad.

Juri (Kappa): (Sad) Please help me. If the water gets worse, humans are also affected.

Minami: Guys, do you know what I am thinking?

All: Operation.. KAPPA RESCUE CAMPAIGN!

Aya: First, we have to identify the current situation, and the causes of water pollution in Ibaraki.

Minami: In Japan, industrialization is a huge contributor to water pollution. Wastewater from factories

and farmland is dumped into the lakes and ocean. Another cause is the domestic wastewater from the surrounding residents. Among the dirtiest rivers in Japan are: Sakuragawa and Tonegawa which are connected to Kasumigaura in Ibaraki Prefecture.

Ayaka: The Green Growers in 2021 stated that since 1955, water quality in Kasumigaura and the surrounding rivers has been deteriorating. At present, serious problems continue to emerge: / mass death of freshwater clams and farmed carps, blue-green algae outbreaks, and foul odor in the surrounding area.

Juri (Kappa): You sounded like a pro Ayaka! I didn't see it coming! All: (Laughing)

Ayaka: So how do we solve it?

Minami: Other places in Japan have projects to combat water pollution. They have:

- Wastewater treatment through Artificial Wetlands, Green Infrastructure, and AI Powered Water Management
- Precision Agriculture and Smart Fertilizer Use
- Intensify the implementation of control of plastic use and household detergents.
- Lake-Friendly Certification System
- and many more

Aya: Yeah, these are not yet done in Ibaraki sadly because of lack of fundings. The government is prioritizing other infrastructures. I hope Ibaraki will realize that this problem is a looming threat to everyone and that this problem can impact negatively in the future.

Juri: As Junior High School students, how can we help fight water pollution? **Yuma:** At home, we can do 3Rs

Ayaka: What's a 3Rs? is that, Ramen, Rice, Repeat? I am soooooo hungry now.

Aya: That's not it Ayaka. The 3Rs means Reduce, Reuse, and Recycle.

Ayaka: Oh! I know that!: To Reduce, we should remember to:

1. bring our own reusable water bottles.
 2. say "no" to plastic utensils, and bags in shops.
 3. print both sides of the paper
- This way, we can reduce plastic and paper waste.

Aya: To reuse, we need to:

1. bring our own eco bags when shopping.
2. bring our old clothes to thrift stores
3. use school supplies that can be used again.

Yuma: To recycle, we have to:

1. separate our trash properly especially the burnables and non-burnable garbage.
2. take pet bottles and caps to recycling bins
3. donate books and old clothes to donation centers

Juri: That's great! I grow very fast, so I have a lot of old clothes at home! **Ayaka:** You mean Kappas also wear clothes?

Juri: Yeah sometimes.

All: Whaaaaat????!!!

Minami: You mean, you want to discuss these with our fellow students at school? That's boring. I could sleep during your lecture. I have an Idea! Ayaka, you are a member of seitokai, right?

Ayaka: yes, and why?

Juri (Kappa): Maybe she won because she's popular at school?

Ayaka: Shhhhhh! Kappa, quiet! You want me to push you back to the pond?

Minami: how about proposing a plan to do an "Eco Product Design Contest"

Ayaka: And what's that?

Aya: I think I know that! That is a competition where students have to make eco-friendly and sustainable products, right?

Minami: That's right! but we have to focus on one theme: "Fighting Water Pollution." This will encourage our fellow students to think creatively through problem-solving innovations.

Yuma: Detergents are the most common pollutant we have at home. How about adding an "eco-friendly soap making" to the competition?

Aya: Another category can be making rags out of old clothes. Let's name it "Old Clothes, New Rags."

Ayaka: Oh! I also have an idea. Using old clothes, we can make tote bags, DIY aprons, even hair scrunchies and some other fashion accessories. I would love to model them! What do you think, Kappa?

Juri: Ahhhhhmm... the idea is really good, but about the modeling part, you are not trying to become popular, right? Are you running again in the election next year?

Minami: All right! That's enough! We have to start preparing for the event. We have to do this to help Kappa go back to the pond safely.

Juri (Kappa): (teary-eyed) Thank you guys, You are the best humans I've ever met... also, the only ones who didn't run away screaming. But seriously. Can I come to your school for the event?

All: Oh No!!!

----- The End -----

ALL: Thank you so much for listening.

3. 成果と課題

参加生徒たちは積極的に準備に取り組み、大会では素晴らしい発表を行った。準備から大会まで多くの時間を費やして英語を学習することができ、英語力を向上させることができた。今年度も牛久市大会を勝ち抜き、県南大会へ出場することができた。県南大会を勝ち抜き、県大会へ出場するためには、参加生徒の英語でのコミュニケーション能力をさらに高めることが課題である。そのためには学校の設定する学習到達目標に基づき、年間指導計画に英語プレゼンを位置付け、生徒の英語での発信力を高める必要がある。



令和7年度英語プレゼンテーションフォーラム（高校生の部）

専任講師 Glenn Serviss（外国語科）

期 日：2025年8月26日（火）

場 所：つくば国際会議場 Leo Esaki メインホール、中ホール300

参加者：高校2年生4名（中高一貫コース2年生、グローバルコース2名、高校3年生1名（グローバルコース）

担当者：井上博人、マーロン・バクラーン、ルース・タバラ

1. 目的

海外に関する知識と国際理解についての知識を深める。英語でのプレゼンテーションを通して、広い視野から郷土や国家、国際社会を理解し、その発展のために貢献しようとする意欲と態度を育てるとともに、ICTを活用しながら、英語を使って双方向的かつ論理的にコミュニケーションを図る力を高め、「国際県・茨城」を担う生徒の育成を図る。

2. 内容

A部門（Advanced Level）

ア 演題：自由とする。ただし演題を設定し、その演題について課題を明らかにし、提案を行う。

イ 制限時間：7分から10分。

ウ 質疑応答：発表終了後、発表内容について審査員と英語での質疑応答を行う。

<生徒発表原稿（短縮）> Title: Making Sense of Australian Slang オーストラリアのスラングを理解する

Background

Maybe there are cultural differences between countries. For example, when complimenting someone's appearance, in Japan, people often say things like, "You have big eyes" or "Your nose is so tall." But in Australia, they don't say that about the parts of the face. They compliment their belongings, their hair, their clothes, because it would be rude to say anything about facial parts. So, is it because of cultural differences between countries? Let's check it out together.

Method

Then, the goal of our investigation is to investigate the differences between Australian and Japanese slang, and to aim to acquire the ability to use slang accurately and appropriately in each culture. We made a questionnaire on paper for Australian students. We asked two schools to answer the questions. 30 students answered them. The schools we asked questions to were Adelaide Botanic High School and Reynella East College. We asked 3 questions in our survey. The first question is "Have you ever used a slang word that can mean both something good and something bad?" The choices are yes or no. The second question is "Do you think cultural background influences how people understand slang?" The choices are yes or no and if yes, a brief explanation and why. The third question is "Have you ever misunderstood someone because they used slang that had more than one meaning?" We were happy to see so many interesting responses.

Research result

In response to the first question, 81.5% of Australian high school students responded that they had used Australian slang with both positive and negative meanings. As examples of such slang, they gave mate, bro,



bloody, lol, and so on. In response to the second question, 74.1% of Australian high school students answered that cultural background influences how people use slang. Furthermore, some Australian high school students answered that this was due to linguistic reasons. Lastly, in response to the third question, 92.6% of Australian high school students answered that they had never misunderstood slang used by other people.

In summarizing the results, most Australian high school students have used a single slang term that has both negative and positive meanings. Furthermore, most Australian high school students have never misunderstood the meaning of slang used by others. In other words, although some Australian slang terms have multiple meanings, Australian high school students were able to use and understand them perfectly.

Experiment

The most important thing was that there seemed to be cultural differences between countries in the use of slang. However, this gives rise to one question. That is, why do differences arise based on national culture? To find out, we conducted a study as an extension of our research. As a result, we discovered why Japanese people tend to use slang incorrectly. First compared to Japanese slang such as やばい, それな and so on, in Australian slang, there are many words that have multiple meanings or have complex usages. For example, "cheers" can mean "thanks," "goodbye," or "toast," and 'mate' can be used to express friendliness, annoyance/warning, or aggression, depending on the situation. Furthermore, "bloody" can be used to emphasize both positive and negative meanings, depending on the context. However, Japanese speakers often learn Japanese on the assumption that meaning is unique. This is because in Japanese, most words have only one meaning, which makes them likely to misunderstand the nuances and meanings in Australian slang. For example, most Japanese people study thinking that the only meaning of "cheers" is "kanpai."

Recommendation

Therefore, we believe that this approach to language learning among Japanese people has contributed to their failure to communicate effectively with Australians. So what should we Japanese people do? In order to eliminate misunderstandings during conversation, we should not define the meaning of a word based on a single meaning. Let's learn all the different meanings of that slang/word! By doing so, we can enjoy conversations with Australians by using slang.

All right! Now you know perfectly well the difference between Japanese and Australian slang! You can't go wrong anymore. Don't make the same mistake again.

Yeah! I'll try not to make any more mistakes, and I'll try not to miss any more conversations. Thank you so much! It's made me grow up. Let's learn some Australian slang so that we can enjoy talking with Australians when you have the opportunity to meet them. Thank you for listening.

3. 成果



「Making Sense of Australian Slang」を発表した生徒たちは、異なる学年やコースから構成されたグループだったが、見事なチームワークを発揮した。オーストラリアでのフィールドワーク（インタビュー及びアンケート調査）、原稿作り、スライド作成、ジェスチャーの工夫などの役割をメンバーで分担し、それぞれの力が結集した発表で大会奨励賞を受賞した。



第15回茨城県ローズ杯高校生英語ディベート大会

教諭 井上 博人 (外国語科)

期 日：2025年10月26日(日)

場 所：茨城県立水戸第一高等学校

参加者：高校生9名(1年生2名、2年生7名)

担当者：井上博人、マーロンバクラーン

1. 目的

広い視野から郷土や国家、国際社会を理解し、その発展のために貢献しようとする生徒の意欲・態度を育てるとともに、英語による実践的なコミュニケーション能力を高めることで、「国際社会で活躍できる人材」の育成に資する。

2. 内容

(1) 参加条件

- ①全国高校英語ディベート連盟 (HEnDA) による「メイク・フレンズ憲章」を厳守できること。
- ②県内の高等学校、中等教育学校後期課程の生徒であること。ただし、英語のネイティブスピーカーは不可。
- ③以下の海外生活経験者等の条件に該当する者はチームに2名まで登録できる。
(試合ごとの出場制限は設けず、条件該当者も各試合最大2名とも出場可。)

 - ・英語を第一言語とする国で12ヶ月以上滞在経験のある生徒(就学前の滞在は不問)
 - ・英語を第二言語とする国の出身である生徒(就学前の滞在は不問)
 - ・家庭で常的に英語を使っている生徒

(2) チーム構成

1校1チームまたは2チームとし、選手登録はそれぞれ4名～6名とする。試合へ出場できるのは4名で、試合ごとにメンバーを入れ替えてもよい。ただし、2つのチームからメンバーを入れ替えることはできない。

(3) 対戦方法

	スピーチ	時間	肯定	否定
1	Affirmative Constructive Speech (肯定立論)	4 min	A1	
	Preparation Time (準備時間)	1 min.		
2	Questions from the Negative (否定質疑)	2 min.	A1	N4
3	Negative Constructive Speech (否定立論)	4 min.		N1
	Preparation Time (準備時間)	1 min.		
4	Questions from the Affirmative (肯定質疑)	2 min.	A4	N1
	Preparation Time (準備時間)	2 min.		
5	Negative Attack (否定アタック)	3 min.		N2
6	Questions from the Affirmative (肯定質疑)	2 min.	A3	N2
7	Affirmative Attack (肯定アタック)	3 min		
8	Questions from the Negative (否定質疑)	2 min.	A2	N3
	Preparation Time (準備時間)	2 min.		
9	Affirmative Defense (肯定ディフェンス)	3 min	A3	
10	Negative Defense (否定ディフェンス)	3 min		N3
	Preparation Time (準備時間)	2 min.		
11	Affirmative Summary (肯定総括)	3 min	A4	
12	Negative Summary (否定総括)	3 min		N4

予選を4試合行い、その結果に基づき、上位1・2位のチームが決勝、3・4位のチームが3位決定戦を行う。ただし同一校から上位のチームが複数出た場合は、上位のチームのみが決勝または3位決定戦に進むとともに、5位以下の学校のチームを繰り上げる。

(4) 論題

Resolved: That the Japanese Government should ban children under 16 years old from using social media.

日本政府は16歳未満の子どもがソーシャルメディアを利用することを禁止すべきである。是か非か。

3. 成果と課題

今大会は茨城県立水戸第一高等学校を会場として行われた。本校からは2チームが参加し、Aチームが3位入賞を果たした。全国大会への出場権は県大会の上位2チームに与えられるため、惜しくも出場権を確保することはできなかったが、今年度の本校チームは昨年度に比べてレベルアップしており、非常に惜しい僅差での勝敗であった。

準備型のディベートは、主張の根拠となるエビデンスを示さなければならないルールとなっている。準備に多くの時間を割かなければならない反面、取り組んだ生徒の英語力は飛躍的に向上する。しかしながら、準備の負担が大きいため、途中でドロップアウトしてしまったり、練習に積極的な姿勢を持てなくなったりする生徒も少なくない。

そのような中、今年度は生徒たちが主体となって準備や練習試合に取り組んだ。その結果、着実にスキルアップし、好成績を残すことができた。今後の課題は、今年度の実績を参考に、準備の負担が大きい「準備型」と参加しやすい「即興型」をバランスよく取り混ぜることである。生徒のモチベーションを落とさずに継続して取り組めるよう、さらなる体制を構築していきたい。



第11回 PDA 高校生即興型ディベート全国大会

教諭 井上 博人 (外国語科)

期 日：2025年12月23日(火)・24日(水)

場 所：東京大学 生産技術研究所 コンベンションホール

参加者：高校2年生3名(中高一貫コース)、見学者：中学3年生4名

担当者：井上博人



1. 目的

一般社団法人パラメンタリーディベート人財育成協会(PDA)では、グローバルに活躍する人財育成の一手法として、英語での発信力、論理的思考力、幅広い知識・考え方、プレゼンテーション力、コミュニケーション力などの複数の力を効果的に訓練可能な即興型英語ディベートを推進している。本大会では、即興型英語ディベートの普段の練習の成果を試し、全国の高校生と議論を交わすことで、さらなる成長・学習意欲を促すことを目的とする。授業での取り組み成果を発揮できるよう、形式は授業導入可能なフォーマットである。

2. 内容

今回も昨年度に引き続き対面式とオンラインとのハイブリッドでの大会であった。本校はこれまでの英語ディベートの取り組みが評価を受け、全国大会に選抜され出場することができた。本校から3名の生徒が参加し、全国の強豪校と英語で議論を交わし、熱戦を繰り広げた。論題は以下の通りである。

論題(論題は、毎回ディベート開始15分前にはじめて発表されます)

予選1: Universities should prioritize regional diversity over academic performance in admissions.

(大学は、入試において学力成績よりも地域的 다양性を優先すべきである。)

予選2: Japan should abolish the mandatory retirement age.

(日本は、定年制を廃止すべきである。)

予選3: Japan should abolish tax exemptions for foreign tourists to address overtourism.

(日本は、オーバーツーリズム対策として、訪日外国人への免税を廃止すべきである。)

予選4: AI decisions are better than politicians' decisions.

(人間の政治家による判断よりも AI による判断の方が良い。)

準々決勝: In group decision-making, one should follow the majority.

(集団意思決定において、多数派に従うべきである。)

準決勝: In foreign policy decision-making and execution, the judgment of diplomats should be prioritized over that of heads of government.

(外交の政策決定・実施にあたり、首脳よりも外交官の判断を優先すべきである。)

決勝: Japan should possess nuclear weapons. (日本は核兵器を持つべきである。)

3. 成果と課題

結果: 2勝2敗 コミュニケーションポイント116 98チーム中64位

今年度は授業で英語ディベートを導入する学年、クラスを増やし、課外活動として練習や他校との練習試合、さまざまな大会出場をするなどして、英語ディベート活動の量を増やした。その結果、大会に出場することができる生徒も増えた。また、大会では優秀な学校と対戦しても遜色ない戦いぶりができるようになった。英語ディベートに関わる生徒たちの上達は確かなものとなってきたが、大会で上位に入るためには練習量を増やし、レベルの高い学校との試合などを行うなどさらなる工夫が必要である。



地球環境ユースサミット2025 in KYOTO

主事 石塚 俊文 (地理歴史・公民科)

期 日：2025年2月～10月

場 所：〔導入講座・本講座〕オンライン

〔けいはんなサミット〕けいはんなプラザホテル及びけいはんな学研都市の各所

〔最終発表会〕ハイブリッド開催(けいはんな学研都市及びオンライン)

参加者：海外高校生28名、国内高校生26名〔うち本校生19名(2年生14名、3年生5名)〕

主 催：地球環境ユースサミット2025実行委員会(事務局：総合地球環境学研究所)

共 催：京都超SDGsコンソーシアム(京都大学、総合地球環境学研究所、京都市、京都府、リコー、安田産業グループ、JT、三洋化成、セブン&アイホールディングス、マクドナルド、エフピコ、大和リース、象印、トーカイグループ、ワコールホールディングス、モノファクトリー、SATO、エコ〜るど京大、いきもの倶楽部 KONOMI)

1. 目的

グローバル社会において自身が周囲と連携して成し遂げたいことを伝え共感を得る力や、それを実現するスキルを身に着けた人材の育成とネットワーキング。

2. 内容

(1) 導入講座…オンライン開催、参加は任意

日時：〔説明会〕2/4(火)13:00-15:00、〔第1回〕2/16(日)13:00-15:30、〔第2回〕3/2(日)14:00-16:30、〔第3回〕3/15(土)14:00-16:30

内容：前年度外国人参加者の発表、ゲストスピーカーのプレゼン、SDGsに関するディスカッション

(2) 本講座…オンライン開催

①キックオフ会〔第1回〕3/29(土)13:00-16:00

②ゲストスピーカーによるプレゼン、ディスカッション

〔第2回〕4/13(日)15:00-18:00、〔第3回〕5/10(土)15:00-18:00、〔第4回〕5/25(日)14:00-17:00

③グループワークの経過報告

〔第5回〕6/14(土)15:00-18:00、〔第6回〕7/5(土)14:00-17:00、〔第7回〕7/27(日)15:00-18:00

内容：参加者は10グループに分かれ、地球環境問題に関するテーマを一つ設定し、議論を行う。各グループはメンターや各界の先輩との交流の下で、提言などに繋がるアウトカム(ポスター及びスライド)の作成を目指す。

(3) EXPO 2025 大阪・関西万博ステージ発表(希望者)

4/23(水) EXPO ホールステージイベント「KYOTO Meeting」

パフォーマンス、トークセッション、ファッションショー(本校生1名参加)

5/4(日) 関西パビリオン「MEET UP KYOTO きょうと大集合」ステージイベント

「京都超SDGs検定〜かるた大会〜」(本校生2名参加)

(4) けいはんなサミット

<1日目> 8/4(月) 全体集合&オリエンテーション、けいはんな視察&交流ツアー(下記5グループ)

グループ1・2「南陽高校コース」: 岩船寺拝観、南陽高校にてディスカッション(地域活性化・自然保護等)

グループ3・4「木津高校コース」: 木津高校システム園芸科の生徒との交流、茶畑・加工設備の見学等。

グループ5: けいはんな学研都市コース ATR(国際電気通信基礎技術研究所)、福寿園 CHA 遊学パーク

<2日目> 8/5(火) 地球環境ユースフェス!

すごろく形式の環境学習やフリーマーケット、最新技術体験(VR等)、特別講演(日本マクドナルドの持続可能な取り組み)、グループワーク中間発表(ポスター発表)

<3日目> 8/6 (水) ラップアップ対話

前日の中間発表へのフィードバックを受け、今後の実行計画（アクションプラン）の策定、
終了後、先進施設見学（任意参加、カーボンニュートラル技術の見学など）

※8月中：オンラインにてグループワーク

(5) 最終発表…9/1 (月) 最終発表動画公開、10/11 (土) 「けいはんな宣言」発表

<最終発表内容>

- グループ1：地球にやさしい&効率的なパーム油生産 How to produce palm oil effectively
- グループ2：環境保全のための教育方法の提案 Education about Environment
- グループ3：過剰なスクリーンタイムによるストレスのための「ソウルノート」Mental Health & Solutions
- グループ4：若者による生物多様性保全のためのプラットフォーム構築と研究
Edible Bioplastics & Environmental Education
- グループ5：センザンコウから考える人と自然の共生野生動物との共生
Poaching of Pangolins
- グループ6：日本とインドネシアでの環境汚染と生態系への影響
Ecosystem & Pollution
- グループ7：フードロス削減のための3 in 1 アプリ開発食糧問題と
SDGs Food issues based on the SDGs
- グループ8：インドネシアと日本の廃棄物処理方法の比較 Waste Management: Indonesia vs Japan
- グループ9：ファストファッションの真の功罪を明かす Fast fashion: unraveling the true cost
- グループ10：海ごみ問題解決による海の保全 Resource circulation and biodiversity

3. 成果と課題

(生徒感想より)

①異文化交流とコミュニケーションの気づき

- * 海外へ行った経験がなくても、環境問題という共通のテーマがあることで、リラックスして話すことができました。
- * ルームメイトのお祈りの習慣を間近で見たり、ハラルフードを実際に目にしたりすることで、本で読むのとは違う「生きた文化」を学べた。
- * 休憩時間にインドネシアの学生と日本のアニメの話で盛り上がり、意外な共通点に驚いた。

②英語学習への意欲と「伝える」難しさ

- * ネイティブ相手なら単語で通じるが、第2言語として英語を使う者同士では、正確な文法がないと議論がごちちなくなると痛感した。
- * 賛成の時に「Nice idea!」ばかり使っていたが、自分の感情をもっと正確に伝えるために多様なフレーズを学びたいと思った。
- * 最初は緊張したが、勇気を出して話すと仲間が真剣に耳を傾けてくれ、自分の自信につながった。

③環境問題への多角的な視点

- * 住む地域によってSDGsの課題（汚染や廃棄物など）の原因や解決策が全く異なることに驚き、多角的な視点を持つ大切さを知った。
- * マクドナルドのような身近な企業の裏側の努力を知り、環境問題が自分たちの生活と直結していると実感した。
- * 他のグループが「伝統文化を尊重しながら環境問題を解決する」姿勢(例:インドネシアの文化に基づいたファッション)に感銘を受けた。

④未来への決意と自己成長

- * 「自分一人がやっても変わらない」という考えが変わり、小さな積み重ねが社会を変えると信じて行動したい。
- * 学んだことを学校や家族と共有し、まずは自分の生活から実践していきたい。
- * プレゼンでの図示や、想定外の事態（オンライン参加不可）への協力対応など、サミットを通じて社会解決能力が身についた。

2025年度全国高校生フォーラム

専任講師 Glenn Serviss (外国語科)

期 日：2025年12月21日(日)

場 所：国立オリンピック記念青少年総合センター 東京都渋谷区代々木神園町3-1

参加者：フィールドワーク、データ収集等：高校2年生36名(グローバルコース)

ポスタープレゼンテーション発表：高校2年生4名(グローバルコース)

1. 目的

文部科学省が実施しているWorld Wide Learning及びSGHネットワークに参加する高校生が一堂に会し、日頃取り組んでいるグローバルな社会課題の解決方法や提案等をプレゼンテーションするとともに、生徒交流会にてディスカッションを行う。

2. 内容

(1) スケジュール

	月 日	内 容
1	7月8日(火)	課題研究発表練習会(参加者:38名) 場所:東洋大白山キャンパス
2	7月21日(月) ~8月1日(金)	フィールドワーク(参加者:36名) 場所:オーストラリア アデレード市
3	12月21日(日)	全国高校生フォーラム(参加者:4名) 9:00 受付・準備 10:00 開会式・オリエンテーション 10:25 ポスタープレゼンテーション予選 12:53 昼休み 13:55 ポスタープレゼンテーション決選 15:15 表彰式・閉会式 16:00 終了



1. 東洋大学の教授によるプレゼンテーション指導の様子

(2) ポスタープレゼンテーション

- ①タイトル：高校生のお小遣い節約法 ―日本とオーストラリアの比較―
- ②要約：昨今の日本の苦しい物価高の中で在校生はいくらお小遣いをもらっているのか、そしてどのように節約を行っているのかを調査した。また、海外語学研修を利用し、現地の高校生にもお小遣いと節約について調査し、日本とオーストラリアの高校生が答えたアンケート結果の比較を行った。国際的な視点から高校生のお金の事情や皆が容易に真似できるような節約法を考えた。
- ③発表時間：4分間（英語による研究の目的、方法、結果等についての説明）
- ④自由質疑対応：4分間（審査員、引率者や他の参加者による英語での質疑）

(3) ポスタープレゼン発表原稿：Title: High School Students' Pocket Money Saving Techniques

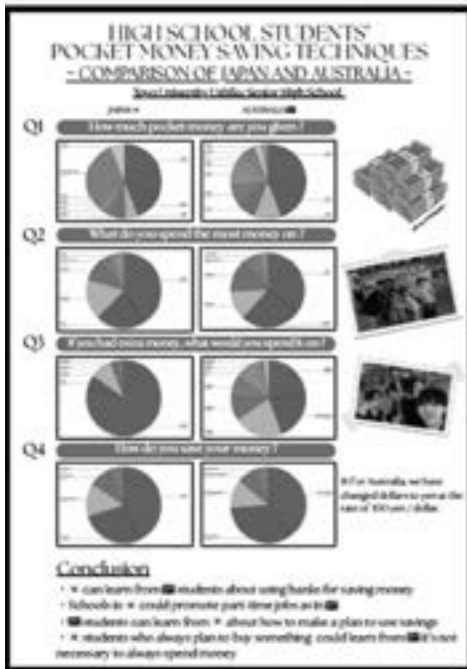
-Comparison of Japan and Australia-

Do you like money? Me, too! I'd like to know how you save your money, and how much money is suitable for young people like me. I didn't know how other teenagers were spending their money...

My father gives me 5000 yen a month, and I spend almost all of it when I'm hanging out with my friends, so I am often short of money. Even though I spend too much money, I know that many of my friends get more money than me, so I don't think that 5,000 yen is suitable. I worry about how I should save my money nowadays.

So we investigated how much allowance students at our high school were getting from their parents, and the measures they took to save that money in these hard times of the high cost of living in Japan.

I made a questionnaire and approximately 100 high school students answered it. Furthermore, during my



2. 研究発表のポスター

language training program in Australia last summer, I conducted the same survey at a local high school, and 50 Australian students answered it.

First of all, let's look at the differences in the amount of money teenagers get from their parents. According to our survey at school, Japanese high school students get an average of 7,500 yen. That's more than he gets! In contrast, the average amount that Australian high school students get was 4,000 yen. Interestingly, about 30% of students in both countries get such pocket money only when they go out.

When we asked, "How do you spend money?" most students said hobbies, but twice the number of Japanese students spend it on hobbies than Australian students. More Japanese students must think their hobby is important. It's very interesting that zero Japanese students save their money, while 21% of Australian students save it. Also, only girls were spending it on beauty, so we realize that beauty is not important for men.

We asked, if you had extra money, what would you spend it on? In Japan, the majority of students said they would save their

money if they have it. On the other hand, in Australia, the results were mainly divided into three choices - hobbies, snacks and saving money.

Finally, we asked "how do you save your money?" In Japan, the first place is "make a plan to buy something," the second place is "just saving," and the third place is "don't spend money at convenience stores." In Australia, the first place is "put money in the bank," the second place is "don't waste money," and the third place is "don't do anything in particular."

From this data, we can see that Japanese students choose "not wasting money" more often than Australian students. This shows that Japanese people are usually more careful with their money. There are also differences in how kids learn about money. In Japan, some kids get a small amount of pocket money for helping with housework. But in Australia, parents often teach them how hard it is to earn money, and schools even encourage students to get part-time jobs. Even though things are expensive in Australia, kids don't get much allowance. Because of this education, the amount of pocket money is different between the two countries. By looking at all of this, we can understand that Japan and Australia have different values and ways of thinking about money.

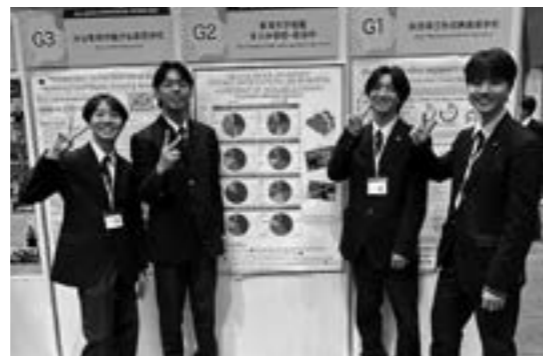
3. 成果と課題

(1) 生徒の感想

Through this competition, I could not only brush up my English but also found the importance of co-operation. / I'm proud of presenting this poster with students from all over the country and my friends. / I could know how to save money and differences between 2 countries, so I'd like to apply these results.

(2) 課題

本校の参加者のプレゼンテーション力は昨年より高く、英語での質疑応答にもしっかりと対応できた。上位入賞のためには、探究テーマを、生徒自身が考えて具体的な解決法を提示できるもの、もっとインパクトのあるものにする必要がある。



3. プレゼンテーションの様子

附属3校 高大連携プログラム SUMMER ACADEMIA 2025

主事 井坂 忠生 (進路指導部・国語科)

期 日：2025年8月18日(月)・19日(火)

場 所：東洋大学 白山キャンパス・赤羽台キャンパス・川越キャンパス・朝霞キャンパス

参加者：高校2年生118名、引率教員20名

主 催：東洋大学



1. 目的

- ①大学で学ぶことの魅力を体感する。
- ②各附属高校の生徒と学びを通して交流する。

2. 内容

- (1) 各学部からの事前課題に取り組み、それをもとに、当日、講義・実験・実習・グループワーク・発表等を行う。

- (2) 開講学部学科・テーマ

《Summer Academia 2025 講義一覧》

学部・学科	テーマ
(1) 文	「社会について考えてみよう～イギリス哲学入門～」 「ジブリ映画を分析的に読み解く」 「『学校』ってよいところ？～『学校化』の課題と未来～」
(2) 経済	「経済学を“体験”しよう！ゲーム×ディスカッションで学ぶ経済のしくみ」
(3) 経営	「なぜスタバは『高いのに行きたくなる』のか？Z世代マーケティングの謎を解く」
(4) 法	「賛否両論・契約(約束)の例外」 「日本におけるファミリーネームの歴史」 「多様な性とスポーツ」
(5) 社会	「『推し活』の社会的機能を考える」「『こころ』は測定できるか？」 「なぜメディアを研究するのか」「人の移動とジェンダー」
(6) 国際	「移民(日本で暮らす外国人)～在日ムスリムを事例に考える～」
(7) 国際観光	「ビッグデータを用いた観光客の実態把握と誘客策の検討」 「エアラインのESG経営とは？～環境保全のために航空業界が考えるべきこと～」
(8) 情報連携	「教室をプログラムでコントロールできる!? 生成AI時代の最新キャンパスを体験してみよう!」
(9) 理工 ①応用化学科 ②建築学科	「酵母菌によるエタノール生産」 「BIMを使って建築をつくろう」
(10) 環境イノベーション	「地球温暖化問題をデータサイエンスで考える～再生可能エネルギーは人類を救えるのか?～」
(11) 生命科学 ①生命科学 ②生体医工 ③生物資源	「脊椎動物の足の構造を知る～骨格標本を作成し、観察する～」 「運動に対する生体応答を知る～運動中の生理応答を測定する～」 「植物の作る成分を調べる～身近な植物の『香り』に含まれる成分の分析～」
(12) 食環境科学 ①食環境科学 ②フードデータサイエンス ③健康栄養	「タンパク質の働きを調べる～マイタケの酵素を知ろう～」 「食べ物の経済実験を体験しよう～バーチャル・リアリティーの世界と食～」 「集団給食における栄養管理と食形態～大量調理での栄養管理を学ぼう～」

3. 成果と課題 (生徒感想)

(1) 文学部

哲学科では、個人作業と分業のどちらの効率が良いのかを紙飛行機を用いて実験した。国際コミュニケーション学科では「千と千尋の神隠し」の日本版とアメリカ版の予告を比較し、国民性や何を重視するのかをグループで考えた。教育学科では学校が今の日本で果たす機能について知見を広げることができた。

(2) 経済学部

経済学はお金を操る方法を学ぶ学問ではなく、限られた資源をどのように使って、人々の欲求や社会のニー

ズを満たすかを考える学問であることを知った。また、お金は将来のために貯蓄すべきと考えていたが、今の自分に投資するほうがよいということを知ることができた。これは人生の豊かさにも繋がっていく。

(3) 経営学部

スターバックスが単なるコーヒーショップではなく、「第三の居場所（サードプレイス）」というコンセプトを通じて顧客との深いつながりを築いている点に感心した。商品やサービスだけでなく、空間や体験そのものを提供するという視点は、他の企業にも応用できる重要なヒントだと感じた。

(4) 法学部

六法全書はすべて暗記するのではなく、必要なところがどここのページにあるのかを覚えることが重要だと知ることができた。また、法学部にも法制史・法思想史・政治史・政治思想史などの歴史の分野があると知った。

(5) 社会学部

社会心理学では、開拓者について議論し、たくさんの開拓者がいることがわかった。メディアコミュニケーション学科では、障害者が不便なく生活をしたり、健常者と同じように仕事をしたりするにはどうしたらよいのかを考えることができた。国際社会学部では、国際結婚や、農村花嫁など初めて知る言葉が多く、勉強になった。社会学部では、「推し活」について社会と関連づけて考えることができた。

(6) 国際学部

現在の日本の移民について知り、今までただ外国人としか認識していなかった彼らがどのような経緯で日本に来たかを考えるようになった。日本の移民に関して建前と現実の乖離が大きく、外国人が日本に来る目的と現状の事実には大きな違いがあると感じた。

(7) 国際観光学部

飛行機は便利な交通手段である一方で、二酸化炭素を多く排出していることから、環境問題との関わりが深いということに改めて気づかされた。また、環境に対して取り組もうとしても、コストや技術的な壁があることを知り、課題の大きさを実感した。

(8) 情報連携学部

プログラミングの基本的な知識から応用的な内容に至るまで、非常に幅広く学ぶことができ、大きな成長を実感できた。グループワークでは、異なる背景や考え方を持つ人たちと関わることで、これまで自分になかった新たな視点やアイデアに触れることができ、自分の視野が大きく広がったと感じている。

(9) 理工学部

ドライイーストが実際に生きているかを確かめるために培地を作り、PCR法や電気泳動などを用いて調べるといふ本格的な実験は、とても興味深かった。酵母菌がパンだけでなくお酒の発酵にも使われ、大学などとの共同研究によって新しい商品が生まれている。科学の力が身近な生活に深く関わっていることを実感した。

(10) 環境イノベーション学部

私は今まで、再生可能エネルギーを増やせば二酸化炭素が減る！ソーラーパネルは多いほうがよい！という安直な考えをしていたが、ソーラーパネルを増やすことで森林が破壊されてしまうなど、再生可能エネルギーにはまだまだ課題が残り、現在の状態では増やせばよいというわけではないという新しい発見ができた。

(11) 生命科学部

クロマトグラフィーを使った実験を通して、匂いという目に見えない存在を、化学的な手法で分離し、可視化することができるという点が、非常に興味深く感じた。また、匂いというテーマは化学の枠を超え、心理学や神経科学とも関連する、学際的な分野であることに気づかされた。

(12) 食環境科学部

嚙下食を食べさせる方法について学んだ。高齢者が安全に食事をするために、姿勢・食事の形態・ひと口の量・環境など細かい配慮が必要だということ深く理解した。思いやりと観察力がとても重要なのだと感じた。食事は単なる栄養補給ではなく、「生きる力」や「人と繋がる喜び」に繋がっていると思った。

【SDGs実践・探究】

ワインパミスを活用した循環型大豆生産モデルの世界展開 —地域社会と協働して地球規模の課題解決に貢献する生徒の育成—

教諭 片岡 佑輔（理科）

日時：2024年9月～ 現在も継続中

場所：本校敷地内の空きスペース、本校近隣の方にお借りした畑

参加者：高校生16名（1年生1名、2年生11名、3年生4名）

1. 目的

地域の企業や大学との協働を通じた地球規模の取り組みによって、SDGsの達成に貢献することを目的としており、次のような教育効果を期待している。

- ① 循環型農業を通して持続可能な生活への意識を高める
- ② 地域の人々との協働を通して地域コミュニティへの帰属意識を高める
- ③ 視野を広げ、世界規模・地球規模で物事を考えられるようにする
- ④ 牛久市だから実現できるという使命感を持つ
- ⑤ コンテストへの参加を通して自分達の取り組みを社会に発信する力を高める

2. 内容

- ・日本遺産である「牛久シャトー」の未利用資源であるワインパミス（ブドウの搾りかす）を堆肥として循環利用することで二酸化炭素排出量を削減した。
- ・2030年に予測される世界的な「タンパク質危機」への対策のために、ワイン堆肥を用いてタンパク質含有量が多い大豆を栽培した。
- ・収穫した大豆は、世界最大の青銅立像である「牛久大仏」を模して、「牛久大豆II（うしくだいでずー）」と名付けた。II（ツー）には「環境への配慮」と「食糧の安定確保」という二つの願い、そして「ワインの街・牛久の第II章」という意味が込められている。
- ・収穫した大豆を大豆ミートに加工し、絶滅危惧種に指定されているニホンウナギを守るために大豆ミートうな井を開発した（「牛久沼周辺」はうな井発祥の地とされている）。
- ・大豆ミートうな井を各種イベントで販売し、私達の取り組みを世界に向けて発信していく。また、大豆ミートうな井の商品開発を行い、道の駅などで販売する。
- ・JICA 筑波の研修員を学校に招待し、本校の循環型大豆生産モデルを共有した。
- ・JAXA 筑波の宇宙日本食の開発に携わった方に宇宙日本食開発のアドバイスをいただいた。
- ・茨城大学農学部の方々に大豆栽培に関する講評をいただき、来年度の大豆栽培に向けたアドバイスをいただいた。
- ・「IBARAKI ドリーム・パス」と「全国ユース環境活動発表大会」という2つの大会に参加した。



時期	内容詳細
2025年6月	・ワイン堆肥の作製完了。 ・ワイン堆肥を用いて大豆の栽培を開始する。
2025年10月	・大豆の収穫を開始する。 ・JICA 筑波の研修員と循環型大豆生産モデルを共有する。
2025年11月	・「うしく Wai ワイまつり」にて、つくば栄養医療調理製菓専門学校の方々と協働で「大豆ミートうな井」を144食限定で販売する。
2025年12月	・「全国ユース環境活動発表大会 関東地方大会」にて地方大会最優秀賞を受賞し、全国大会への出場が決定。
2026年1月	・JAXA 筑波にて宇宙日本食の開発に関わった中沢孝様に宇宙日本食の開発に向けたアドバイスをいただく。 ・土浦市の「ヒロフーズ」と大豆ミートうな井の商品開発を開始する。 ・茨城大学農学部の方々に今年度大豆栽培に関する講評をいただく。 ・「IBARAKI ドリーム・パス AWARD」にてグランプリを受賞する。
2026年2月	・「全国ユース環境活動発表大会 全国大会」にて国連大学サステイナビリティ高等研究所 所長賞（第3位）を受賞する。 ・茨城県知事に「大豆ミートうな井」を試食していただく。

3. 成果

「IBARAKI ドリーム・パス AWARD」では、今年度は857件の企画のグランプリになることができた。2年前までは公立高校のみが参加できる大会であった。そのため、私立の学校でグランプリを受賞したのは本校が初めてのため大変名誉なことである。また、「全国ユース環境活動発表大会 全国大会」では、国連大学サステイナビリティ高等研究所 所長賞（第3位）を受賞することができた。この大会は農業・商業・工業高校などの専門学科の生徒が多く、大変ハイレベルなものであった。来年度以降はこれらの学校にも負けずに活動を継続・発展させていきたい。

4. 次年度への課題

ワイン堆肥で化成肥料を上回る大豆収穫量を実現したい。また、JICA 研修員とは継続的な交流活動を実施できる環境を整えたい。さらに、宇宙日本食の開発にも着手したい。



【STEAM 教育講座】

文理選択前に理数マインドを育てる STEAM 実践プログラム ー生成 AI × 光スペクトル分析 × アントレプレナー教育ー

教諭 片岡 佑輔（理科）

日時：7月7日（月）1-4限 E,F,S,T組 7月15日（火）1-4限 G,K,L,M組

7月17日（木）1-4限 A,B,C,D組 7月18日（金）1-4限 H,I,J,O組

場所：実験…各教室 その他…講堂

参加者：高校1年生 全コース 16クラス 578名

※講師は株式会社インセプタム 返町洋祐様

1. 目的

高1全生徒に STEAM 教育を実施し科学と技術への理解を深め、プログラミングや生成 AI を体験し、アントレプレナーシップについても学ぶことで、理系科目に興味を持つ生徒を増やすこと。

2. 内容

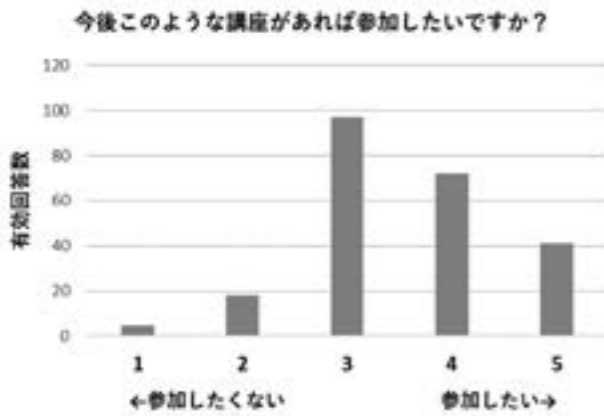
授業の流れは以下の通りであった。

開始時刻 (所要時間)	場所	内容	内容詳細
8:55 (40分)	講堂	講義	・農業とテクノロジーの関わりを紹介 ・光についての基本講義 ・今回の実験内容の概説 ・生成 AI の使い方の説明 ・（蛍光色素等を用いた演示実験）
9:35 (10分)		休み時間	・教室への移動時間を含む
9:45 (90分)	教室	実験	・食品等からの色素抽出（2人1班を予定） ・分光器の組み立てとタブレットのカメラスペクトル撮影 ・生成 AI を活用したスペクトル画像の解析プログラムの作成
11:15 (10分)		休み時間	・講堂への移動時間を含む
11:25 (80分)	講堂	ワークショップ	・事業の在り方に関する基本的な講義 ・食品に関する事業プランを構想する（表彰有）

3. 成果

今年度は生徒が楽しめるように工夫を加え、回折格子を用いた波長の観察や、ほうれん草・かぼちゃ・バタフライピーといった身近な食品から色素を抽出し、緑や黄色、オレンジといった鮮やかな色を観察できる実験を行った。そして、抽出した色素の波長を測定するプログラムを生成 AI で作成することで、生徒たちは AI の利便性を実感することができた。アントレプレナー教育では、食品に関連した新規ビジネスを考案する課題に取り組み、「アレルギー成分をすべて取り除いたケーキ」など、多様でユニークなアイデアが次々と生まれた。こうした取り組みにより、生徒たちは科学的探究、データ活用、AI 技術、そして起業的発想を統合的に学ぶ貴重な機会を得ることができた。

生徒は概ね興味を持って楽しみながら活動することができた。昨年は12月に実施したが、今年は文理選択前の7月に実施し、理系に進学する生徒の増加を狙った。何年か連続して行ってきた STEAM 教育だが、今年度



のものはかなり完成度が高かったと思う。「科学、技術、アートなど、様々な分野の知識を組み合わせることでこれまでにない新しいビジネスのアイデアを提案したいと思った」、「将来、起業をすることがあったら、今回のワークシートの内容を考えながら起業したい」などの肯定的な感想があった。今後、このような講座があれば参加したいという生徒が概ね多数だった。

4. 次年度への課題

今年度は、昨年度の課題をすべて解決することができたと考えている。来年度に向けた課題としては、実際に今回のSTEAM教育講座を通して、生徒のどのような力を伸ばすことができたのか、また、効果的に伸ばすことができた力と逆にあまり効果的に伸ばすことができなかった力など、より詳細に授業の効果を分析する必要があると考える。



JICA筑波高校生国際協力実体験プログラム 2025

主事 村田 駿祐 (数学科)

期 日：2025年12月20日(土)

場 所：JICA 筑波

参加者：高校2年生4名(中高一貫コース、グローバルコース)

主 催：独立行政法人国際協力機構(JICA)筑波センター

1. 目的

多様性や個性を認め合い、すべての人が尊重される社会を意識する態度を身につける。

- 文化や価値の多様性に対する理解を獲得する。
- 多様な人々とのコミュニケーションや関係を築く方法を考えられるようになる。
- 多様な人々が共生できる地域社会や学校を創るアクションプランを作成できるようになる。

2. プログラムと内容

時刻	内容	内容詳細
9:00	開会挨拶 プログラム説明 スタッフ紹介	・5人前後の各高校からの混成グループで着席。 ・開会挨拶の後、プログラムの説明とスタッフの紹介を行った。
9:15	自己紹介 事前課題の共有	・生徒同士が初対面のため、アイスブレイクと自己紹介を行った。
9:30	多文化共生のための 導入講義	[講師] 飯野令子さん (常磐大学人間科学部コミュニケーション学科 教授) 茨城県で在留外国人の多い市町村はどこか、茨城県に住む外国人はどこが多いか、など身近な話題から始まった。そして、茨城県に住んでいる外国人が困っていることは何かということ話し合ったり、外国人への説明を「やさしい日本語」で言い換えてみたりするなど、多文化共生について具体的に学習した。
11:10	世界が変わる！ マイノリティとしての生活と 国際協力の挑戦が教えてくれた こと	[講師] 倉田桃子さん (元 JICA 海外協力隊【スリランカ / 青少年活動】) スリランカという国の学校の制度や言語、服装など国の紹介や、JICA 海外協力隊として参加するまでの経緯などについて、お話があり、その後、スリランカにおける外国人として生活するということがどのようなことかなどの体験談を聞いた。講師の方は水戸第二高等学校の卒業生であることもあり、生徒は親近感を持って聞いていた。以心伝心などの日本人の文化的な特性が海外の人々には日本人が何を考えているかわからないと映ること、伝えることの大切さなどについて学んだ。
12:10	JICA 研修員との交流 ①ランチ交流	これまでのグループとは異なるグループに変更し、そこに JICA の研修員が入り、自己紹介とアイスブレイク。その後、一緒に昼食をとった。
13:00	JICA 研修員との交流 ②多文化共生をテーマにした ディスカッション	JICA の研修員と「多様な背景を持つ人々が暮らしやすくなる社会を考えよう」というテーマでディスカッションを行った。Key Question が提示され、様々な国から来た JICA の研修員の方々の考え方を学ぶとともに意見交換を通じて暮らしやすい社会について考えを深めた。
13:50	アクションプラン作成ワーク ～多様な人々の共生のために 私たちができること～	高校ごとのグループになり、共生のためのアクションプランを作成した。「今ある課題」・「今ある可能性」・「未来のためのアクション」について付箋を用いてグルーピングし、アクションプランワークシートを作成した。
15:00	グループ発表	グループを「自分のアクションプランを説明するチーム」と「他グループのアクションプランを聴きにいくチーム」に分け、前半・後半の2回グループ発表を行った。
15:40	まとめ・閉会挨拶	・閉会挨拶と諸連絡 ・アンケートへの入力 ・次回のイベントに向けての連絡

3. 事後アンケートより

このプログラムの事後アンケートを実施したところ、参加してよかったかという質問に対しては全員よかったと答えた。また、記述式による以下の質問に対してはおおまかに次のような回答であった。(筆者の方で重複したりするものをまとめてある)

Q1. このプログラムを通して学んだことは何ですか。

- ・外国人と関わるためには英語だけではなく、やさしい日本語を学ぶことも大切であるということ学んだ。
- ・多様な国、経歴などをもっている方がいる中で、社会に任せるだけではなく、自分たちができることをやっていくことが大切であることがわかった。

Q2. 多文化共生社会においてあなたが大切だと考えることはなんですか。理由も含めて教えてください。

- ・文化の違いで揉めてしまうこともあるので、お互いの文化を理解し合うことが大切であると感じた。
- ・外国人の方が増えてきている社会で、偏見や自分と違うだけで避ける傾向があるので、自分から相手を知るためのアクションを起こし、多様な意見や宗教、文化を受け入れて歩み寄ることが大切であると思う。
- ・相手の国との価値観などが違うことがあると思うので、互いの気持ちを尊重することが大切だと思う。

4. 成果と課題

このプログラムにより、多文化共生社会について理解が深まり、より相手自身や相手の文化を尊重することが大切だということ学んだようである。その一方で、アクションプランを考えるという部分については、具体性に乏しく、具体的なアイデアを構築しきれていないように感じた。この後、このプログラムは4月まで継続されるので、もう一歩進んだ具体的なプランの構築に期待したい。



令和7年度 牛久市 国際理解教育講座

主事 石塚 俊文 (地理歴史・公民科)

日時：(1) 第1回 2025年6月6日(金) 10:00-11:30 (2) 第4回 2026年1月22日(木) 10:00-11:30
場所：(1) 牛久市中央生涯学習センター 中講座室 (2) 牛久市中央生涯学習センター 大講座室
参加者：(1) 第1回 グローバルコース高校1年生 33名 (2) 第2回 グローバルコース高校1年生 31名
主催：牛久市国際交流協会

1. 目的

外国人との直接対話やワークショップ等を通じて、国際理解を進め、将来、国際社会で活躍することのできる人材の育成を図る。

2. 内容及び事後アンケート結果

(1) 令和7年度 第1回 国際理解教育講座「台湾を知ろう！」

①内容 講師：陳 祥さん(台湾出身) 日本国際学園大学 経営情報学部 ビジネスデザイン学科 助教
<講話>台湾の文化・生活・教育制度(特に高校・大学)について
<交流>質疑応答

②事後アンケート結果(回答数25)

Q1 講演の内容は、わかりやすかったですか。

わかりやすかった 44.0%
ややわかりやすかった 48.0%
ややわかりにくかった 4.0%
わかりにくかった 4.0%

Q2 講演を聞く前と聞いた後で、台湾に対するイメージは変わりましたか。

変わった 28.0% 変わらない 72.0%

[イメージが変わった理由(一部抜粋)]

*食文化が日本と全く違うこと。 *いろんな観光の仕方がある。 *日本人も親しみやすいと感じた。

Q3 今回の講座に満足しましたか。

満足した 52.0% やや満足した 36.0% やや不満足だった 8.0% 不満足だった 4.0%

[講演の中で、印象に残ったこと(一部抜粋)]

*日本では見ないフルーツがたくさんある *きれいな観光地 *先生の日本語が上手だった
*台湾語と中国語の違いの話 *台湾語をつかう人の割合が減っていること
*台湾米が日本米とほぼ一緒とのこと *朝ごはんはお店で食べる人が多いこと
*台湾のローカルフード *キーホルダーのICカード *台湾で勉強するプログラム

[感想(一部抜粋)]

*少し台湾のことが分かって興味がわいた。
*講座で学んだことを現地に行って確認したいと思った。
*台湾の実情を知ることができた。
*台湾語を使う人が減っている課題などを食べ物と一緒に知ることができてよかった。
*知らない記号があって興味深かった。
*資料がわかり易かった。



- *台湾だけでなく、他の国についての講座も聞いてみたい。
- *若い世代があまり聞きに来ていなかったため、若い世代にも興味を持ってもらいやすくなったほうがいいと思った。

(2) 令和7年度 第4回 国際理解教育講座「ベトナムを知ろう！」

- ①内容 講師：レー・ティ・フェさん（ベトナム出身）流通経済大学、茨城県留学生親善大使
 <講話>ベトナムの自然、民族、文化（衣食住）、交通、教育（高校生活）、観光地等
 <交流>クイズ大会、民族衣装アオザイの着用体験

②事後アンケート結果（回答数27）

Q1 講演の内容は、わかりやすかったですか。

- わかりやすかった 66.7%
- ややわかりやすかった 29.6%
- ややわかりにくかった 3.7%
- わかりにくかった 0.0%

Q2 講演を聞く前と聞いた後で、中国に対するイメージは変わりましたか。

- 変わった 81.5%
- 変わらない 18.5%

[イメージが変わった理由（一部抜粋）]

- *衣服がカラフルで有名なイメージがあったが、それ以外にも伝統的な料理や有名な建物がたくさんあって、伝統や歴史を大事にする国なのだなと感じた。
- *インフラなどが整っていないイメージがあったが、首都のハノイやハロン湾など、観光スポットに興味を惹かれた。
- *親切な人がたくさんいてみなさんフレンドリーだと聞き、ベトナムに行ってみようと思った。

Q3 今回の講座に満足しましたか。

- 満足した 74.1%
- やや満足した 25.9%
- やや不満足だった 0.0%
- 不満足だった 0.0%

[講演の中で、印象に残ったこと（一部抜粋）]

- *ベトナムにはたくさんの民族がいる。 *伝統的な衣装アオザイを着たこと
- *アオザイは私たちの制服のようなもの。いろいろなスタイルがあり、可愛かった。
- *傘・帽子は農業メインで使われ、日差しなどを遮ることができる。
- *ベトナムのお札が水に強いということ *ベトナムの観光地がとてもきれい。
- *国の伝統的な文化（食事は家族が集まる場など） *ベトナム国歌

[感想（一部抜粋）]

- *講座で新しく知ることがあり、その国への偏見、イメージが変わるきっかけになりました。
- *民族衣装を着る体験はとても貴重で良かった。
- *何も知らなかったから上中下（北部・中部・南部）の場所ごとに気温が違うのに驚いた。
- *あまり知らない国が多いから今回の講座のように色々な国のことを知れたらと思った。



3. 成果と課題

牛久市国際交流協会主催の国際理解教育講座は今年度4回実施され、その第1回、第4回に本校グローバルコース高校1年生が参加した。入学後まもなくフィリピンでの語学研修（2025/5/25-6/1）を体験した生徒たちは、総じて海外への関心が高く、質疑応答も活発に行われた。異文化理解に有効なイベントであり、次年度以降もグローバルコース高校1年生を中心にクラス単位で参加できるよう予定を調整していきたい。

2025年度 訪日団受け入れ・交流事業

(1) オーストラリア・オレンジ (2) 中国 (3) インドネシア (4) オーストラリア・アデレード

主事 石塚 俊文（地理歴史・公民科）

1. 目的

海外の中学生・高校生と積極的に交流し、互いの文化や考え方について知るとともに、相手を尊重しつつ自分の意思を伝えることのできるコミュニケーション能力を養う。

2. 内容

(1) オーストラリア・オレンジ市（牛久市姉妹都市）訪日団

- ①期 間：2025年4月16日（水）10:50 - 17:20
- ②交流校：ジェームズ・シーハン高校 James Sheahan Catholic High School
生徒15名（女子12名・男子3名）、教員2名
- ③パディ：23名（2025年3月オレンジ市派遣生徒16名、2024年3月オレンジ市派遣生徒7名）
- ④日 程：9:27 牛久到着（牛久市公用バスにて移動）、9:45 牛久市長表敬訪問
10:50 本校到着、パディが出迎え 10:55～11:05 学校長挨拶（MPH）
11:10～11:45 特別授業「英語」（ELC）
11:55～12:45 体験授業（パディのクラス）
12:45～13:30 ランチ交流会（食堂）
13:30～14:20 体験授業「書道」（書道室）
14:30～15:20 英語ディベート（大演習室）
15:20～15:50 SHR・清掃体験（パディのクラス）
15:50～16:20 部活動体験・茶道部（作法室）
16:30～17:20 懇親会（食堂）
18:00 本校出発（本校スクールバス利用）



(2) 中国・江蘇省 訪日団

- ①期 間：2025年7月7日（月）9:45 - 13:50
- ②交流校：江蘇省梅村高級中学9名、常州市北郊高級中学2名、生徒計11名（女子5名・男子6名）
教員（梅村高級中学）5名、小学生2名（教員家族）、訪日団リーダー1名、ガイド1名、
- ③パディ：11名（グローバルコース高校1・2年生）
- ④日 程：9:45 本校到着、パディが出迎え
9:55～10:45 学校長挨拶、キャンパスツアー、七夕短冊づくり（MPH）
10:55～11:45 交流会：アイスブレイク、ジェスチャーゲーム、中国語クイズ（MPH）
11:55～12:45 英語ディベート（大演習室）
12:45～13:30 ランチ交流会（食堂）
13:50 本校出発



(3) インドネシア・スラバヤ市 訪日団

- ①期 間：2025年11月20日（木）10:00 - 13:30

②交流校：アルファラ高校 Al Falah High School、生徒 31 名（女子 11 名・男子 20 名）、教員 3 名

③パディ：31 名（グローバルコース高校 1 年生）

④日 程：10:00 本校到着、パディが出迎え
 10:05～10:45 学校長挨拶、アイスブレイク、キャンパスツアー（MPH）
 10:55～12:10 交流会：折り紙・ポッチャ（1K 教室・3 号館昇降口）
 12:20～12:55 ランチ交流会（食堂）
 13:00～3:20 礼拝（30 周年記念館）
 13:30 本校出発

(4) オーストラリア・アデレード市 訪日団

①期 間：2025 年 12 月 10 日（水）～14 日（日）4 泊 5 日 ホームステイ（本校生徒宅）
 ②交流校：レイネライースト高校 Reynella East College、生徒 16 名（女子 7 名、男子 9 名）、教員 3 名
 ③ホストファミリー：15 家庭、パディ 16 名（女子 10 名、男子 6 名）
 ④日 程：

日 付	日 程	宿泊
12月10日(水)	12:00 牛久駅到着、本校スクールバスで本校へ、12:20 本校到着、 12:30～13:30 昼食（学食）、休憩（ELC） 5 限 日程説明・歓迎セレモニー打ち合わせ（MPH） 6 限 歓迎セレモニー（講堂）15:40 パディと対面、ホームステイ宅へ	ホームステイ
12月11日(木)	8:35（高3は8:45）パディと一緒に登校 1 限 9:10～10:00 パディのクラスの授業に参加 2 限 10:20～11:10 茶道体験（記念会館3階・作法室） 3 限 11:30～12:20 2年K組英語プレゼン（MPH） 昼休み（1～3限試験時間実施のため、4限はカット） 5 限 書道（書道室） 6 限 パディのクラスの授業に参加 ※部活動見学可、パディの事情に合わせ帰宅	ホームステイ
12月12日(金)	8:35（高3は8:45）パディと一緒に登校 8:55 体育館前集合 9:00 バスツアー出発 ※パディ同行 （学校⇒牛久大仏⇒二所ノ関部屋⇒イオンモールつくば⇒学校） 15:15 学校到着 15:50～16:50 フェアウェルパーティ ※パディの事情に合わせ帰宅	ホームステイ
12月13日(土)	ホストファミリーと過ごす ※パディは公欠	ホームステイ
12月14日(日)	ホストファミリーと過ごす 15:00 本校昇降口前集合 15:30 本校出発 成田空港へ	

3. 成果と課題

いずれの事業も、訪日団と本校生の積極的な交流が見られ、親睦を深めるという点では大きな成果が得られた。課題としては、アデレード市レイネライースト高校の受け入れにおいて、男子生徒のホストファミリー確保が困難であった点が挙げられる。結果として男子3名が女子生徒宅への滞在となった。男子生徒の受け入れ希望家庭が少ない傾向は常態化しており、募集に苦慮する現状がある。今後はホストファミリー参加の意義やメリットを積極的に発信し、協力世帯の掘り起こしを図る必要がある。



オーストラリア語学研修(牛久市姉妹都市オレンジ市交流事業)(2024年度)

教諭 古里 愛里（外国語科）・教諭 小長谷 歩美（外国語科）

期 間：2025 年 3 月 4 日（火）～3 月 16 日（日）

場 所：オーストラリア ニューサウスウェールズ州シドニー市・オレンジ市（ジェームズ・シーハン高校）

参加者：高校生 16 名（1 年生 11 名、2 年生 5 名）、引率教員 2 名

1. 目的

牛久市の姉妹都市オレンジ市の交流事業として海外語学研修およびホームステイ体験を通じて国際理解を深める。異文化世界を主体的に体験すると共に日本の生活文化を積極的に伝え、オレンジ市の人々と歴史・自然・文化や価値観の違いを共有して友情と絆を深め合う。

2. 内容

	月日	場 所	主 な 内 容
1	3月4日(火)	東京国際羽田空港	羽田空港第集合 羽田空港発 日本航空 JL051 便 シドニー行（機内泊）
2	3月5日(水)	シドニー市内	シドニー国際キングスフォードスミス空港到着 観光：ボンダイビーチ、ミセスマッコリーズ岬公園、オペラハウス、ワイルドライフシドニー動物園、シーライフシドニー水族館（ホテル泊）
3	3月6日(木)	シドニー市内	シドニー大学キャンパスツアー他、シドニー湾ランチクルーズ、ブルーマウンテンへ移動（ホテル泊）
4	3月7日(金)	①シドニー市 ②ブルーマウンテン ③オレンジ市	①専用バスでオレンジ市へ移動 ②ブルーマウンテン観光：シーニックワールド ③ホストファミリー対面（ホームステイ）
5	3月8・9日(土・日)	オレンジ市内	ホストファミリーと過ごす・交流（ホームステイ）
6	3月10日(月)	ジェームズシーハン高校	市役所訪問
7	3月11日(火)	ジェームズシーハン高校	パディと授業体験、アボリジナルアート体験（ホームステイ）
8	3月12日(水)	ジェームズシーハン高校	バサーストゴールドフィルズツアー（ホームステイ）
9	3月13日(木)	ジェームズシーハン高校	パディと授業体験（ホームステイ）
10	3月14日(金)	オレンジ市	日本文化紹介、さよならパーティー（ホームステイ）
11	3月15日(土)	オレンジ市・シドニー市	専用バスでシドニーへ移動（ホテル泊）
12	3月16日(日)	機内	シドニー空港発 日本航空 052 便 羽田行 東京国際羽田空港着、羽田空港にて解散

3. 成果

到達目標：現地の人と幅広いテーマで雑談を一定時間続けることができる。

外国語運用能力	内容・分量		語彙・文法		積極性	
	事前	事後	事前	事後	事前	事後
Speaking&Listening が中心						
十分 4	0%	7.1%	13.3%	7.1%	26.7%	57.1%
概ね十分 3	53.3%	85.7%	20.0%	85.7%	60.0%	42.9%
やや不十分 2	46.7%	7.1%	66.7%	7.1%	13.3%	0%
不十分 1	0%	0%	0%	0%	0%	0%

到達目標：自他の文化を客観的に考察し、従来の習慣にとらわれない生活のあり方を模索できる。

異文化対応力	異文化理解		自国の文化		積極性	
	事前	事後	事前	事後	事前	事後
十分	60%	78.6%	20%	50.0%	26.7%	50.0%
概ね十分	33.3%	21.4%	66.7%	50.0%	66.7%	42.9%
やや不十分	5.7%	0%	13.3%	0%	6.7%	7.1%
不十分	0%	0%	0%	0%	0%	0%

生徒参加者の声：

- It was a short time, but I had a lot of experiences and memories. It was the most fun of my life so far!
- ホームステイがすごく楽しかった。ほんとにあっという間でもっとホームステイをやりたかった。学校に行って授業を受けたり、色んな子と話すことが出来て楽しかった。すごくいい経験をできた！
- It was very fun. I want to go to Australia again! Australia has many different cultures. For example, clothes, meals, atmosphere, and so on. The others were scary at first, but they were all nice.



4. 課題

本研修では、事前指導の在り方に課題が残った。今回の引率は、参加生徒一人ひとりの性格や特性を十分に把握しないまま出発を迎えることとなり、生徒間および生徒と引率教員との関係構築に時間を要した。事前に引率教員と生徒が綿密に関わる機会を設けていれば、研修中の指導や声かけがよりの確となり、研修全体の充実につながったと考えられる。特に、引率教員が事前に確定している場合には、面接選考の段階から関与することで、生徒理解を深め、信頼関係の構築を図ることが有効である。また、海外研修に臨む心構えについての事前指導も十分とは言えなかった。慣れない環境の中でストレスを感じ、気持ちが不安定になる生徒も見られたことから、異文化を受け入れる姿勢や、限られた研修期間の中で主体的に挑戦する態度について、具体的に指導しておく必要がある。



春休みオックスフォード研修〈2024年度〉

教諭 森江 武文（地理歴史・公民科）

期 間：2025年3月9日（日）～3月24日（月）

会 場：オックスフォード大学 セントピーターズカレッジ、ジーザスカレッジ

担 当：CIE Oxford (College of International Education Oxford)

参加者：高校生9名（1年生2名、2年生6名、3年生1名）、引率教員1名



1. 目的

- ① 海外での英語レッスンとプロジェクトワーク、ホームステイを経験することにより、学問及び諸活動に主体的に取り組む姿勢を養う。
- ② 世界大学ランキング第1位のオックスフォード大学生との意見交換セッションを通じ、大学で学ぶことの意義や学ぶ姿勢について、自ら考える。
- ③ 英語コミュニケーション能力の向上を図る。
- ④ 各自が事前に設定したテーマに基づき現地調査、成果のまとめと発表を行うことで、情報分析能力およびプレゼンテーション能力を養う。

2. 内容

	月日	スケジュール	宿泊
1	3月9日（日）	07:00 羽田空港第3ターミナル3階出発ロビー集合 09:50 羽田空港出発（JL043便） 15:15 ロンドン ヒースロー空港到着、専用車でオックスフォードへ 18:00 オックスフォード到着、ホスト宅へ移動（タクシー）	ホーム ステイ
2	3月10日（月）	<午前> ① 9:00～10:00 ② 10:15～11:15 ③ 11:30～12:30 <午後> ④ 13:30～15:45 ① Practical English ②・③ Art & Architecture ④ Project Work	
3	3月11日（火）	① Practical English ②・③ Art & Architecture ④ Project Work	
4	3月12日（水）	① Practical English ②・③ Oxford University & Colleges ④ Project Work <放課後> オックスフォード大生と交流セッション	
5	3月13日（木）	① Practical English ②・③ History ④ Project Work <放課後> Christ Church & Walking Tour	
6	3月14日（金）	① Conversation Cafe ②・③ History ④ Project Work	
7	3月15日（土）	ロンドン観光（バッキンガム宮殿、ビッグベン、ホースガード、大英博物館他）	
8	3月16日（日）	<終日フリータイム>	
9	3月17日（月）	① Practical English ②・③ Multicultural Britain ④ Project Work	
10	3月18日（火）	① Practical English ②・③ Multicultural Britain ④ Project Work	
11	3月19日（水）	① Practical English ②・③ Literature ④ Project Work <放課後> オックスフォード大生の案内で St Antony's College 見学	
12	3月20日（木）	① Practical English ②・③ Literature ④ Project Work	
13	3月21日（金）	① Conversation Cafe ②・③ Literature ④ Presentation & 修了式	
14	3月22日（土）	<終日フリータイム>	
15	3月23日（日）	14:00 オックスフォード出発（専用車）15:00 ヒースロー空港到着 18:30 ヒースロー空港発（JL044便）	機内
16	3月24日（月）	17:20 羽田空港第3ターミナル到着	

1限目の Practical English は実践的な英語レッスン。2・3限目は英国の歴史、芸術、文学、文化などをテーマにした英語による授業。午後は「芸術・建築」、「文学」の2グループに分かれて、プロジェクトワーク（調べ学習、現地視察、インタビュー等）を行い、最終日にプレゼンテーションを実施。

3. 成果と課題

【外国語運用能力】 自己評価 (回答数 7)			評価別割合		評価平均値	
項目	レベル	評価基準	事前	事後	事前	事後
内容分量	4 十分	幅広いテーマに関して一定時間の会話ができる。	22.2%	33.3%	2.33	3.22 (+0.89)
	3 概ね十分	相手の質問に答えるなど、身近な話題については一定時間の会話ができる。	11.1%	55.6%		
	2 やや不十分	挨拶など型にはまった内容であれば、数回程度の会話をやり取りすることができる。	44.4%	11.1%		
	1 不十分	何を話してよいか分らず、会話にならない。	22.2%	0.0%		
積極性	4 十分	現地の人に対して、自分から積極的に声をかけて話すことができる。	33.3%	66.7%	2.44	3.67 (+1.23)
	3 概ね十分	スタッフや先生、パティなど特定の現地の人に対しては、自分から声をかけることができる。	0.0%	33.3%		
	2 やや不十分	話しかけられれば会話をする気になる。	44.4%	0.0%		
	1 不十分	現地の人と会話する気が全くない。	22.2%	0.0%		

【プレゼンテーション力】 自己評価 (回答数 7)			評価別割合		評価平均値	
項目	レベル	評価基準	事前	事後	事前	事後
発声	4 十分	声量・発声・スピードを部分的に調節し、聴衆を飽きさせない工夫がある。	11.1%	44.4%	2.11	2.67 (+0.56)
	3 概ね十分	全体を通して、声量・発声・スピードがいずれも適切であり、理解しやすい。	11.1%	55.6%		
	2 やや不十分	声量・発声・スピードのいずれかが不十分で、内容の理解を妨げている。	55.6%	0.0%		
	1 不十分	声量が小さく、発声も不明瞭な上に、スピードも速いため聞き取れない。	22.2%	0.0%		
構成	4 十分	聴衆（聞き手）を含めて内容を発展させられるよう、構成上の配慮がなされている。	22.2%	33.3%	2.78	3.33 (+0.55)
	3 概ね十分	内容の理解は十分で、聴衆（聞き手）が理解するのに適切な構成となっている。	33.3%	66.7%		
	2 やや不十分	自分では発表内容を理解しているが、配慮不足で聴衆（聞き手）には伝わっていない。	44.4%	0.0%		
	1 不十分	発表者が内容を十分に理解できておらず、構成も聴衆（聞き手）に配慮できていない。	0.0%	0.0%		
姿勢	4 十分	適切なタイミングでアイコンタクトをするなど、聴衆（聞き手）への配慮ができていない。	55.6%	66.7%	2.78	3.44 (+0.66)
	3 概ね十分	一方的な場面は少ないものの、資料・原稿に頼る部分が一部みられる。	0.0%	11.1%		
	2 やや不十分	資料・原稿から目を離すことはあるものの、一方的な場面がほとんどである。	11.1%	22.2%		
	1 不十分	資料・原稿に目を向けたままで、聴衆（聞き手）の様子にも注意を払っていない。	33.3%	0.0%		

【今回の研修に参加して良かったと思う点】 全回答 (9名)

①日本以外の文化に触れることができ、自分の積極性も高まった。自立心が養われた。/ ②全部良かった。楽しいし学べて良い経験だった。/ ③ホームステイを行うことで外国人との会話ができるようになった。/ ④ヨーロッパに来たことがなかったので良い経験になった。/ ⑤海外の文化に初めて触れることができ、様々な文化に対応できるようになった。/ ⑥自分の英語能力のなさを痛感できたのがとても良かった。/ ⑦全部良かった。行って良かった。/ ⑧全てが楽しくとても良い経験になった。/ ⑨色んな人と話せた。

【今回の研修に参加して困った点 (改善してほしいと思った点)】

①授業の内容 (3名)。/ ②ホームステイ先の問題 (3名)。/ ③本人の英語力。/ (他の2名は特になし)

フィリピン・セブ島語学研修 (高校1年生・グローバルコース)

教諭 三浦 健太 (外国語科)

期 間：2025年5月25日(日)～6月1日(日)
場 所：フィリピン・セブ市
サンホセレコレス大学附属高校
マクタン島 (プランテーションベイ・リゾート)
参加者：グローバルコース高校1年生33名 (含むオンライン参加1名)、引率教員2名



※右写真はリゾート観光地でのもの

1. 目的

- ① セブ市の語学学校において、5日間、集中的に英語レッスンを受講することにより、英語4技能の向上、英会話力の向上と国際コミュニケーション能力の向上を図る。
- ② 初期指導の合宿の1つとして、新クラスの友人関係、リーダーシップ、協力性、責任感を養う。
- ③ フィリピン文化を体感し、グローバル人材として必要な異文化理解の素地を養う。

2. 内容

※5/19(月) Zoomによる事前英語技能確認テスト

	月日	スケジュール (宿泊場所: Bayfront Hotel North Reclamation Area)
1	5月25日(日)	12:00 成田空港集合、15:00 成田発、20:30 セブ着、21:00 ホテル着 13:00-17:30 英語レッスン、18:00 ホテル着
2	5月26日(月)	6:30 ホテル朝食、8:30 ホテル発、9:00 サンホセ着、歓迎セレモニー&学内見学
3	5月27日(火)	6:00 ホテル朝食、7:30 ホテル発、8:00 サンホセ着、8:00-17:00 英語レッスン 17:30 ホテル着
4	5月28日(水)	6:00 ホテル朝食、7:30 ホテル発、8:00 サンホセ着、8:00-14:00 英語レッスン 14:00-17:00 サンホセ校現地交流会、17:30-18:30 SM ショッピングモール散策 19:00 ホテル着
5	5月29日(木)	6:00 ホテル朝食、7:30 ホテル発、8:00 サンホセ着、8:00-17:00 英語レッスン 18:00 ホテル着
6	5月30日(金)	6:00 ホテル朝食、7:30 ホテル発、8:00 サンホセ着、8:00-14:00 英語レッスン 14:00-16:30 卒業式、17:00 ホテル着
7	5月31日(土)	6:00 ホテル朝食、8:00 ホテル発、9:00-10:00 マクタンシュライン観光 10:00-13:30 リゾート地観光、14:30-17:30 SM シティモール散策、17:40 ホテル着
8	6月1日(日)	5:30 ホテル発、8:00 空港発、14:00 成田着

3. 成果と課題

(1) 成果

次項の表1～3は、セブ研修の期間中に Google Form で日々のアンケートを実施したものの一部である。留意点として生徒のアンケート回答率が日によって変動が見られたこと、プライバシー保護の観点から具体的な表現を避け、一部改変したことが挙げられる。

授業の難易度はどうですか				
	三日目	四日目	五日目	六日目
問題ない	0.0%	0.0%	11.1%	17.6%
何となく理解できる	40.0%	31.6%	44.4%	47.1%
難しい	60.0%	68.4%	44.4%	35.3%

(表1)

「課題」は進んでいますか				
	三日目	四日目	五日目	六日目
はい	30.0%	36.8%	50%	82.4%
いいえ	70.0%	63.2%	50%	17.6%

(表2)

明日挑戦したいことは何ですか				
	三日目	四日目	五日目	六日目
話す	50.0%	52.6%	50%	—
書く	0	0	0	—
聞く	5.0%	5.3%	0.0%	—
読む	0	0	0	—
その他	45.0%	42.1%	50%	—

(表3)

* 一日目は入国日、二日目は入校およびオリエンテーション授業のため未掲載。また、七日目は授業がなかったため未掲載。

** 表3の六日目は（英語のレッスンで）明日挑戦したこと、と解釈したためか記入がされていなかった（七日目は授業がないため）。

表1では、三日目から六日目にかけての授業難易度に対し『問題ない』と回答した生徒が17.6%に上昇し、その一方で『難しい』と回答した生徒が60%から35.3%に減少した。もちろん、授業内容が毎日変わることによる生徒の当該部分への知識理解の程度差があるとも考えられるが、概ね日が経つにつれ授業に対して生徒が順応したと考えることもできる。

表2はセブ研修の課題の進捗報告であり、外国の人に日本文化の認知度を聞きこむものである。セブ研修の行程上、その行動に制限がかかる日もあるが、これもまた、研修期間が経つにつれ外国の人に話しかける勇気が培ってきての結果だと思われる。三日目では『はい』と答えた生徒が30%であったものが、六日目には80%を超えた。現地の英語レッスンにおいて、英語を話すことにためらいや、気恥ずかしさなどが薄まってきたのだろう。

表3は少し注意が必要であり、『その他』の数値が高いのは「授業を頑張る」「勉強する」など、『話す・書く・聞く・読む』のどれか一つに分類しづらいものを当てはめた結果である。そのことを踏まえると、生徒が語学研修で一番興味を持っていることは会話であることがわかる。残念なことは、表からわかるように『書く・読む』に対する向上心はその他の分野よりも比較的低いようだ。

3つの表を合わせて考えると、今回のセブ研修の成果は、「話す気持ちを常に持ちつつ（表3）、英語のレッスンを続けるうちに徐々に理解が増していき（表1）、自信がついたことで課題をこなすために話しかけにいく（表2）ことができた」と考える。

(2) 課題

環境面と学習面に対する問題が今後の課題だと考える。環境面としては、この研修期間に体調を崩した生徒が数名現れた。入学して間もないという時期的なことや海外研修という特別な機会であることもその一因と考えられるが、セブ島での寒暖差（外は暑く、室内は寒い）、宿泊施設周辺地域の騒音にストレスを感じる生徒がいたことも認めなければならない。フィリピン文化を味わうということも本研修の目的の1つでありながらも、よい状態での学習を提供できるように更なる魅力的な行程を考えていきたい。

もう一つの学習面に対する課題は、英語を使うことへの前向きな姿勢を事前学習で十分に根付かせられなかったことである。外国語に触れ合うことを期待して入学してくる生徒が多く、本研修が入学してから2か月後に設定されているのならば、その間に英会話をより多く体験させ、現地の初日から臆することなく話す活動ができれば、もう少し生徒が自信をつけて帰国できたのではないかと考える。

オーストラリア・アデレード語学研修（高校2年生・グローバルコース）

専任講師 Glenn Serviss（外国語科）

期 間：2025年7月20日（日）～8月2日（土）

場 所：オーストラリア サウスオーストラリア州 アデレード市

参加者：生徒36名、引率教員：2名

1. 目的

海外語学研修およびホームステイ体験を通じて国際理解を深める。異文化世界を主体的に体験すると共に日本の生活文化を積極的に伝え、現地の人々と文化や価値観の違いを共有して友情と絆を深め合う。

2. 内容

日付	内容	宿泊
7月20日（日）	成田空港 第2ターミナル、カンタス航空（QF080便）にてメルボルンへ	機内泊
7月21日（月）	メルボルン到着 入国手続き、乗り継ぎ。 カンタス航空（QF697便）にてアデレードへ出発 アデレード到着後、専用車にて各ホスト校へ移動 ホストファミリーと対面後、各ホームステイ先へ	ホームステイ
7月22日（火）	〈午前〉英語レッスン 〈午後〉学校体験授業に参加	ホームステイ
7月23日（水）	〈午前〉英語レッスン 〈午後〉学校体験授業に参加	ホームステイ
7月24日（木）	〈午前〉英語レッスン 〈午後〉学校体験授業に参加	ホームステイ
7月25日（金）	〈午前〉英語レッスン 〈午後〉学校体験授業に参加	ホームステイ
7月26日（土）	休日 ホストファミリーと過ごす	ホームステイ
7月27日（日）	休日 ホストファミリーと過ごす	ホームステイ
7月28日（月）	校外研修（野生動物園など）	ホームステイ
7月29日（火）	〈午前〉英語レッスン 〈午後〉学校体験授業に参加	ホームステイ
7月30日（水）	〈午前〉英語レッスン 〈午後〉学校体験授業に参加	ホームステイ
7月31日（木）	〈午前〉英語レッスン 〈午後〉さよならパーティー・修了証授与	ホームステイ
8月1日（金）	各ホスト校へ集合。専用バスにてアデレード空港へ移動 カンタス航空（QF742便）にてシドニーへ シドニー到着後、国際線ターミナルへ乗り継ぎ カンタス航空（QF025便）にて空路、羽田空港へ	機内泊
8月2日（土）	羽田空港 国際線ターミナル到着、入国手続き後、解散	

3. 成果

(1) 生徒の感想

（回答23名の中から）：This study abroad experience was truly valuable, not only improving my English skills but also helping me grow as a person. At first, I was anxious and had many problems, but I overcame them in my own way. Now, I miss Australia. I will definitely visit my host family and buddy again. Thank you for this wonderful study abroad program. / 今回は、英語で会話をすることが想像以上に難しく感じた。しかし、2週間という短い期間の中で多くの経験をし、これからの生活に活かせる様々なことを身につけることができたと思う。 / I was nervous before going to Adelaide, but my host family and buddy were really kind, so I could enjoy studying abroad in Australia. / 今回のホームステイでは会話のレベルが上がったと言うよりも、新しい単語や日常的な英語の中で耳を慣らすことができとても良い経験になりました。 / ホームステイは私にとってとても良い経験になりました。緊張したが相手に伝わるように工夫できた。

(2) ルーブリックによるアンケート結果 (回答数 36 名)

項目	レベル	評価基準	評価別割合		評価平均値	
			事前	事後	事前	事後
英語運用能力	4 十分	現地の人と幅広いテーマで雑談を一定時間続けることができる。	9.5%	41.7%	2.79	3.38
	3 概ね十分	相手の質問に答えることはできるが、自分から質問したり、話を広げたりすることはできない。	60.3%	55.5%		
	2 やや不十分	挨拶など、型にはまった内容であれば一定時間会話を続けることができる。	30.1%	2.7%		
	1 不十分	現地の人が言うことを理解できず、こちらが言いたいことも全く伝えることができない。	0.0%	0.0%		
異文化対応力	4 十分	自他の文化を客観的に考察し、従来の習慣にとらわれない生活のあり方を模索できる。	41.3%	71.3%	3.36	3.69
	3 概ね十分	様々な面で、従来とは異なる習慣を受け入れ、不自由なく生活することができる。	54.0%	26.8%		
	2 やや不十分	日常生活に関わる事柄について、異なる習慣を受け入れて生活することができる。	4.7%	1.8%		
	1 不十分	従来の習慣に固執し、異文化を全く受け入れることができない。	0.0%	0.0%		
プレゼン能力	4 十分	事前に準備していた内容を元に、新たな課題などを見出すことができる。	14.3%	15.8%	2.81	2.97
	3 概ね十分	内容を理解した上で、相手に伝わるプレゼンテーションができる。	52.4%	65.8%		
	2 やや不十分	内容は理解できているが、十分に伝えることができない。	33.3%	18.4%		
	1 不十分	内容について十分な理解がない状況でプレゼンテーションに臨み、相手に全く伝えることができない。	0.0%	0.0%		



①、② プレゼンテーションの様子



③ バディーと一緒に



④ 学校体験授業：ラグビー



⑤ 学校体験授業：アート



⑥ 校外研修：野生動物園

4. 課題

現地でのホストファミリー数の不足が大きな課題になっている。その背景にはコロナ禍があり、在宅勤務ができるために、かつて各家庭にあったゲストルームがホームオフィスに変わった。ホームステイ受け入れができる家庭が大幅に減り、以前になかった英語以外の言語を使用するホストファミリーに案内される生徒が増えた。

マレーシア研修

主事 石塚 俊文 (地理歴史・公民科)・教諭 井上 博人 (外国語科)

期 間：2025 年 7 月 28 日 (月) ～ 8 月 2 日 (土)

場 所：マレーシア・クアラルンプール ELC (English Language Company)

参加者：高校生 10 名 (1 年生 2 名、2 年生 8 名)、引率教員 2 名

1. 目的

- ①実践的な英語コミュニケーション能力の向上
 - ・現地の人に対して、自分から積極的に声をかけて話すことができる。
 - ・幅広いテーマに関して一定時間の会話ができる。
 - ・現地の人と会話する中で、誤った表現などに気づき、改善を試みることができる。
- ②異文化理解
 - ・中国系、マレー系、インド系などから構成される多民族国家において、多文化共生社会について理解を深める。
 - ・馴染みのない文化に対して抱きがちな偏見や関心の薄さを克服し、柔軟な思考と感性を鍛える。
 - ・ASEAN の優等生とよばれ経済成長を続けるマレーシアの経済的なダイナミズムを体感する。
- ③現地大学生との交流
 - ・大学生との交流を通じ、大学で学ぶことの意義や学ぶ姿勢について、自ら考える。

2. 内容

(1) 事前指導

実施日	時間	内容
7月1日(土)	11:00～12:00	参加者最終説明会(オンライン)
7月8日(土)	12:05～12:45	顔合わせ、ミニプレゼンテーマ決定
7月15日(土)	12:05～12:45	マレーシアに関するミニプレゼン

(2) 日程

	月日	時間	スケジュール	宿泊
1	7月28日(月)	8:00 10:20 16:45	成田空港第2ターミナルへ集合 成田空港よりマレーシア航空(MH089便)にてクアラルンプールへ クアラルンプール到着後、専用車にてホテルへ移動	ホテル
2	7月29日(火)	午前 午後	英語レッスン(語学学校) 英語実践アクティビティ(パビリオンKL・KLシティセンター)	ホテル
3	7月30日(水)	午前 午後	英語レッスン(語学学校) アジア太平洋工科大学(APU)訪問、屋台街	ホテル
4	7月31日(木)	午前 午後	英語レッスン(語学学校) 英語実践アクティビティ(ベタリングストリート・セントラルマーケット)	ホテル
5	8月1日(金)	午前 午後 23:30	英語レッスン(語学学校) 英語実践アクティビティ(IOIシティモール) 専用車にてクアラルンプール空港へ移動 マレーシア航空(MH088便)にて成田空港へ向け出発	機内
6	8月2日(土)	7:40	成田空港第2ターミナル到着後、解散	

(3) 事後課題 レポート提出 (テーマは「マレーシア」、A4用紙1枚、Googleドキュメントで作成)

3. 成果と課題

ルーブリックによる外国語運用能力 自己評価 (回答数9)

項目	レベル	評価基準	評価別人数		評価平均値	
			事前	事後	事前	事後
内容分量	4 十分	幅広いテーマに関して一定時間の会話ができる。	0	0	1.9	2.8 (+0.9)
	3 概ね十分	相手の質問に答えるなど、身近な話題については一定時間の会話ができる。	1	9		
	2 やや不十分	挨拶など型にはまった内容であれば、数回程度の会話をやり取りすることができる。	7	0		
	1 不十分	何を話してよいか分らず、会話にならない。	2	1		
語彙文法	4 十分	現地の人と会話する中で、誤った表現などに気づき、改善を試みることができる。	0	0	2.0	2.6 (+0.6)
	3 概ね十分	文法の誤りなどは気にせず、単語の連続ではなく、文で気持ちを表現することができる。	1	6		
	2 やや不十分	単語をつなげて意思を伝えることができるが、文法の誤りを気にして文では表現できない。	8	4		
	1 不十分	単語レベルでの会話ができない。	1	0		
積極性	4 十分	現地の人に対して、自分から積極的に声をかけて話すことができる。	0	5	2.6	3.5 (+0.9)
	3 概ね十分	スタッフや先生、バディなど特定の現地の人に対しては、自分から声をかけることができる。	6	5		
	2 やや不十分	話しかけられれば会話をする気になる。	4	0		
	1 不十分	現地の人と会話する気が全くない。	0	0		

ルーブリックによる異文化対応力 自己評価 (回答数9)

(外国の食事・トイレなどの住環境・衣服・生活習慣・芸能・言葉・宗教などへの対応力)

項目	レベル	評価基準	評価別割合		評価平均値	
			事前	事後	事前	事後
異文化理解	4 十分	ポジティブ・ネガティブの両面から、異文化を理解し共存のあり方を模索することができる。	1	5	2.8	3.5 (+0.7)
	3 概ね十分	異文化のポジティブな側面 (プラス面・良いところ) に注目することができる。	6	5		
	2 やや不十分	自国の文化と比較して、ネガティブな側面 (マイナス面) に着目して、異文化を捉える。	3	0		
	1 不十分	異文化に対して興味が持てない。	0	0		



【今回の研修に参加して良かったと思う点】参加生徒10名の意見・感想

外国の人とコミュニケーションをとることに積極的になった。/ 積極的に行動するようになって、英語を使うのが以前に比べて好きになった。/ 外国の人と会話する際にどのようなことを意識すればいいかわかったこと。/ いろんな国の人と同じ授業が受けられる。/ 完璧に話さなくても相手に伝わる。/ 現地のひとに話しかけられるようになった。/ 積極性と海外への恐怖心がなくなったから。/ 英語が自然としゃべれるようになったこと。/ マレーシアの特徴を強く感じられた。貴重な経験ができた。/ 英語をさらに意欲がでて、そして良い経験ができた。

【今回の研修に参加して困った点 (改善してほしいと思った点)】参加生徒4名の意見・感想

駅から自由行動になるときにどこに何があるか簡単に説明がほしかった。/ もっと観光がよかった。/ 街の匂い。/ 海外の野外研修のスポットの課題などが難しかった。/ (他の6名は「特になし」と回答)



カナダ・バンクーバー語学研修

教諭 森田 秀行 (外国語科)

期間: 2025年8月3日(日) ~ 8月12日(火)

場所: カナダ・バンクーバー CICCC (Cornerstone International Community College of Canada)

参加者: 高校生13名 (1年生7名、2年生5名、3年生1名)、引率教員1名

1. 目的

①英語4技能の向上

- 幅広いテーマに関して一定時間の会話ができる。
- 現地の人と会話する中で、誤った表現などに気づき、改善を試みることができる。
- 現地の人に対して、自分から積極的に声をかけて話すことができる。

②課題探究

- 事前に準備していた内容を元に、現地での新たな課題などを見出すことができる。
- 自分で探究した内容について、相手に伝わるプレゼンテーションができる。

③異文化理解

- ポジティブ・ネガティブの両面から、異文化との共存のあり方を模索することができる。



2. 内容

(1) 事前指導

実施日	時間	内容
7月4日(金)	12:40 ~ 13:00	事前ミーティング① (初顔合わせ、電子渡航認証登録の確認など)
7月6日(日)	11:00 ~ 12:30	最終説明会 (オンライン)
7月11日(金)	15:40 ~ 16:30	事前ミーティング② (自己紹介など)

(2) 日程

	月日	スケジュール	宿泊
1	8月3日(日)	21:55 羽田空港出発 (全日空 NH116 便) 14:50 バンクーバー空港到着、オリエンテーション ホスト宅へ移動	ホームステイ
2	8月4日(月)	<祝日>ダウントウンツアー	
3	8月5日(火)	<午前>英語4技能レッスン <午後>国際交流イベント① (現地大学生)	
4	8月6日(水)	<午前>英語4技能レッスン <午後>国際交流イベント② (各国留学生)	
5	8月7日(木)	<午前>英語4技能レッスン <午後>リンキャニオンハイキング	
6	8月8日(金)	<午前>英語4技能レッスン <午後>グランビルアイランド散策	
7	8月9日(土)	<午前>英語4技能レッスン <午後>修了式、自由行動	
8	8月10日(日)	<休日>ホストファミリーと過ごす	
9	8月11日(月)	13:45 バンクーバー空港着、16:45 バンクーバー空港出発 (全日空 NH115 便)	機内
10	8月12日(火)	19:00 羽田空港到着・解散	

(3) 事後課題 レポート提出 (テーマは「バンクーバー」、A4用紙1枚、Google ドキュメントで作成)

3. 成果と課題

(1) 成果

ルーブリックによる外国語運用能力 自己評価 (回答数 13)			評価別割合		評価平均値	
項目	レベル	評価基準	事前	事後	事前	事後
内容分量	4 十分	幅広いテーマに関して一定時間の会話ができる。	0.0%	30.8%	2.38	3.15 (+0.77)
	3 概ね十分	相手の質問に答えるなど、身近な話題については一定時間の会話ができる。	38.5%	53.8%		
	2 やや不十分	挨拶など型にはまった内容であれば、数回程度の会話をやり取りすることができる。	61.5%	15.4%		
	1 不十分	何を話してよいか分らず、会話にならない。	0.0%	0.0%		
語彙 文法	4 十分	現地の人と会話する中で、誤った表現などに気づき、改善を試みることができる。	7.7%	15.4%	2.38	3.00 (+0.62)
	3 概ね十分	文法の誤りなどは気にせず、単語の連続ではなく、文で気持ちを表現することができる。	23.1%	69.2%		
	2 やや不十分	単語をつなげて意思を伝えることができるが、文法の誤りを気にして文では表現できない。	69.2%	15.4%		
	1 不十分	単語レベルでの会話ができない。	0.0%	0.0%		
積極性	4 十分	現地の人に対して、自分から積極的に声をかけて話すことができる。	15.4%	46.2%	3.08	3.38 (+0.30)
	3 概ね十分	スタッフや先生、パティなど特定の現地の人に対しては、自分から声をかけることができる。	76.9%	46.2%		
	2 やや不十分	話しかけられれば会話をする気になる。	7.7%	7.7%		
	1 不十分	現地の人と会話する気が全くない。	0.0%	0.0%		

ルーブリックによる異文化対応力 自己評価 (回答数 13) (外国の食事・トイレなどの住環境・衣服・生活習慣・芸能・言葉・宗教などへの対応力)			評価別割合		評価平均値	
項目	レベル	評価基準	事前	事後	事前	事後
異文化理解	4 十分	ポジティブ・ネガティブの両面から、異文化を理解し共存のあり方を模索することができる。	53.8%	76.9%	3.54	3.77 (+0.23)
	3 概ね十分	異文化のポジティブな側面(プラス面・良いところ)に注目することができる。	46.2%	23.1%		
	2 やや不十分	自国の文化と比較して、ネガティブな側面(マイナス面)に着目して、異文化を捉える。	0.0%	0.0%		
	1 不十分	異文化に対して興味を持っていない。	0.0%	0.0%		

【今回の研修に参加して良かったと思う点】参加生徒 13 名の意見・感想

* 現地の人とコミュニケーションを取ることが出来、多くのことを学んだ。ホストファミリーと仲良くなり、今後も連絡を取り合う。/ * とても楽しく、ためになった研修だった。異文化理解のきっかけとなった。/ * 初めて教会に行き、宗教の違いを実感し、宗教に興味を持った。/ * 積極性が磨かれた。自ら話しかけ続けることにより、文法の誤りを気にせずに会話できるようになった。/ * チップや日本とは異なる交通ルール等、海外ならではの経験ができた。/ * 異文化理解が進んだ。/ * 授業だけではなく、カナダのいろいろな場所に行けた。/ * 現地の方のコミュニケーションがとても楽しかった。/ * 英語をたくさん話せた。/ * 生活や言語など日本では体験できないことを体験できた。自分たちで行動することも多かったので、判断力や自己管理など成長できた。/ * 日常生活の中で英語をたくさん使えるようになった。/ * 少しずつ現地の人とのコミュニケーションが活発になった。/ * テストでは事前に勉強ができるけれど、会話となるとその場ですぐに文章を組み立てないといけないので、その場数を実際に踏めてよかった。即興で英語会話を実践できる機会は貴重だと思った。

【今回の研修に参加して困った(改善してほしいと思った)点】参加生徒 4 名の意見・感想(他 9 名「特になし」)

* ホストファミリーとの関わりが予想より少なかった / * グランビルアイランドの自由行動時間の不足(3名)

(2) 課題

バンクーバー郊外の家庭に滞在し、電車やバスで語学学校まで通学する体験ができ、授業+校外研修プログラムも充実していた。現地の大学生との交流プログラムも意義深いものであった。今後は、授業の難易度をひとりひとりに合わせたプログラムにできるように、さらなる改善を望む。

フィリピン英語ディベート交流会

教諭 井上 博人 (外国語科)

期 間：2025 年 8 月 11 日 (月) ~ 8 月 15 日 (金)

場 所：フィリピン ティンバー シティ アカデミー
(Timber City Academy)

参加者：高校 2 年生 4 名

担当者：井上博人



1. 目的

本校生徒とフィリピン生徒の友好を深め、ディベートについての知識、技能の向上を図る。

2. 内容

(1) これまでの経緯

2025 年 1 月に英語ディベート世界交流大会 (PDA 一般社団法人パラメンタリーディベート人財育成協会主催) で対戦した Timber City Academy (フィリピン・ブトゥアン市) と大会後もオンラインでディベートの練習試合を重ね、交流が深まった。このたび同校より英語ディベート交流会の招待を受け、実施に至った。

(2) 主な内容

1	8 月 11 日 (月)	9:30 成田発 (PR431 便)、13:40 マニラ着、17:35 マニラ発 (PR2965 便)、19:20 ブトゥアン着
2	8 月 12 日 (火)	9:00 市内散策 (アグサン川、Magsaysay Bridge、セント・ジョゼフ大聖堂、SM モールなど) 13:30 Timber City Academy 歓迎セレモニー、14:00 授業体験、17:00 ディベート交流会 19:30 夕食会 (出席者: キム校長、理事夫妻、ディベートコーチ)、21:30 ホテル帰着

歓迎集会では全校生徒が中庭に集まり、アイドルグループが来たかのような歓声だった。式典後は通常授業に参加、もちろん英語での授業であったが、本校生 4 名は概ね理解できたとのことである。放課後、ディベートクラブの生徒たちと即興型の合同練習 (簡単な論題を 1 分の準備時間で 2 分間スピーチを行い、質問を 3 つ受けるもの) を行った。理事経営のホテル兼レストランで夕食会が行われ、郷土料理を楽しんだ。

3	8 月 13 日 (水)	午前中はホテルにてディベート準備、12:30 登校、13:00 体験授業、17:00 ディベート交流会 (Asian Style で試合)、19:30 夕食会、21:30 ホテル帰着
---	--------------	---

体験授業で印象的だったのは英語の授業で行われていた Public Speech である。Ambition (大望、野心)、Friendship (友情、友好関係)、perseverance (忍耐) などの One word が書いてあるカードを引き、1 分間準備、その後スピーチを行う。最後に人前でスピーチする際の気持ちの変化、不安、コツなどを報告していた。

ディベート交流会では Asian Style で試合を行った。スピーチ時間は 7 分・7 分・7 分で、日本の高校で行われているものよりも長い。論題を理解するのに時間がかかってしまい、スピーチ準備がうまくいかなかった。世界レベルで議論するためにはレベルアップが必要なことを、生徒たちは自覚したようである。

夕食会ではフィリピン料理の「ドッグエッグ」と呼ばれるバロット (balut) に挑戦した。バロットは、孵化直前のアヒルの卵を茹でたもので、フィリピンの屋台などでよく見かけるローカルフードである。キム校長によると「バロットを食べなければ人生の半分を損している」と言われているようである。

4	8 月 14 日 (木)	午前中はホテルにてディベート準備、12:30 登校、13:00 ディベート交流会 Round 1 Motion: Ban single use plastic Round 2 Motion: Sportswomen should be paid the same as sportsmen 17:30 ブトゥアン市長表敬訪問、18:00 夕食会、20:30 ホテル帰着、帰国準備
---	--------------	--

午後にディベートを 2 ラウンド行った。司会およびジャッジは、日本の PDA 世界大会出場経験のある Timber City Academy の卒業生で、試合後の生徒へのコメントは的確で参考になることばかりであった。その後、

ブトゥアン市長を表敬訪問した際、市長から東洋大学とブトゥアン市の関わりについてお話を伺った。2011年に東洋大学とブトゥアン市は Public-Private-Partnership (PPP) projects を結び、さまざまなことに取り組んだ経緯があるという。夕食会場となった Almont Resort Hotel は、綺麗で敷地が広く、Function Room も数多く設置されているため、語学研修（特に中学2年）の会場として利用可能であると感じた。また、キム校長、理事と本校への訪問について意見交換をすることができ、近い将来、日本での交流が期待される。

5 | 8月15日(金) | 6:50 ブトゥアン発 (PR2968便)、8:30 マニラ着、14:50 マニラ発 (PR432便)、20:30 成田着

3. 成果と課題

＜参加生徒の感想＞

* 「現地の生徒たちと練習する中で印象的だったのは、生徒自身がジャッジを担っていた点である。日本では先生や社会人など大人が判定を行うことが多いが、フィリピンでは高校生が積極的にジャッジとして議論に関わり、勝敗を決めるだけでなく、コメントや具体的なフィードバックまで丁寧に返していた。日本ではジャッジ不足が課題として指摘されることもある中で、この仕組みは、継続的に運営できる持続可能な英語教育の形だと感じた。また、即興で説明する力の高さにも驚かされた。1人7分のスピーチ時間があるにもかかわらず、ほとんどメモに頼らず、流れるように話し続けていた。準備時間に多くを整える日本のスタイルと比べ、フィリピンのディベートでは相手の発言を最後まで聞いた上で、その場で応答し、対話として議論を組み立てていく意識が強いように思った。ディベートは『準備した内容を述べる』だけでなく、『相手と向き合いながら思考を深める対話』であることを、改めて学んだ。」

* 「授業では、生徒の主体性の高さが印象的だった。日本では知識の暗記や理解が中心になることが多いが、フィリピンではクイズ形式やアクティビティを取り入れ、生徒が積極的に参加する授業が多く見られた。例えば数学の授業では、問題をクイズ形式で解かせることで、生徒の意欲を高めていた。楽しみながら学ぶ姿勢が自然に身につけていることが大きな違いだと感じた。特に大きな学びとなったのは、フィリピンチームとのディベート練習である。彼らのスピーチは、論理を述べるだけでなく、ジャッジに問いかけを行い、重要なポイントを強調しながら、聞き手の感情に訴えかけるものであった。いわば『ジャッジの心を動かす』話し方である。これまで、ディベートで最も重要なのは論理的にプロセスや具体例を説明することだと考えていたが、論理性に加えて、伝え方や感情への訴求も勝敗を左右する重要な要素であると感じた。この短期留学は、ディベート技術だけでなく、『伝える力』の本質を学ぶ貴重な機会となった。」

* 「Timber City Academy の生徒は、普段から日本よりも長いスピーチ時間で練習しており、指導方法も日本とは大きく異なっていた。特に、先生もディスカッションに参加しながら実践的に指導するスタイルが印象的だった。フィリピンの生徒はディベートへのモチベーションが非常に高く、難しい論題にも積極的に取り組んでいて、全体的なレベルの高さを強く感じた。また、私たちが普段あまり触れない知識や、よりグローバルな視点に基づいた議論が多く、スピーチの構成力や論理展開の明確さにも驚かされた。試合を通して、冷静さやリスニング力がまだ十分ではないこと、またスピーチの構成や説得力の面でも改善すべき点があることを実感し課題を見つけることができた。」

* 「最初は不安もあったが、Timber City Academy の生徒たちはとても温かく迎えてくれた。お菓子を分けてくれたり、積極的に話しかけてくれたり、さらに手紙や似顔絵まで用意してくれたおかげで、すぐに打ち解けることができ、安心して楽しい時間を過ごすことができた。授業は生物・物理・数学・英語だけでなく宗教の授業もあり、どの教科でも生徒が積極的に手を挙げて発言している姿がとても印象的だった。特に印象に残っているのは、与えられた単語について1分間で定義を考え、全員の前で説明するアクティビティである。短時間で考えをまとめて発表する力が重視されていると感じた。また、生物の授業では細胞について、ペアでスピーチ形式・インタビュー形式・劇のような形式など、さまざまな工夫をしながら説明していた。どの発表も完成度が高く、とても分かりやすかったことに驚いた。」

英語ディベートの世界大会で対戦したことをきっかけとして交流が実現し、さらに学び合うことができたことは大きな成果であった。次年度は Timber City Academy の本校訪問を実現させ、モデルディベートを多くの生徒の前で披露してもらい、本校生にグローバル社会で通用する英語力を感じてもらおう機会をつくりたいと考えている。それまでに本校生徒の英語力を少しでも向上させるため、国際交流活動をさらに盛んになるよう進めたい。

中華人民共和国駐日本国大使館主催 日本青少年陝西省・甘肅省訪問（高校2年生中国語会話受講推薦者）

教頭 鈴木 伸一（国語科）

期 間：2025年10月19日（日）～10月24日（金）

場 所：陝西省西安市、甘肅省敦煌市

参加者：生徒5名、引率教員1名（鈴木）

主催者：中華人民共和国駐日本国大使館

1. 目的

- ・日中青少年の相互理解と友好の促進。
- ・交流を通じた多角的な視野と国際感覚の育成。
- ・中国陝西省、甘肅省の歴史・文化・教育・環境・医療等の多様な分野への理解。

2. 内容

(1) 日程

今回の「日本青少年陝西省・甘肅省訪問」は、中華人民共和国駐日本国大使館の招待による事業で、茨城県日中友好協会の推挙を受けて、参加させていただいたプログラムとなる。よって、本校で行われる通常教育旅行・研修とは大きく異なっており、参加者の募集から締切りまでが約10日間、出発まで約20日と期日が短く、また旅行代理店が入らないため本校側での入念な準備が必要であった。旅程・内容は以下の通りで、西安外国語大学の学生との交流を始め、陝西省、甘肅省における歴史・文化・教育・環境・医療・科学・農林水産業等に係る幅広い関係箇所の見学等を通し、多角的な視点で研修を重ねることができた。

月日	日程
10月19日（日）	＜成田－西安＞ 12:30 成田 T2 集合、14:55 成田出発（MU594 便）、19:40 西安咸陽国際空港 第5ターミナル到着、21:30 ホテル長安驛大廈泊
10月20日（月）	＜西安 青少年交流・農村振興視察＞ 10:00 西安外国語大学（学生との交流）、14:00 鄠邑区栗峪口村を訪問（農村振興、民俗体験、座談交流）、16:30 八路軍西安弁事処見学、19:00 大唐不夜城步行街にて唐代文化街区を体感、20:30 ホテル長安驛大廈泊
10月21日（火）	＜西安 現代農業・歴史文化視察＞ 09:00 楊凌へ出発、10:30 楊凌現代農業モデルパーク視察 15:50 秦始皇帝陵博物院見学、18:30 ホテル長安驛大廈泊
10月22日（水）	＜西安－敦煌 移動＞ 8:00 陝西汽車集団 新エネルギー自動車フレーム工場視察、12:25 西安咸陽国際空港出発（MU2367 便）、14:40 敦煌国際莫高空港到着、15:30 敦煌光電博覧館視察・研修、首航節能 100MW タワー型太陽熱発電プロジェクト見学、18:00 ホテル敦煌賓館、19:30 「又見敦煌」演劇鑑賞、21:10 ホテル敦煌賓館泊
10月23日（木）	＜敦煌文化研修＞ 08:30 鳴沙山・月牙泉見学、10:30 莫高窟匠人村見学・研修、14:20 莫高窟デジタルセンター デジタル映画鑑賞、15:00 敦煌研究院との座談交流、16:00 莫高窟洞窟見学、19:30 敦煌ナイトマーケット散策体験、21:10 ホテル敦煌賓館泊
10月24日（金）	＜敦煌－北京－東京＞ 09:20 敦煌空港到着、10:55 敦煌空港到着出発（CA1248 便）17:00 北京首都国際空港出発（CA183 便）、21:30 羽田空港到着、解散

(2) 参加者

今回の訪問研修は、中華人民共和国駐日本国大使館主催によるもので関東圏の日中友好協会を通じて本校にお誘いがあった企画である。訪中団の構成は、神奈川県から大学生5名＋引率1名、群馬県から大学生10名＋引率2名、山梨県から中学生1名（引率無し）、茨城県は本校から高校2年生（グローバルコース）5名＋引率1名であった。茨城県内の学校の中から本校のみが唯一推挙されたのは、2012年から茨城県日中友好協会主催の中国語スピーチコンテストに毎年出場し、全国大会等の出場も果たしていること、中国語の授業が設置されていること、募集期間が短かったため、パスポート取得が済んでいる必要があったこと等が挙げられえる。本校内での選考に触れるが、中国語授業受講者であること、一人でも自立して活動・コミュニケーションできること、生



徒・保護者ともに中国のしきたりに順応できること等を満たした生徒を選出した。中国語を学んでいる生徒にとっては、スピーチコンテストも今回の訪問研修も実際に中国語を使用する好機となった。

3. 成果 <生徒の感想>

私はこの訪問を通して、多くのことを学び、貴重な経験をすることができました。全体を通して特に感じたのは、中国が非常に歴史と文化の深い国であるということです。西安にも敦煌にも多くの歴史的建造物があり、私もいくつかを実際に訪れることができました。西安の兵馬俑や敦煌の莫高窟は、歴史の教科書にも載っているほど有名な遺跡であり、授業で学んだ内容を自分の目で見ることで、理解がより深まったように感じました。



現地の方々と交流する中で、文化や言葉が違っていても、相手の思いやりやあたたかさはしっかりと伝わってくることを実感しました。最初は不安もありましたが、笑顔で接して下さったおかげで自然と緊張がほぐれ、もっと会話したい、もっと中国語を勉強したいという気持ちが強くなりました。また、短い時間の中ででしたが大学で友だちを作ることができて嬉しかったです。こうした交流の一つひとつが、自分の世界を広げてくれたと感じています。



私は今回の訪問の全体を通して、中国は先人から伝えられた遺産などの過去のもの、発電産業などの比較的新しいもの、どちらもともとも力を入れて重要視していることが伝わりました。歴史的価値のあるものや遺産の保護、発電や農林漁業、どれをとっても高度な技術が必要とされるので、これらをすべて行える中国の技術力はそれほどまでに高いものであると感心しました。中国 4000 年の歴史の中で作り上げられたたくさんのものを未来までつなげていくための技術はとても凄いものですが、実際に見てみないと実感しづらいものでもあると思うので、そうすることができて良かったです。



5日間中国に行き私は改めて中国の歴史や文化に触れました。中国は広大で地域によっても文化などが大きく異なることを再認識させられました。この体験を通して私は世界に対する視野がより一層広がったと感じます。また、中国に対する認識も大きく変わりました。中国の人々は、どの地域の方もとても優しくくださり、言葉が通じないときには翻訳やジェスチャーなどを通してコミュニケーションを図るなど、中国でしかできない体験をさせていただきましたことに心から御礼申し上げます。



今回の訪問を通して、中国は長い歴史を大切にしながら、未来に向けて発展を続ける国だと感じました。西安では、古代の遺跡や文化が現代の街並みや生活に自然に溶け込んでおり、敦煌では、厳しい自然環境を活かして最新技術で発展を目指す姿を目の当たりにしました。両地域に共通していたのは、過去を守りつつ未来を切り開こうとする人々の姿勢です。この貴重な経験を通して、私は自分の国や地域の歴史・文化にも、もっと関心を持ってそれを将来にどう生かすかを考える重要性を学ぶことができました。



オーストラリア・アデレード語学研修（中学校3年生）

特任教諭 村上 綾（国語科）

期 間：2025年11月1日（土）～11月14日（金）

場 所：オーストラリア サウスオーストラリア州 アデレード市

参加者：生徒60名、引率教員3名（井上、松村、村上）



1. 目的

- ①英語学習：英語を用いた日常生活を送ることで、コミュニケーションの道具として英語を学ぶ。
- ②異文化理解・自己理解：外国語での生活を体験することで、異なる立場・異なる価値観の存在を理解するとともに、自国の文化や自己を見つめる機会を持つ。
- ③コミュニケーション：ホームステイを通して、自分の気持ちを伝え他者の気持ち理解する力や社会性を磨く。
- ④自然体験：南半球オーストラリアの自然（気候・植物・動物）を直に体験する。

2. 内容

(1) 事前学習

- ①グローバル探究 科目である「教養」「国際理解」を活用し、各自で課題の発見や事前調査、英語落語の準備などを行った。
- ②中学3年の創造祭では、「English Skit」に挑戦した。訪問校での上演は実施しなかったが、オリジナルの脚本を作成し、生徒たちが主体となって作品を完成させた。内容は、日本の昔話であった。また、各生徒は自ら設定したテーマに基づき、オーストラリアについて調べ学習を行い、ポスターを作成して展示した。
- ③旅行者者（ISS）による語学研修説明会を実施した。さらに「ホームステイの心得」について教室にて講義を行った。

(2) スケジュール

月日	内容
11月1日（土）	16:20 成田空港第2ターミナル集合、19:20 成田空港発（QF080便）
11月2日（日）	07:45 メルボルン空港着、乗り換え、12:25 メルボルン空港発（QF683便） 13:20 アデレード到着、各ホスト校へ⇒ホストファミリーと対面後、各ホームステイ先へ
11月3日（月） ～12日（水）	各学校での体験授業・校外研修など〔宿泊〕ホームステイ
11月13日（木）	（午前）Farewell party、14:50 アデレード空港発（QF742便）シドニーへ 17:15 シドニー到着 乗り換え 21:25 シドニー空港発（QF025便）羽田へ
11月14日（金）	05:25 羽田空港到着 解散

(3) 事後指導

オーストラリアで感じたことや学習したこと、また自身が事前学習で調べた内容をもとに現地で調査・確認したことなどを書いた報告書をひとりひとり作成した。



3. 成果

(1) 事後アンケート結果（一部抜粋）

Q1	アデレード語学研修は有意義な研修であったか？	YES 98.2%	NO 1.8%
Q2	語学力は向上したか？	YES 94.0%	NO 6.0%
Q3	2週間という期間は適切だったか？	長い % 17.5%	短い 49.1%
*「適切」…33.3%			
Q4	高校で留学してみたいか？	YES 68.4%	NO 31.6%
Q5	一番身に付いた力は？	Listening47.4%	Speaking52.6% Reading 0%

これらの結果から、多くの生徒が今回の語学研修に高い満足感を示していることがわかる。出国前は不安や緊張から憂鬱さを感じていた生徒もいたが、研修が始まると、ホストファミリーや現地校のパディと過ごす中で充実した生活を送り、有意義な研修であったと振り返る声が多く聞かれた。また、滞在期間の短さを惜しみ、さらなる語学力向上を望む感想も多かった。加えて、中学2年生の創造祭で発表した英語落語を研修先でも披露し、浴衣姿で演じたことで日本文化への関心を高め、現地の日本語クラスでも好評を得た。



(2) 生徒達の感想

*語学研修を通して、英語を聞き取って理解する力がとても伸びたと思います。ホームステイ先では、英語を聞き取ることはできたものの、返答が難しかったのが悔しいです。「次の語学研修に行くまでにある程度話せるようになる！」というモチベーションにつながりました。

*最初は、どんな家でどんな生活をするのか不安がいっぱいでした。実際には現地の人はとてもフレンドリーで話しやすいとても楽しい二週間になりました。一番印象に残っていることは学校のみんなでしたアスレチックです。成長できたことは英語を聞けるようになった事と話せるようになった事です。

*語学研修はとても楽しく、時間があつという間に過ぎて短く感じました。中でも特に心に残っているのは、現地の担任の先生が私の誕生日にケーキを作ってくれたことで、とても嬉しかったです。研修を通して、英語の発音が以前より良くなり、使える単語のバリエーションも増えたと感じています。それほど充実した研修だったため、帰国する際には帰りたいと思うほどでした。今回の語学研修は、楽しみながら成長できた貴重な経験だったと思います。



4. 次年度の課題

①語学力の向上

生徒たちは、英語で自身の考えや思いを伝えようと意欲的に取り組んでいた。全体的にリスニング力は高く、相手の話を理解することができていたが、その内容を踏まえて英語で返答することに課題が見られた。一方で、話そうとする姿勢は十分に見られたため、今後は英語で発話する機会をさらに増やすことで、スピーキング能力の向上が期待できる。

②携帯電話・SNSについて

研修においては、携帯電話を持参しないという決まりがある中で、持参している生徒が見られた。一方で、クロームブックを活用し、保護者とGメールで連絡を取るなど、決まりを守りながら工夫する生徒もいた。こうした状況から、決まりを守る家庭と守らない家庭の間で、不公平感を訴える声も聞かれた。今後は、携帯電話やSNSの適切な使い方について、ネットリテラシーの観点からも指導が必要であると感じた。

フィリピン英語研修（中学校2年生）

教諭 木村 誠（数学科）

期 間：2025年11月2日（日）～11月8日（土）

場 所：フィリピン共和国 セブ島 University of San Jose- Recoletos

滞在先：Bayfront Hotel North Reclamation Area

参加者：生徒 62名、引率教員 4名（上岡、張貝、加藤由、木村）

1. 目的

- ① フィリピンの大学施設で5日間の英語研修を受講し、英語コミュニケーション能力の向上を図る。
- ② 研修を通じて友人との親睦を深め、また集団行動の大切さを学び、協調性、自主性を養う。
- ③ 現地の学生や中高生との交流により、フィリピンの文化を学び、異文化理解能力の育成を図る。



2. 内容

(1) 日程

	月日	時間／行程
1	11月2日（日）	11:45 成田空港第2ターミナル集合、14:45 成田空港発（PR433便） 19:15 マクタン・セブ空港到着、送迎車でホテルへ移動しチェックイン
2	11月3日（月）	7:30 朝食、8:30 出発、9:30～オリエンテーション・大学見学、昼食、 13:00～16:30 マンツーマンレッスン（45分×4コマ） 17:30～21:00 夕食・自学、21:30 点呼・消灯
3	11月4日（火）	8:00 朝食、午前ホテル待機（台風接近）、 14:30～SM City Cebuにて昼食・ショッピング、 17:30～21:00 夕食・自学、21:30 点呼・消灯
4	11月5日（水）	6:30 朝食、7:30 出発、 9:00～12:00 マンツーマンレッスン（45分×4コマ）、昼食、 13:00～18:30 マンツーマンレッスン・グループレッスン（45分×6コマ）、 19:30～21:30 夕食・自学、22:00 点呼・消灯
5	11月6日（木）	6:30 朝食、7:30 出発、 9:00～12:00 マンツーマンレッスン・グループレッスン（45分×4コマ）、昼食 13:30 サンホセレコルトス大学附属中高生との交流会 (1) パディ紹介 (2) アクティビティ (3) 現地校生によるフィリピン紹介 (4) 本校生による日本文化紹介・英語落語発表 (5) プレゼント贈呈・写真撮影など 18:30～21:00 夕食・自学、21:30 点呼・消灯
6	11月7日（金）	6:30 朝食、7:30 出発、 9:00～12:00 マンツーマンレッスン・グループレッスン（45分×4コマ）、昼食、 13:00～16:00 マンツーマンレッスン（45分×2コマ）・卒業式 16:30～19:30 SM Seaside City Cebuでショッピング 20:00～21:00 夕食・自学、21:30 点呼・消灯
7	11月8日（土）	5:10 出発、5:30 マクタン・セブ空港到着、8:05 マクタン・セブ空港発 PR434便）、 13:35 成田空港到着

(2) 英語レッスン

11月3日（月）～7日（金）の5日間では、マンツーマンレッスンとグループレッスンを受講した。1対1や1対3の少人数グループで行われた。内容は、英語による文法のレッスンが行われ、生徒たちは先生方の指示や説明を理解し、取り組まなければならない。英語でしかコミュニケーションが取れない大変さはあるが、フィリピンの先生方は生徒のレベルに合わせた指導をしてくださり、楽しく受講することができた。

(3) サンホセコロルス大学附属中高生との交流会



現地の生徒が中心となり、フレンドリーで陽気な生徒たちのおかげでスムーズに交流会を行うことができた。本校生も次第に楽しく交流する姿が見られ、英語落語の発表や日本文化の紹介の発表も行い、現地生徒も興味深く聞いてくれた。日本のお菓子のプレゼントや、日本の遊びをともに楽しむ姿も見られ、生徒たちにとって思い出深い一日となった。

(4) 事後指導（生徒作文）

I had a lot of learning and great experiences. I had classes every day and learned new English grammar and difficult vocabulary. The teachers were very friendly and cheerful. And they liked singing songs. If they have just a minute, they are going to sing even during the class. I really like that view. I realized that singing is a part of the Filipino culture.

I also learned how to live in a country outside of Japan. There are many big differences between the Philippines and Japan. There are also terrible experiences that make me feel bad sometimes. For example, we had a blackout at the hotel because of the typhoon. And I stayed on the 10th floor, so I had to go up and down the stairs. I felt really tired. Also, the food was not to my taste. But I got the ability to think "It's OK." even if it is not OK, so I managed to get by somehow.

And also, I thought by experiencing different cultures, we can realize good things about our own country and good things about other countries. I was so surprised at the restroom in the Philippines because the water doesn't flush. So, I once again felt how convenient Japan is. On the other hand, I was so sad when I arrived at Narita airport because no one was singing there. In the Philippines, there are a lot of people singing anywhere. Compared to Japanese people, Filipinos are very cheerful people, and it is very nice. To realize good things about our own country and good things about other countries, I was able to see a new world.

Therefore, through this experience, I really want to study abroad more and more. For that I must improve my English skills.

3. 成果と課題

英語レッスンは、マンツーマンレッスン・グループレッスンともにバランスよく実施することができた。英語に触れ続ける5日間を経験し、語学力の向上に対する意識が変わりつつあるように感じた。また、3日目の台風の影響により、4・6日目のレッスンが増加したことは心身の疲弊を招き、体調を崩す生徒も見られた。

昨年度までとは研修地が変更され、多くのことが初めてとなったフィリピン語学研修であった。特に今回は、直前の地震や、台風の直撃など自然災害への対応を余儀なくされた。日程に関しては、最終日早朝の出発だったが生徒全員が遅れることなく集合し、無事に成田空港に到着することができた。次年度は、安全と学習効果を両立させる体制の構築が必要と考えられる。

総じて、過密日程であったが英語研修として英語漬けの5日間を提供することができたと思う。

オーストラリア・シドニー語学研修(高校2年生・特進コース)

教諭 先田 興為智 (外国語科)

期 間：2025年12月9日(火)～12月18日(木)

場 所：Sydney, NSW, Australia

参加者：生徒109名、引率教員4名(石塚、小林、小池、先田)

1. 目的

- (1) 海外研修を通して、世界規模で活躍できるグローバル人材の育成を図る。
- (2) 現地大学生との交流や寮生活を経験して、異文化理解、語学力の向上を図る。

2. 内容

研修先は Macquarie University で、宿泊先は大学の学生寮である Robert Menzies College であった。寮では生徒1人につき1部屋が割り当てられ、現地での大学生と同様の学習環境であった。また最寄駅や大型ショッピングセンターまで徒歩5分という恵まれた立地条件での研修となった。グループ活動時には必ず担当の大学生がついており、現地校訪問時には、生徒1人につき1人以上の現地高校生がバディとして設定されているなど、英語を使う機会が豊富に用意されていた10日間の研修であった。

3. 日程

	月日	曜日	AM	PM
1	12月9日	火		22:00 羽田空港出発
2	12月10日	水	08:45 シドニー到着	オリエンテーション・キャンパスツアー Macquarie University
3	12月11日	木	9:00-16:00 英語研修	Macquarie University
4	12月12日	金	9:00-16:00 現地校訪問	男子：Epping Boys High School 女子：Cheltenham Girls High School
5	12月13日	土	9:00-16:00 シドニー市内観光	観光客に英語でインタビュー
6	12月14日	日	9:00-16:00 タロンガ動物園観光	観光客に英語でインタビュー
7	12月15日	月	シドニー大学見学	マーケットリサーチ
8	12月16日	火	9:00-16:00 課題探究 発表練習	Macquarie University
9	12月17日	水	課題探究 英語発表・表彰式	22:05 シドニー空港出発
10	12月18日	木	05:25 羽田空港到着	解散



4. 成果と課題

(1) 事前アンケート結果

○ オーストラリア研修で伸ばしたい英語の力

1位 話す力	48.5%
2位 聞く力	22.9%
3位 即興での英問英答力	18.1%
4位 読む力	9.5%
5位 書く力	1.0%

(2) 事後アンケート結果

① オーストラリア研修で一番伸びたと思う力

1位 聞く力	54.3%
2位 話す力	35.0%
3位 即興での英問英答力	19.0%
4位 読む力	1.0%
5位 書く力	0.7%

② この研修中に学んだこと、感じたことを書いてください。

- ・英語を話すことへの抵抗を今回の研修でなくすことができた。将来はこの経験を活かし、英語を使って世界中の人々とコミュニケーションをとっていききたい。
- ・自分の課題探究のテーマである「ペットボトルのリサイクルについて」に関してオーストラリア研修中に新たな課題を見つけることができました。日本にはないリサイクル制度に興味を持ちました。
- ・研修に参加したことで、英語がもっと喋れたら楽しいだろうなと思うようになり、英語学習のモチベーションが高くなった。冬休みは単語と文法の総復習をして、英語の点数を上げていきたい。
- ・カンタス航空のCAさんとお話することができて、国際系の仕事にあらためて就きたいと思った。
- ・海外への大学の留学を考えるようになりました。留学に向けて英語の勉強を頑張ろうと思います。

(3) 今後の課題

今回の研修が初めての海外渡航となる生徒がほとんどであったが「自分の英語が通じる」ということが実感できたので自分の英語力に自信を持った生徒が多く見られた。現地校訪問で異国の生徒とつながりができたことが、貴重な体験となったようである。事前アンケートでは「英語を話す力」を伸ばしたいという生徒が最も多かったが、事後アンケートでの第1位は「英語を聞く力」であった。今後もプレゼンテーション能力が問われていく世代であるので、英語での発信力を高めることができる研修の在り方を模索していきたい。



シンガポール研修（高校2年生・中高一貫コース）

教諭 森山 真帆（国語科）

期 間：2025年12月11日（木）～12月16日（火）

場 所：シンガポール

参 加 者：生徒61名、引率教員3名（鈴木伸、森山、大島）



1. 目的

- ① 5年間の中高一貫コース・課題探究の総仕上げとしてグローバル人材としての一層の成長を目指す。
- ② 英語学習：英語を用いた日常生活を送ることで、コミュニケーションの道具として英語を学ぶ。
- ③ 第二次世界大戦での日本とシンガポールの関係を知り、戦争・平和について考える機会を持つ。
- ④ シンガポールマネジメント大学の学生との交流、シンガポールの生活や文化を体感する。

2. 内容

(1) 事前学習

- ① グローバル探究科目である「課題研究」や英語の授業を活用し、各自の課題の発見や事前調査、英語プレゼンテーションの準備などを行った。
- ② 高校1年次創造祭では中間報告のプレゼンテーション、2年次創造祭では英語のスライドを用いてプレゼンテーションを行った。
- ③ 事前アンケートを実施した。
- ④ 旅行者者（ISS）による語学研修説明会を2回実施した。

(2) 日程

学生寮：Hwa Chong Institution Boarding School

	月日	時間	行程・内容	宿泊
1	12月11日(木)	7:20 10:00 16:30	成田空港第1ターミナル（南ウイング）集合 成田空港発（SQ637便）、シンガポールへ シンガポール・チャンギ空港到着、専用車にて学生寮へ移動 チェックイン及び現地生活オリエンテーション	学生寮
2	12月12日(金)	終日	■ Workshop（NUS Venture Company Wateroam）「水」について ■ 異文化探究フィールドワーク（マーライオンパーク） ■ 平和学習フィールドワーク（War Memorial Park）	学生寮
3	12月13日(土)	終日	■ 異文化探究フィールドワーク（現地大学生と一緒に行動） Research Interview、Chinatown、Spectra Ilight show	学生寮
4	12月14日(日)	午前 午後	■ 平和学習フィールドワーク 旧フォード工場、シンガポール国立博物館 ■ シンガポールマネジメント大学訪問 現地大学生の前でプレゼンテーション発表・大学生交流	学生寮
5	12月15日(月)	日中 夕刻 20:55 23:55	■ ユニバーサルスタジオシンガポール（USS） 専用車でシンガポール空港へ移動 チェックイン・出国手続き 飛行機（シンガポール航空638便）にて空路成田へ	機内
6	12月16日(火)	7:30	成田空港第1ターミナル（南ウイング）到着後、解散	-

(3) 事後学習

- ① 報告書の作成（個人：課題研究要旨／グループ：Research Program、シンガポール報告書）
- ② 事後アンケートの実施
- ③ 年度末の校内発表（プレゼンテーション）

3. 評価 / 事前・事後アンケート [アンケート回答数：事前 n = 44 / 事後 n = 59]

(1) 英語・世界・将来について

① 英語をもっと勉強したいと思う

評価	事前	事後
そう思う	65.9 %	62.7 %
どちらかといえばそう思う	31.8 %	33.9 %
どちらかといえばそう思わない	2.3 %	3.4 %
そう思わない	0.0 %	0.0 %

② 海外に行くのが楽しみである

評価	事前 (%)	事後 (%)
そう思う	45.5 %	50.8 %
どちらかといえばそう思う	27.3 %	22.0 %
どちらかといえばそう思わない	20.5 %	20.3 %
そう思わない	6.8 %	6.8 %

③ 世界の人と積極的にコミュニケーションを取りたい

評価	事前	事後
そう思う	47.7 %	49.2 %
どちらかといえばそう思う	36.4 %	35.6 %
どちらかといえばそう思わない	13.6 %	11.9 %
そう思わない	2.3 %	3.4 %

④ 将来の夢や希望を見つけない

評価	事前	事後
そう思う	40.9 %	55.9 %
どちらかといえばそう思う	45.5 %	39.0 %
どちらかといえばそう思わない	11.4 %	3.4 %
そう思わない	2.3 %	1.7 %

(2) 本研修の全体的な評価 (n = 59)

- ① シンガポール研修は有意義であったか。 [有意義であった 50.8%、どちらかといえば有意義であった 44.1%、どちらかといえば有意義でなかった 5.1%、有意義でなかった 0.0%]
- ② 自分の語学力は向上したと思うか。 [向上した 27.1%、どちらかといえば向上した 57.6%、どちらかといえば向上していない 10.2%、向上していない 5.1%]
- ③ 5日間の研修期間は適切であったか。 [適切であった 61.0%、短い 30.5%、長い 8.5%]
- ④ 一番伸びたと考える英語力は何か。 [Speaking 42.4%、Listening 50.8%、Reading 5.1%、Writing 1.7%]
- ⑤ 今後伸ばしたいと考える英語力は何か。 [Speaking 47.5%、Listening 22.0%、Reading 18.6%、Writing 11.9%]

研修後のアンケートの「研修は有意義であったか」に対し、「有意義だった・どちらかといえば有意義だった」と回答した生徒が 94.9% おり、この研修に対しての満足度が高いことがわかる。「英語力は向上したか」に対しては「向上した・どちらかといえば向上したと思う」と回答した生徒が 84.7% であった。一方「向上しなかった・どちらかといえば向上しなかった」と回答した生徒も 16.3% であったが、これは積極性が大きくかかっていると感じる。今回の宿泊施設は寮（2～4 人部屋）であったし、集団での移動が多くあった。ホームステイであれば話す必要性が出てくるが、今回は話さなくともやり過ごしてしまう状況であった。Research program で一人が必ず主となってインタビューするようにという課題を与えていたものの、現地大学生やほかのメンバーに頼ることもあったようである。自分から話しかけることをもっと積極的に行ってほしいと思うが、英語が分からない・通じないのではないかという自信の無さが一因であるようにも思う。

「一番伸びたと考える英語力は何か」に対し「Listening」と答えた生徒が 50.8%、「今後伸ばしたいと考える英語力は何か」に対し「Speaking」と答えた生徒が 47.5% であった。これはシンガポールマネジメント大学での生徒発表の結果と一致すると考えられる。現地大学生の前で発表し、その発表について質疑応答をしたとき、聞き取ることはできたものの、自分の考えを英語で答えることができなかったという生徒が多くみられた。質問内容を予想し、事前に解答を用意しておけば少しは回避されたかもしれないが、とっさに答えられるほどは熟達していないことが浮き彫りになった。「なんという単語を使えばいいのか分からず答えられなかったのが悔しかった」「後になって簡単な質問だったと気が付き、答えられなかったのが悔しかった」などという生徒の声も聞かれた。現地の人の英語が、普段聞いている英語とあまりにも違いすぎて聞き取れなかったという生徒もいたが、次第に耳が慣れてきたようである。これはアデレード語学研修でも同様であった。

日本文化研修 in Kyoto

教諭 青木 敏史 (外国語科)・教諭 野崎 環 (数学科)

期 間：2025 年 12 月 14 日 (日) ～ 12 月 17 日 (水)

場 所：京都市

参加者：中高一貫コース 高校 1 年生 63 名、引率教員 4 名

1. 目的

- ① 国文化への知識・理解を深めることで、自分が日本人であるというアイデンティティを確立する。
- ② 自国文化を発信するための必要な知識を養い、次年度のシンガポール語学研修を有意義なものとする。
- ③ 集団生活を通して、規律や約束を守りながら、協力すること・自主的に動く態度を育てる。
- ④ 校外での活動を通して、公共のマナーをわきまえた社会性を育成する。

ねらいとして、一貫コースの生徒は、中学 2 年次のフィリピン・セブ島、中学 3 年次のオーストラリア・アデレードでの語学研修を通じて、海外の文化や生活に触れている。高校 1 年次の研修は、日本の伝統文化に触れることで、自国の文化の理解と外国人への日本の伝統文化を発信する力を育てることを目的としている。これらの成果を踏まえて高校 2 年次には、シンガポールの大学でプレゼンテーションを行う。この校外での研修の一環の伝統文化研修であるので、一般的な中学校の修学旅行の内容ではなく、それぞれ設定したテーマの中で、京都ならではの場所を見学して日本の伝統文化について体験させるとともに、京都の食文化にも触れられるよう、その場所や店の特色ある食事を体験できるようにする。また、京都市内の大学見学を通じて進路選択に資する。

2. 日程

行程の考え方：前半 2 日間はテーマ別行動、3 日目は班別自主行動、4 日目は進路選択のための体験

日次	月日(曜)	行程
1	12/14 (日)	ご利用・京都味通り 大型バス 2 台ガイド付き 9:12 のぞみ 19 11:40 12:50 14:00 15:20 16:35 東京駅 → 京都駅 → 美心園 → 伏見稲荷大社 → 上醍醐神社(やきもち) → 安井金屋蕎麦 → 宿舎 11:23 12:00 13:00 14:40 15:45 17:00
2	12/15 (月)	修学(寺社の境内物を中心に見学する) 中乗バス 1 台ガイド付き 24 名+青木先生 宿舎 → 醍醐寺 → 平等院鳳凰堂 → 福福寺(昼食) → 東福寺 → 三十三間堂 → 東寺 → 宿舎 9:30 9:10 10:00 10:30 11:15 11:45 13:05 13:35 14:25 14:45 15:25 15:45 16:30 17:00 修学(寺社の境内物を中心に見学する) 中乗バス 1 台ガイド付き 18 名+野崎先生 宿舎 → 金戒光明寺 → 富山護国神社 → 二条城 → 藤原寺・八木邸 → 西本願寺 → 宿舎 8:40 9:00 9:45 10:00 11:00 11:25 12:15 12:30 13:20 13:40 15:00 16:20 16:00 16:30 修学(修学旅行の地巡り) 中乗バス 1 台ガイド付き 14 名+金澤校長先生 宿舎 → 化野念仏寺 → 北野天満宮 → 上醍醐神社 → 下醍醐神社 → 昼食:花ごころ → 六波羅宮 → 宿舎 8:20 9:00 9:40 10:00 10:30 10:45 11:10 11:20 11:45 12:05 12:55 13:20 14:05 みやとや 柳屋子育館体験 …… 六波羅の辻・六波羅宮 → 藤辺野 → 宿舎 14:20 14:45 15:00 15:25 15:45 16:15 16:40 修学コース 大型タクシー 1 台ドライバーガイド 7 名+野崎先生 車庫前が案内 宿舎 → 龍安寺 → 大覚寺 → 大徳寺 → 道徳院 昼食:花ごころ → 二条城 → 南禅寺 → 御願堂 → 宿 8:20 8:40 9:20 9:35 10:15 10:40 11:40 12:00 13:20 13:40 14:20 14:50 15:30 16:00 17:00 17:20
3	12/16 (火)	09:00 ホテル → 班別タクシー研修(ジャンボタクシー 4 台/ミニバン 6 台 小型タクシー 2 台) → ホテル 【昼食:各自】 17:00
4	12/17 (水)	大型バス 2 台ガイド付き 09:10 11:30 13:00 14:45 16:06 ホテル → 京都大学 → 鳥久 → 京都駅 → 東京駅 9:30 12:00 13:30 16:57

3. 内容

(1) 事前指導

- 11月 5日 (水) 研修全体の目的や注意事項の確認
- 11月10日 (火) しおりの配布：しおりを利用し研修詳細の確認
- 11月14日 (金) タクシー研修計画① 調べ学習とともに立案する。
- 11月21日 (金) タクシー研修計画② 旅行会社と連携し、プランの再編集、確定に結び付ける。
- 11月28日 (金) 校長講話：京都の街並みから見える歴史的背景や現状に至る経緯など、詳細な解説をいただいた。また、食文化など伝統的な事柄にも触れている。
- 12月13日 (土) 最終確認：出発前日しおり再読み合わせ及び集合場所の確認。また、欠席連絡等の注意事項。

(2) 事後指導

- ① 京都文化に関するレポート ② 進路及び英語体験に関するレポート

3. 成果

充実した体験学習につながっている様子がうかがえる。以下生徒の作成したレポート例。



4. 次年度への課題

研修地への関心を高めるための事前指導を組織的に立案し、実行することが必要であると考えます。タクシー研修に関しては、着物など平常時に体験できないことへの関心が現れている一方で、食文化へ流れるケースが多く京都文化から離れた感があり、事前指導のあり方を考えさせられる状況であった。

ブリティッシュヒルズ語学研修

教諭 青木 敏史 (外国語科)・特任教諭 沖中 聖 (理科)

期 日：2026年1月5日(月)～1月7日(水)

場 所：福島県岩瀬郡天栄村大字田良尾字芝草 1-8 British Hills

参加者：高校生 33名 (1年生 13名、2年生 20名)、引率教員 2名

1. 目的

グローバル人材育成のため、語学学習及び国際理解を深める場を設定する。日常とは違った環境に身を置き英会話レッスンと異文化体験、合宿生活を行いながら参加生徒の英語を話すことへの抵抗感をなくす。また、英語学習に対する動機を高める。

2. 内容

【日程】

Monday, 5 January	Tuesday, 6 January	Wednesday, 7 January
9.30 出発 Have Lunch on the way 上河内 SA にて昼食	7.00 Buffet Breakfast (refectory)	7.00 Buffet Breakfast (refectory)
	09.00-10.30 Lesson 2 Travel Abroad Group 1: (Music) Emma Group 2: (Apothecary) Matt	Check out before 08.50 and store luggage 9.00-10.30 Lesson 6 Introducing Japan: Int. Group 1: (Trophy) Kimberley Group 2: (Wren lounge) Peter
14.00 Arrive at British Hills by own transport Store Luggage Check in, Orientation & Guide to Dining	11.00-12.30 Lesson 3 Introduction to Discussion Group 1: (Music) Shannon Group 2: (Apothecary) Victoria	11.30 Leave British Hills by own transport
16.00-17.30 Lesson 1 Survival English: Intermediate Group 1: (Apothecary) Shavaughn Group 2: (Music) Brett	12:40 Buffet Lunch (refectory)	11.30 出発 Have Lunch on the way 13.00 那須高原にて昼食 16.30 学校到着
18.00 Dinner (Dining Hall)	14.00-15.30 Lesson 4 Why Should you study English? Group 1: (Armoury) Randy Group 2: (Trophy) Amaury	
-Free Time Activities- 【CONNECT】19.30-20.30 (Ballroom) Victoria Alley 8.00-19.00 Gym -22.00 / Pub - 22.00	16.00-17.30 Lesson 5 Cooking Shortbread Group 1: (Henry II lounge) Peter Group 2: (Newton lounge) Ben Change for Dinner 18.00 Dinner (Dining Hall)	
-Free Time Activities- 【CONNECT】19.30-20.30 (Ballroom) Victoria Alley 8.00-19.00 Gym -22.00 / Pub - 22.00	-Free Time Activities- 【CONNECT】19.30-20.30 (Ballroom) Victoria Alley 8.00-19.00 Gym -22.00 / Pub - 22.00	



3. 成果（生徒の振り返り）

① Survival English: Intermediate

ブリティッシュヒルズの施設の場所について英語で学んだ。最初の授業で緊張したが、すごろくや体を動かす活動を通して、積極的に英語で話しみんなとの仲を深められた。

② Travel Abroad

リスニングの問題を聞き取りながら、パスポートを渡すときの返事の仕方や、飛行機に搭乗する際の検査、レストランでのオーダーの仕方などを生徒同士で学ぶことができた。各班にあるお店を回って注文する活動が楽しく、これから海外に行くときに使うであろう基礎知識を学べて嬉しかった。

③ Introduction to Discussion

班で理想のテーマパークを考えながら、いろいろなトピックに対してそれぞれの意見を交換しあいディスカッションを行った。ディスカッションをする際に使える表現を学ぶことができた。

④ Why should you study English ?

なぜ英語を勉強するべきなのかという問いに対して、世界の公用語や英語の使用率、人口などといった統計データと関連付けながら自分の意見を構築し、同じレッスンを受けている人同士で意見を交換し合うことができた。

⑤ Cooking Shortbread

ショートブレッドの基本的な作り方を英語で学んだ。分量などの英語を聞き取りながら理解して上手く作れたので達成感があった。自然と班のメンバーで片付けまで協力することができ、スムーズに終わられた。

⑥ Introducing Japan: Int.

日本の文化を英語で説明する活動を行った。自分たちにとっては当たり前の文化でも、意外にも世界的には知られていない事があると分かった。正座や茶道具など、英語でなんというかわからない単語が多く戸惑ったが、班で話し合い工夫することで楽しめた。

4. 課題

生徒たちにとっては周囲が常に英語である環境は、非常に魅力的に映る一方で、自分の英語力に自信がない生徒は自分を表現する時間が少ないように思えた。友人との時間を楽しむだけでなく、このような減多にない機会に異文化を体験する意味でも、自分の英語、さらには自分の考えに自信を持つことを普段から指導者側が意識すべきだと改めて感じた。英語の授業、さらにはHR等でも生徒が自分自身にプライドを持ち、堂々と自分の意見を述べることでできる姿勢を育てていきたい。それが『グローバル社会を生き抜く力』を育てることにつながるのではないだろうか。



2025 年度本校グローバル人材育成事業の成果と課題

主事 石塚 俊文（地理歴史・公民科）

1. 学校設定科目「グローバル探究」

今年度、本校（高校）で英語・中国語・フランス語のスピーチコンテスト、ディベート大会、課題研究の校外発表に参加した生徒数は延べ183名、うち175名が「グローバル探究」履修者（グローバル・特進・中高一貫コース）であった（表1）。また、トビタテ！留学 JAPAN には、3名が採用され、3名とも「グローバル探究」履修者であった（表2）。これらの成果は、「グローバル探究」の授業がプレゼンテーション能力の向上や主体性の育成に一定の効果を示したことを証明した事例であるといえる。

表1 2025 年度校外発表参加者に占める「グローバル探究」履修者の割合（高校）

校外発表項目	参加生徒延べ人数	うち「グローバル探究」履修者	
		人数	割合
外国語スピーチ	19	19	100.0%
英語ディベート	128	128	100.0%
課題研究	36	28	77.8%
計	183	175	95.6%

表2 トビタテ！留学 JAPAN 派遣留学生採用者に占める「グローバル探究」履修者

年度	本校採用者数	うち「グローバル探究」履修者数
2016-2021	9	7
2023	2	1
2024	2	2
2025	3	3
計	16	13

2. 海外研修・留学

今年度より、費用の高騰したハワイに変えてベトナム修学旅行（高2進学）が開始された。海外研修参加者数、海外ホームステイ体験者数、留学者数（1年留学・ターム留学）については、それぞれ昨年の水準を維持することができた。（表3）

表3 海外研修および海外ホームステイ体験者数・留学者数の年度別推移（延べ人数）

項目		2019 年度	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	2024 年度	2025 年度
海外研修 (うちホームステイ体験者数)	中学校	111 (52)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	133 (66)	124 (60)	124 (58)
	高校	446 (164)	0 (0)	6 (6)	203 (95)	289 (244)	365 (87)	370 (68)
ターム留学*	高校	7	0	2	29	13	2	3
1年留学**	高校	3	0	1	2	1	1	2

* 4～10 週間の留学 ** 1年留学については当該年度に留学を開始した人数

3. 訪日団・留学生受け入れ

表4 訪日団・留学生受け入れ人数および本校生によるホームステイ受け入れ人数の年度別推移

項目	2019 年度	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	2024 年度	2025 年度
訪日団・留学生受け入れ人数 (うちホームステイ受け入れ人数)	108 (79)	1 (0)	0 (0)	2 (0)	18 (0)	85 (67)	76 (18)

訪日団・留学生受け入れ人数は昨年度並みであったが、ホームステイ受け入れ数は大きく減少した。ホームステイを予定したフィリピン・セブ島の提携校が台風で被災、来日を断念したことも影響している。（表4）。

4 英語検定

今年度の本校高校生の英検2級以上取得率は全学年とも昨年度より低くなった(図1)。現在の在學生は、系列大学への新しい内部推薦基準(英検2級を受験し、合否ではなく一定以上のCSEスコアを義務付け)が導入された2023年以降の入學生であることから、準2級を取得せずにCBTにて2級を受験する例が増加したためと考えられる。高校3年生のコース別取得率(表5)を前年度と比べると、進学-4.3(27.6%→23.3%)、グローバル-21.6(94.3%→72.7%)、特進-5.1(71.8%→66.7%)、スポーツ-3.8(3.8%→0.0%)、中高一貫+3.5(45.0%→48.5%)となっており、中高一貫を除き、取得率が低下している。

図1 英検2級以上取得率・取得最高級内訳の年度別推移(高校)2026年3月14日現在

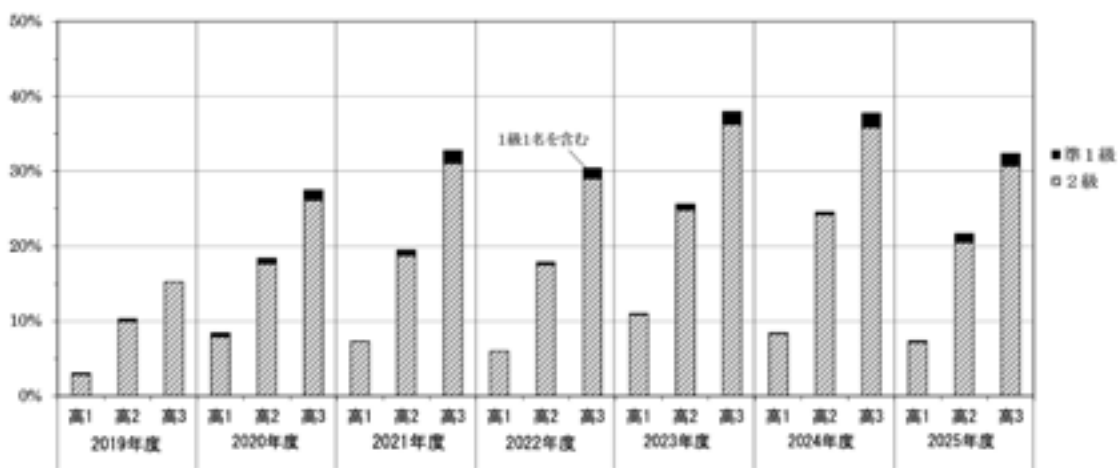


表5 2025年度 学年・コース別英検取得状況 各自の取得最高級(2026年3月14日現在)

学年	コース	在籍数	準2級		2級		準1級		計(準2级以上)	
			人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
中学1年	中高一貫	62	4	6.5%	0	0.0%	0	0.0%	4	6.5%
中学2年	中高一貫	66	12	18.2%	6	9.1%	0	0.0%	18	27.3%
中学3年	中高一貫	63	15	23.8%	7	11.1%	0	0.0%	22	34.9%
高校1年	進学	377	149	39.5%	16	4.2%	0	0.0%	165	43.8%
	グローバル	31	26	83.9%	3	9.7%	0	0.0%	29	93.5%
	特進	75	42	56.0%	13	17.3%	1	1.3%	56	74.7%
	スポーツ	26	2	7.7%	0	0.0%	0	0.0%	2	7.7%
	中高一貫	63	31	49.2%	9	14.3%	0	0.0%	40	63.5%
	計	572	250	43.7%	41	7.2%	1	0.2%	292	51.0%
高校2年	進学	346	143	41.3%	45	13.0%	2	0.6%	190	54.9%
	グローバル	38	9	23.7%	28	73.7%	0	0.0%	37	97.4%
	特進	109	63	57.8%	28	25.7%	3	2.8%	94	86.2%
	スポーツ	32	2	6.3%	0	0.0%	0	0.0%	2	6.3%
	中高一貫	61	23	37.7%	19	31.1%	2	3.3%	44	72.1%
	計	586	240	41.0%	120	20.5%	7	1.2%	367	62.6%
高校3年	進学	378	116	30.7%	85	22.5%	3	0.8%	204	54.0%
	グローバル	33	6	18.2%	21	63.6%	3	9.1%	30	90.9%
	特進	63	16	25.4%	39	61.9%	3	4.8%	58	92.1%
	スポーツ	37	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
	中高一貫	70	25	35.7%	33	47.1%	1	1.4%	59	84.3%
	計	581	163	28.1%	178	30.6%	10	1.7%	351	60.4%

5 次年度以降の課題

- ①海外研修費用の上昇対策。
- ②英検2級以上取得者の増加。
- ③留学生・訪日団の受け入れプログラム充実。
- ④外国語スピーチコンテスト参加者の増加。
- ⑤課題研究校外発表者の増加。
- ⑦海外大学進学者の増加。
- ⑧留学者数(ターム・1年)の増加。
- ⑨英語ディベート指導者の育成。

2025
グローバル人材育成事業
SGH ネットワーク
活動報告書

発行

 **東洋大学附属牛久中学校・高等学校**

〒300-1211 茨城県牛久市柏田町 1360-2

TEL.029-872-0350 (代) URL.<https://www.toyo.ac.jp/ushiku/>

〈発行者〉金澤利明 〈発行日〉2026年(令和8年)3月31日 〈制作〉(株)図書出版

東洋大学附属牛久中学校・高等学校